

# 宇地泊西原丘陵古墓群

詳細分布調査・個人墓地造成に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2008年（平成20年）3月

沖縄県 宜野湾市教育委員会

## 序

本報告書は、市内宇地泊に所在する周知の遺跡である宇地泊西原丘陵古墓群が包蔵される一帯において、個人の墓地造成に伴う開発行為に先立ち、平成16～17年度・平成19年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した詳細分布調査並びに埋蔵文化財緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

宇地泊地域は、1974年に返還された米軍基地キャンプブーン跡地を中心とした区画整理事業の進捗に伴って、立地条件の良さなどから商業地域や新興住宅地域として趣を一新しつつある状況にあります。そのような中で本古墓群は、住宅街の北側に立つヒートゥーモーと称する小高い石灰岩丘陵の周縁に形成されているのが確認されており、昨今の改築等により旧状を留めるものが少ない中で、亀甲墓については眉等の形状から古式の様相が窺えるものもあります。

今回の調査により、本古墓群の詳細な分布状況や古式亀甲墓の造墓状況について把握することができたほか、去った沖縄戦の痕跡である監視哨的陣地壕も確認されております。また、多くの出土遺物からは、蔵骨器や副葬品の様相について窺い知ることができることから、本古墓群が宇地泊集落の歴史を物語る上で貴重な資料であると言えます。

今回の調査成果が、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として活かされ、歴史学等の学術資料として御検討いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査の場を提供していただきました宮里 進氏・比嘉 憲松氏に対しまして厚く御礼申し上げます。また、多大な御指導を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化課、並びに貴重な御指導・御助言を賜りました市文化財保護審議会の先生方と宇地泊区自治会、その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2008（平成20）年3月

沖縄県 宜野湾市教育委員会  
教育長 普 天 間 朝 光



巻頭図版1 宇地泊西原丘陵古墓群 (昭和20年)



巻頭図版2 宇地泊西原丘陵古墓群 (平成10年作成オルソ)



巻頭図版3 宮里家古墓 調査前



巻頭図版4 ポーシ石列検出状況



卷頭図版5 宮里家古墓正面 遺構検出状況



卷頭図版6 墓室内 敷石造成状況

## 例 言

1. 本報告書は、個人墓地造成に伴う開発行為に先立ち、宜野湾市教育委員会が国・県の補助を受けて、平成16～17年度・平成19年度にかけて実施した宇地泊西原丘陵古墓群の詳細分布調査と埋蔵文化財緊急発掘調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系(旧座標系)第XV座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高(那覇)を基準とした高さである。
3. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図(1:2,500)を使用しているほか、調査範囲については、平成17年度に株式会社イーエーシーに委託して作成した地形測量図1:500を使用しており、調査区周辺及び当該古墓群については、一部加筆修正をして使用している。その他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営しているGISデータを使用している。
4. 本書で使用した層名は、農林水産省水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
5. 出土遺物のうち、石材・石製品の石質同定は宜野湾市教育委員会文化財保護審議員の大城逸郎氏、貝類・貝製品の同定は北谷町教育委員会の島袋春美氏に依頼した。
6. 本書の執筆は、城間 肇・伊藤 圭・上田圭一・斉藤崇人・橋本真紀夫があたり、執筆分担は下記する一覧に記してある。なお、本書の編集は許田栄美・杉村千重美・原田 円の協力を得て城間 肇・伊藤 圭が行った。

城間 肇 (宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主事)

第I章、第II章、第III章第2節1～2・4、第3節1～2、第IV章

伊藤 圭 (宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主任文化財保護指導嘱託員)

第II章、第III章第1節、第2節3、第3節3、第IV章

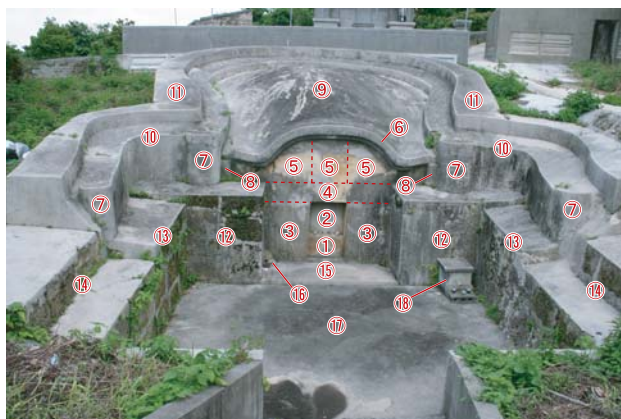
上田圭一・斉藤崇人・橋本真紀夫 (パリノ・サーヴェイ株式会社)

第III章第2節4

7. 現地調査・資料整理にて得られた遺物・実測図・写真・デジタルデータ等の各種調査記録は、すべて宜野湾市教育委員会文化課にて保管している。

### 凡例

ウコルイシ	ワラビヌティ
①香炉石	⑩童の手
ショウイシ	ヤジヨマーイ
②門石	⑪袖回り
シメイシ	ソデイシ
③隅石	⑫袖石
ショウカガイ	ナージミー
④門冠い	⑬庭積み
カミシ	ナークイ
⑤鏡石	⑭庭囲い
マユ	サミデー
⑥眉	⑮三味台
ウーシ	
⑦臼	⑯カピアンジ
クワウシ	ハカナー
⑧子臼	⑰墓庭
	カリハカ
⑨ポージ	⑱仮墓



宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第5巻 資料編4 参考

## 目次

序	
巻頭図版	
例言	
第I章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第II章 遺跡の位置と環境	5
第1節 遺跡の立地と地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第III章 宇地泊西原丘陵古墓群の調査の成果	9
第1節 遺跡の内容	9
1. 古墓群の概要	9
2. 古墓群の現状	10
第2節 宮里家古墓発掘調査の成果	23
1. 調査区の設定と層序	23
2. 遺構	26
3. 遺物	33
4. 自然科学分析調査の成果	63
第3節 比嘉家予定地不時発見古墓発掘調査の成果	66
1. 調査の概要	66
2. 遺構	66
3. 遺物	68
第IV章 結語	69
参考文献	71
報告書抄録	

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	宇地泊西原丘陵古墓群 (昭和 20 年)
巻頭図版 2	宇地泊西原丘陵古墓群 (平成 10 年作成オルソ)
巻頭図版 3	宮里家古墓 調査前
巻頭図版 4	ボーシ石列検出状況
巻頭図版 5	宮里家古墓正面 遺構検出状況
巻頭図版 6	墓室内 敷石造成状況

# 挿図目次

第 1 図	宜野湾市と宇地泊の位置	5	第 20 図	蔵骨器 3	40
第 2 図	宇地泊付近の古海岸図	6	第 21 図	蔵骨器 4	41
第 3 図	ぢゃな地域の遺跡分布図	8	第 22 図	蔵骨器 5	42
第 4 図	地形測量図 (H17 年度作成)	11	第 23 図	蔵骨器 6 (破片)	44
第 5 図	墓向きの割合 (H19 年 5 月現在)	19	第 24 図	蔵骨器 7	46
第 6 図	墓型式の割合 (H19 年 5 月現在)	20	第 25 図	沖縄産施釉陶器・無釉陶器	50
第 7 図	発掘調査地区位置図 (S=1/1500)	23	第 26 図	アカムヌー	53
第 8 図	グリッド設定図	23	第 27 図	中国産・煙管・簪	54
第 9 図	宮里家古墓 基本的層序	25	第 28 図	円盤状製品	55
第 10 図	古墓平面図	26	第 29 図	無文銭の出土割合	56
第 11 図	ボーシ平面図・見通し断面図	27	第 30 図	無文銭	57
第 12 図	墓庭平面図・庭積み見通し断面図・古墓正面図	29	第 31 図	角釘	59
第 13 図	厨子配置図	30	第 32 図	銃弾	60
第 14 図	墓室内平面図・見通し断面図	31	第 33 図	墓内堆積物の脂肪酸組成	63
第 15 図	宮里家古墓における人工遺物の組成	33	第 34 図	漆喰の X 線回折図	64
第 16 図	層位別人工遺物検出状況	35	第 35 図	漆喰の蛍光 X 線スペクトル	65
第 17 図	宮里家古墓における蔵骨器の組成	36	第 36 図	比嘉家予定地位置図 (S=1/1500)	66
第 18 図	蔵骨器 1	38	第 37 図	比嘉家予定地不時発見墓平面図・断面図	67
第 19 図	蔵骨器 2	39	第 38 図	比嘉家予定地不時発見古墓出土ボーシジャー底部	68

# 図版目次

図版 1	調査経過	4	図版 16	蔵骨器 5	42
図版 2	戦前の宇地泊集落 (昭和 20 年米軍撮影)	6	図版 17	蔵骨器 6	45
図版 3	宇地泊集落の土地利用図	7	図版 18	蔵骨器 7	46
図版 4	大謝名上空から見たキャンプブーン	7	図版 19	蔵骨器 8	47
図版 5	宇地泊西原丘陵古墓群 (遺跡西方より撮影)	9	図版 20	沖縄産施釉陶器・無釉陶器	51
図版 6	損壊前の状況	26	図版 21	アカムヌー	53
図版 7	ボーシ石列検出状況等	27	図版 22	中国産・煙管・簪	54
図版 8	庭積み (ナージミー)	28	図版 23	円盤状製品	55
図版 9	三味台 (サンミデー) 検出状況	28	図版 24	無文銭	57
図版 10	古墓損壊状況及び墓口検出状況	30	図版 25	貝製品	58
図版 11	宮里家古墓調査状況	32	図版 26	角釘・印判染付・ガラスビン	59
図版 12	蔵骨器 1	38	図版 27	銃弾	60
図版 13	蔵骨器 2	39	図版 28	自然遺物	62
図版 14	蔵骨器 3	40	図版 29	調査経過	66
図版 15	蔵骨器 4	41	図版 30	比嘉家予定地不時発見古墓出土遺物	68

# 挿表目次

第 1 表	ぢゃな地域の遺跡	8	第 22 表	沖縄産陶器観察表	49
第 2 表	墓型式	10	第 23 表	アカムヌー集計表	52
第 3 表	1～2 地区における墓のデータベース	12	第 24 表	アカムヌー観察表	53
第 4 表	2～3 地区における墓のデータベース	13	第 25 表	中国産陶磁器集計表	54
第 5 表	3～4 地区における墓のデータベース	14	第 26 表	中国産陶磁器観察表	54
第 6 表	4～5 地区における墓のデータベース	15	第 27 表	煙管・簪観察表	54
第 7 表	5～6 地区における墓のデータベース	16	第 28 表	円盤状製品集計表	55
第 8 表	6～7 地区における墓のデータベース	17	第 29 表	円盤状製品観察表	55
第 9 表	H 19 年 5 月までに造営された新規墓のデータベース	17	第 30 表	無文銭集計表	56
第 10 表	墓庭・墓口・三味台・屋根の大きさ (平均値)	21	第 31 表	無文銭の分類 (森田 2005)	56
第 11 表	三味台とカピアンジの有無	21	第 32 表	無文銭観察表	57
第 12 表	眉とボーシ・墓庭における各部位の比率	22	第 33 表	貝製品観察一覧表	58
第 13 表	宇地泊西原丘陵古墓群における主な亀甲墓の類型	22	第 34 表	角釘・印判染付・ガラスビン観察表	59
第 14 表	宮里家古墓データベース	29	第 35 表	銃弾集計表	60
第 15 表	人工遺物集計表	34	第 36 表	銃弾観察表	60
第 16 表	宮里家古墓の蔵骨器	36	第 37 表	貝類集計表	61
第 17 表	蔵骨器集計表	37	第 38 表	獣骨集計表	61
第 18 表	蔵骨器観察表 1	43	第 39 表	石類集計表	61
第 19 表	蔵骨器観察表 2	47	第 40 表	墓内堆積の土壤理化学分析結果	63
第 20 表	沖縄産施釉陶器集計表	48	第 41 表	出土遺物集計表	68
第 21 表	沖縄産無釉陶器集計表	48			



# 第 I 章 調査に至る経緯

## 第 1 節 調査に至る経緯

宇地泊西原丘陵古墓群は、『土に埋もれた宜野湾』（1989 年）・『宜野湾市文化財情報図』（2002 年）等にて報告がなされている「周知の遺跡」である。同古墓群は、昨今の改築工事等により原状変更がなされているほか、墓地造成や宅地建設等の開発行為によって消失する恐れがあり、詳細な分布調査等が必要とされていた。

### 宇地泊西原丘陵古墓群の個人墓地造成に伴う保護調整

宇地泊西原丘陵古墓群については、市文化課において定期的に文化財パトロールを実施している地域であり、今回の調査対象となった古墓についても、各種調査が必要な古式亀甲墓であるという観点から、聞き取り調査等の導入を検討している段階であった。ところが、平成 17 年 1 月初旬に実施した文化財パトロール中に、当該古墓敷地内において、個人墓地造成と思われる造成工事がなされているのを確認したため、当該古墓の保護を含めた今後の取り扱いについての調整が急務となり、宇地泊区自治会に所有者や工事の経緯について確認作業を依頼した。その後、当該古墓及び地所の所有者が沖縄市在の宮里 進氏であることが確認されたため、同氏に対して文化財保護法に基づく文化財の取り扱い及び埋蔵文化財調査の必要性について説明を行い、法定された所定の手続き等の実施について理解を得て、工事の延期を要請した。

### 緊急発掘調査の実施

保護調整の結果については、平成 16 年度中に県教育庁文化課に報告して、文化庁国庫補助事業としての発掘調査実施について承諾を得た後、地権者である宮里 進氏より、平成 17 年 3 月 22 日付で調査承諾書を受理して当該古墓の現況測量業務を委託発注し、平成 17 年度に予定する緊急発掘調査の基礎資料とした。

平成 17 年度は、地権者と調査期間や調査範囲等の調整を行い、平成 17 年 8 月 26 日付で改めて発掘調査承諾書を受理し、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づく発掘届を添えて、市教育委員会に個人墓地造成予定地の発掘調査の依頼がなされた。これを受けて市教育委員会は、平成 17 年 9 月 1 日付、宜教文第 37 号文書により、発掘調査通知を沖縄県教育委員会に提出し、緊急発掘調査に向けた手続きを終了した。

以上の経緯により、市教育委員会は文化財保護担当職員と文化財保護指導嘱託員並びに発掘作業員を充てて、平成 17 年 9 月 1 日より緊急発掘調査に着手した。緊急発掘調査の対象となったのは、宮里家が所有する古墓と当該敷地で、墓室内や亀甲周辺を含めた外部や墓庭部の遺構・造成状況の把握のための発掘調査を実施した。また、緊急発掘調査と平行して宇地泊西原丘陵古墓群全体の地形測量図（S=1/500）を作成し、それに基づいた詳細分布調査を展開した。その後、同年 9 月 14 日には、宇地泊西原丘陵古墓群内に所在する「宇魂の塔」南側に隣接する地所にて、個人墓地造成工事（比嘉家予定地）施工中に古墓の不時発見が確認されたことから、当該古墓についても、県教育庁文化課との調整を経て記録保存措置を講じており、最終的には同年 12 月 2 日の埋め戻し及び原状回復措置をもって緊急発掘調査を終了した。これにより、同年 12 月 19 日付け宜教文第 37 号文書にて、地権者である宮里 進氏に完了報告を提出し、宜野湾警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出したほか、県教育庁文化課には埋蔵文化財保管証をそれぞれ提出した。その後、沖縄県教育委員会より埋蔵文化財認定通知があった旨の事務連絡が宜野湾警察署長より、平成 18 年 1 月 18 日付文書にて宜野湾市教育委員会宛に提出がなされ、同年 3 月 31 日に県教育庁文化課宛に発掘調査終了報告を提出し、発掘調査及びそれに伴う事務手続きを終了している。

## 第2節 調査体制

宇地泊西原丘陵古墓群における詳細分布調査並びに個人墓地造成に伴う緊急発掘調査については、平成16～19年度にかけて実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は平成18～19年度に実施した。なお、調査体制については下記のとおりである。

事業主体 沖縄県宜野湾市教育委員会

事業責任者	教育長	宮城 義昇 (平成16年度)
	〃	普天間 朝光 (平成16～19年度)
事業総括	教育部 教育部長	外間 伸義 (平成16～18年度)
	〃 〃	新田 和夫 (平成18～19年度)
	教育次長	新田 和夫 (平成16～18年度)
	〃 〃	伊佐 友孝 (平成18～19年度)
事業事務	文化課 課長	城間 盛久 (平成16～18年度)
	〃 〃	和田 敬悟 (平成19年度)
	〃 文化財保護係長	呉屋 義勝 (平成16～18年度)
	〃 〃	豊里 友哉 (平成19年度)
	〃 文化財保護係主事	城間 肇 (平成16～19年度)
	〃 臨時職員	西銘 五月 (平成16～19年度)
	〃 〃	宮平 優子 (平成19年度)
調査業務	〃 文化財保護係主事	城間 肇 (平成16～19年度)
	〃 嘱託職員	宮平 盛晃 (平成16～17年度)
	〃 〃	伊藤 圭 (平成19年度)
調査作業員	〃 臨時職員	安座間翔、伊佐美幸、伊波敏夫、伊波晴美、上里やよい 奥浜恵子、久保田潤、米須清太、米須富士江、崎浜隆一 玉城文子、津波古美津江、照屋 充、德里末子、友利久美子 仲松光子、新田政江、仲村幸子、比嘉清子、比嘉ムツ子 町田弘美、宮城常正、宮里みどり (平成16～17年度)
資料整理業務	〃 文化財保護係主事	城間 肇 (平成18～19年度)
	〃 嘱託職員	伊藤 圭 (平成19年度)
	〃 〃	許田 栄美 (平成19年度)
	〃 〃	宮城 初枝 (平成19年度)
	〃 〃	杉村 千重美 (平成19年度)
資料整理作業員	〃 臨時職員	池田一美、伊佐祐姫、翁長和佳子、喜名ひとみ 古謝和美、杉村千重美、田盛謹代、新田政江、原田 円 比嘉ムツ子、平川邦子、真志喜正枝、宮里みどり、山田葉月 (平成18～19年度)

委託業務	測量業務（レーザー測量）	株式会社中部日本鉱業研究所（現アーキジオ沖縄）
	地形測量業務	株式会社イーエーシー
	画像解析業務	財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	自然科学分析調査	パリノ・サーヴェイ株式会社
	発掘労務作業	社団法人宜野湾市シルバー人材センター

#### 調査指導及び調査協力（職名等は当時）

調査指導及び協力者として以下の方々に指導・協力を仰いだ。

坂井 秀弥	文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官
禰宜田佳男	〃	文化財調査官
玉田 芳英	〃	〃
清野 孝之	〃	〃
井上 典子	〃	〃
大城 慧	沖縄県教育庁文化課	課長補佐
島袋 洋	〃	〃
盛本 勲	〃	主幹兼記念物係長
中山 晋	〃	専門員
知念 隆博	〃	〃
瀬戸 哲也	〃	〃
天久 辰雄	市宇地泊区自治会	宇地泊区自治会長
宮里 眞吉	〃	元市議会議員・元宇地泊区自治会長
宮里 進	沖縄市在（地権者）	
比嘉 憲松	浦添市在（地権者）	
嵩元 政秀	宜野湾市文化財保護審議会	会長
新垣 義夫	〃	委員
大城 逸郎	〃	委員
池田 榮文	琉球大学法文学部	教授
島袋 春美	北谷町教育委員会	

### 第3節 調査経過

#### 発掘調査の経過

宇地泊西原丘陵古墓群内における個人墓地造成に係る緊急発掘調査は、宇地泊区自治会に対して事前の協力依頼を行い、安全対策等の環境整備を実施した上で調査区のグリッド設定を行っており、実質的な現地調査を平成17年9月2日より着手した。

今回の調査は、市文化課文化財保護担当職員1人・発掘作業員9人・発掘労務作業員（市シルバー人材センター会員）3人の計13人で実施し、調査範囲は面積にして192㎡であった。

宮里家が所有する古墓の調査区設定については、墓室内から墓口に向けた略東西方向の軸線から、それに直交する形で略南北に任意の作業軸を設定した。これに伴い、古墓上部や下部の墓庭部に確認できる遺物の表面採集を行った。

調査は古墓上部から着手し、遺構確認作業とその造成状況や埋没過程等の基本的層序を把握するためのトレンチを設定して掘り下げたところ、ボージ周縁に配された石列やそれに伴う造成状況が確認された。

古墓下部については、墓庭部の北側と南側において当初より一部露出する庭積みの検出と造成状況の確認を行うと共に、袖石等の検出を行った。墓庭部の調査中、比嘉家予定地内の個人墓地造成中に古墓が不時発見されたことから、検出された古墓の石積等の遺構や内部状況について記録作業を行った。比嘉家予定地の緊急調査が収束した後は、宮里家所有古墓の調査を再開させた。墓庭部における遺構確認後の造成状況把握過程では、墓口付近や墓庭部にて多数の無文銭が検出されている。墓室内にはそれぞれ正面と左右に厨子を安置するための棚が構成されており、右側棚は集骨の機能も兼ねていた。さらに墓室内の堆積土を除去したところ、シルヒラシを構成する一次葬の際の棺桶用台座や墓室内を平坦面とするための石畳の造成が確認された。これら確認された遺構の記録作業後、自然科学分析調査用の各種サンプルを採取して、調査区内の原状回復を行い、平成17年12月2日には、調査に係る全ての作業を終了した。



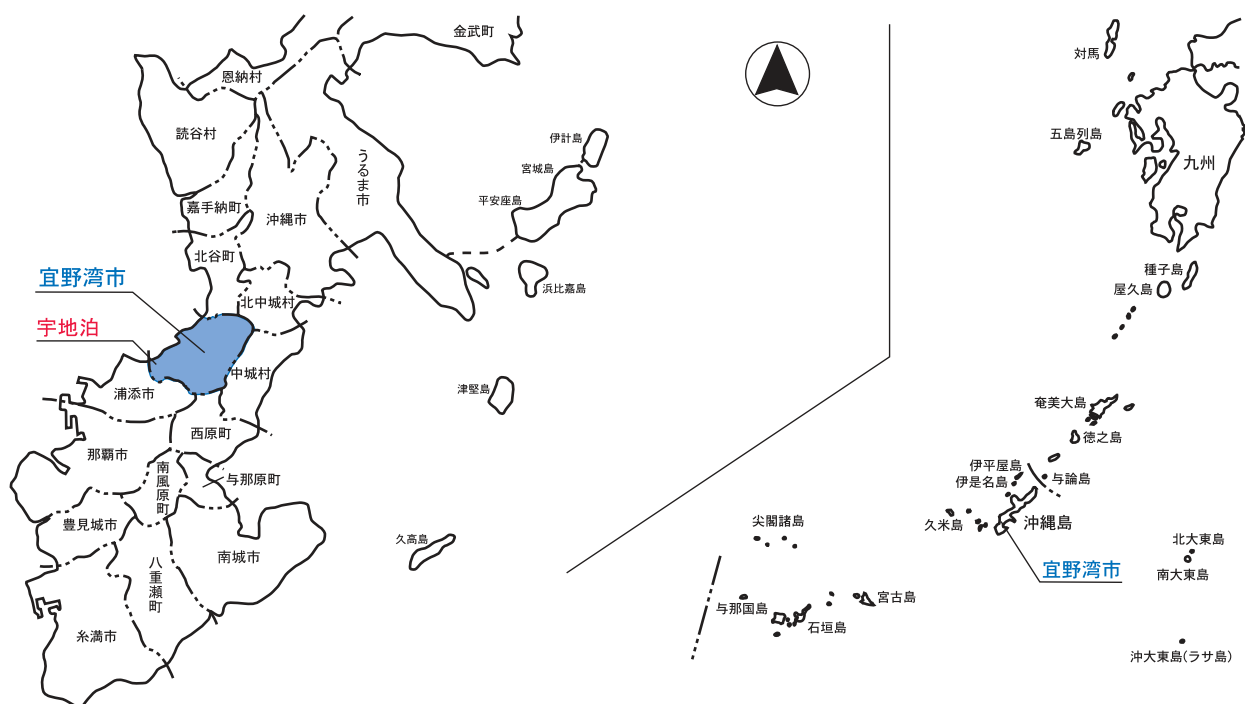
図版1 調査経過

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の立地と地理的環境

宇地泊西原丘陵古墓群の所在する宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあって、東シナ海に面し、北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市に隣接する。総面積は 19.37 km<sup>2</sup>を測り、略東西 6.1 km・略南北 5.2 kmの略長方形を成す。市域北西にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占有し、市民は飛行場基地を廻る外縁を居住域とする。基地は、本市における地目の 33.3%を占める（1992 年現在）。これは、本市地目の 36.3%にあたる民間の宅地に次ぐ広さである。

本市の地形は、起伏の小さい平地面が多いことが特徴で、海岸から内陸に向かって雛壇状を呈する 4つの海岸段丘から成る。第1面（低位段丘下位面）は、比屋良川の河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高 3～30 mの海岸低地である。第2面（低位段丘上位面）は、標高 30～40 mの石灰岩段丘で、大山・真志喜・宇地泊・伊佐の住宅地が密集する。第3面（中位段丘下位面）は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高 50～90 mの石灰岩段丘である。第4面（中位段丘上位面）は、標高 90 m以上の高位置にあり、赤道から宜野湾にかけて展開する緑地帯がその代表である。内陸側の 3つの段丘面（第2面～第4面）は、大半が琉球石灰岩層で成り立つ。この琉球石灰岩層の段丘縁には洞穴と湧水が点在し、本市の自然及び人文的景観の特徴となっている。河川は、浦添市・西原町との境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れる。比屋良川は、下流ではメーガーラまたは宇地泊川とも呼称される。この比屋良川と牧港川が流入し、宇地泊に接する一帯は入江を形成する。このような入江や河口を、方言で「ンナトゥ」と呼ぶ。宇地泊と牧港に挟まれたンナトゥは、ラップ状の平面形を呈すエスチュアリー（三角江）で、古くから港として利用された。



第1図 宜野湾市と宇地泊の位置

宇地泊は、浦添市との境を流れる比屋良川・牧港川の河口に接し、北西に東シナ海を臨む。主に、海岸段丘第2面を中心に発達した部落で、旧集落の大半は小字東原と西原に形成された。報告する古墓群は、この海岸段丘第2面と第1面の境となる丘陵斜面に立地する。遺跡内の段丘縁には、ヤクジャーガマと呼称される洞穴が広がる。また、この段丘縁には石灰岩丘が形成されており、石灰岩堤のヒートウジーが特徴的な、ヒートウモ一遺跡が所在する。

## 第2節 歴史的環境

宜野湾市の前身にあたる「宜野湾間切」は、浦添間切から「かよく・宜湾・かミ山・加数・志やな・大志やな・内ミな・喜友名・あら城・いさ」の10村、中城間切から「前ふてま・寺ふてま」の2村、北谷間切から「あきな」の1村を分割し、さらに「真志喜」村を新たに設けて1671年に新設された。1908年（明治41年）になると、「沖縄県及島嶼町村制」の施行により、間切は町・村に、村は字に改められ、宜野湾間切は宜野湾村となる。

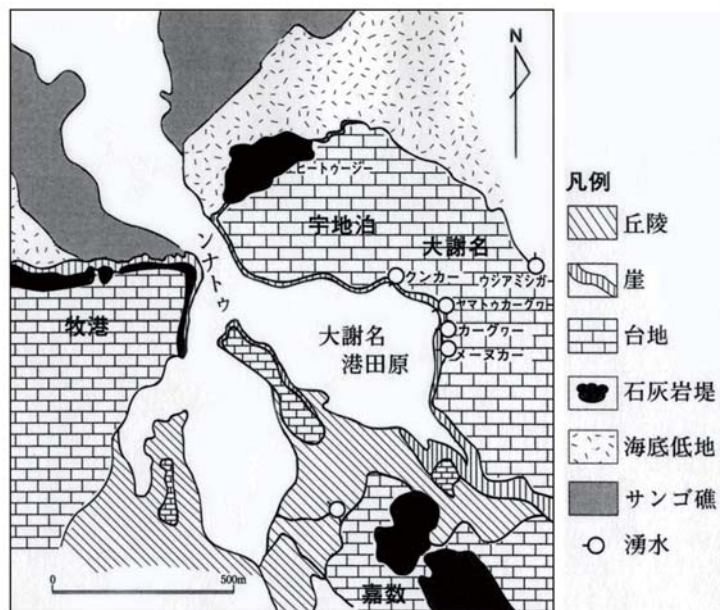
1664年に編纂された『琉球国高究帳』によると、大山・真志喜・大謝名・宇地泊を結ぶ一帯は「謝名村」と呼称されたようである。謝名村に記される高頭は、『琉球国高究帳』所収の村のうちで、唯一千石を越し、玉城や知念などの一間切全体の高頭を凌いでいる。これは、段丘縁に多く点在する湧泉の発達に因る。中位段丘の湧泉は低位段丘に弯入する可耕地を、低位段丘の湧泉は海岸低地の耕作地帯をそれぞれ灌水し、1960年代初期までは水稻を栽培する広大な水田が広がっていた。

この地域は「ぢやな」と呼称され、市域で特に遺跡密度が濃いことが指摘されている（呉屋 1991・1994・1996）。そして、これらの遺跡地の大半が、先史時代から古琉球ないし近世初期に至るまで継続することから、『琉球国高究帳』に現れる謝名村は、複数の自然集落が集まって、一“村”を構成していたと推測される（呉屋 1994）。

1649年編纂の『絵図郷村帳』に記された「内ミな」が現在の宇地泊である。これは、「内港」と書く。宜野湾間切の新設以前は、内港は牧港と共に浦添間切の管轄であり、内港は、“前港”を意味する牧港に対して呼称された地名であるという（宮城 1988）。



図版2 戦前の宇地泊集落（昭和20年米軍撮影）



第2図 宇地泊付近の古海岸図

前述したように、宇地泊と牧港に挟まれた「ンナトゥ」は古くから港として利用されていた。これは、河口が大きく湾入するために波が静かである上、エスチュアリー（三角江）を形成するためである（巻頭図版1）。エスチュアリーは、水深が深いため、大型船も入港できるのである。そのため、近世には中国船や日本船が来航して交易が盛んであったという。宇地泊は、このような地形に恵まれたことから、宜野湾村で唯一、半農半漁を生業とした部落で、漁撈と無縁な世帯は皆無であったという。

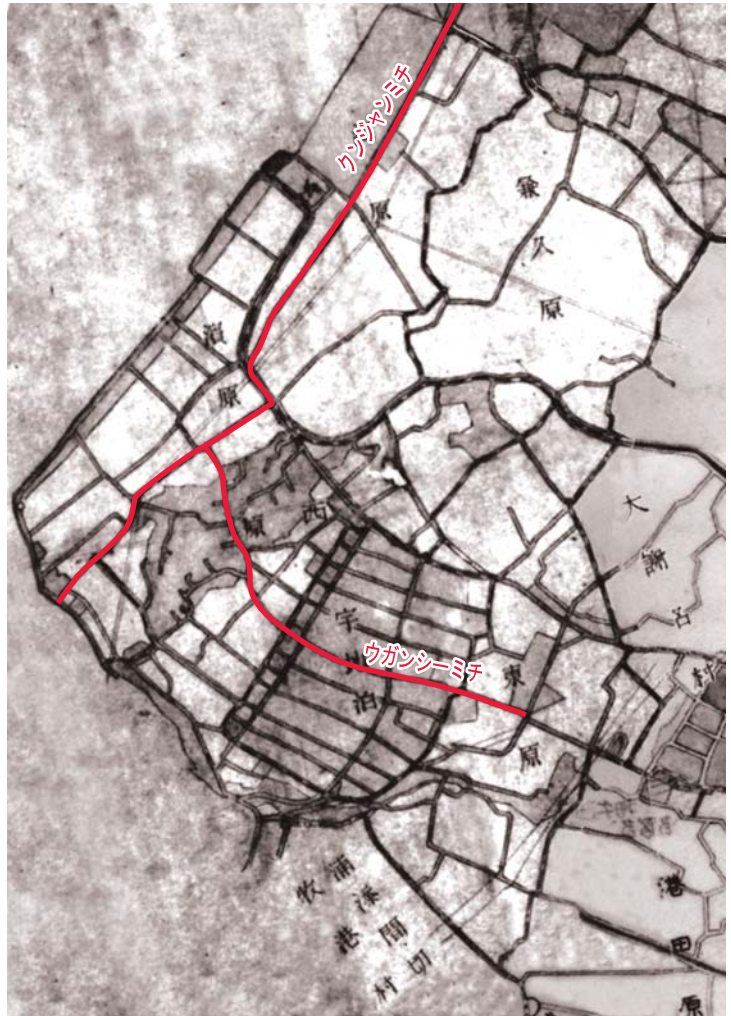
先述したヒートウジーは、主に漁夫の拝所である。旧4月1日の海神祭の際に拝む他、年の最初に獲れたヒートウを解体して、その頭を供献したが、沖縄戦によって壊滅した。

1941年12月8日、日本はアメリカ・イギリスに対して宣戦布告して太平洋戦争に突入した。1945年4月1日、中部西海岸から上陸した米軍により、本市域も壊滅的な打撃を被った。特に嘉数高台周辺は、米軍と日本軍が高地占領を巡って沖縄戦最大の激戦地となったことで知られる。現在でもトーチカや陣地壕が残り、平和学習に利用されている。

沖縄戦によって、野嵩以外の集落は廃墟となった。辛うじて焼失を免れた野嵩には市域住民をはじめ、市域南における戦闘地域住民の収容所が設置された。

1946年9月以降、故地またはその近傍に帰住が許され、社会基盤の復活が果たされると、米軍基地関連産業の活状により、市域の人口も急増した。その一方で、戦後の軍用地接収と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌した。1962年7月1日には市に昇格し、1964年2月には新たに、対人的行政区の地域を明確にした20行政区に分割統合された。

宇地泊は、戦後宇地泊原を中心としてキャンプブーンの一部に接収されたが、1974年の返還に伴って区画整理が行われ、それまで営まれていた農業や漁業が衰退して宅地化が進んだ。加えて、立地条件の良さから市内における商業地域の一部を形成している。



図版3 宇地泊集落の土地利用図

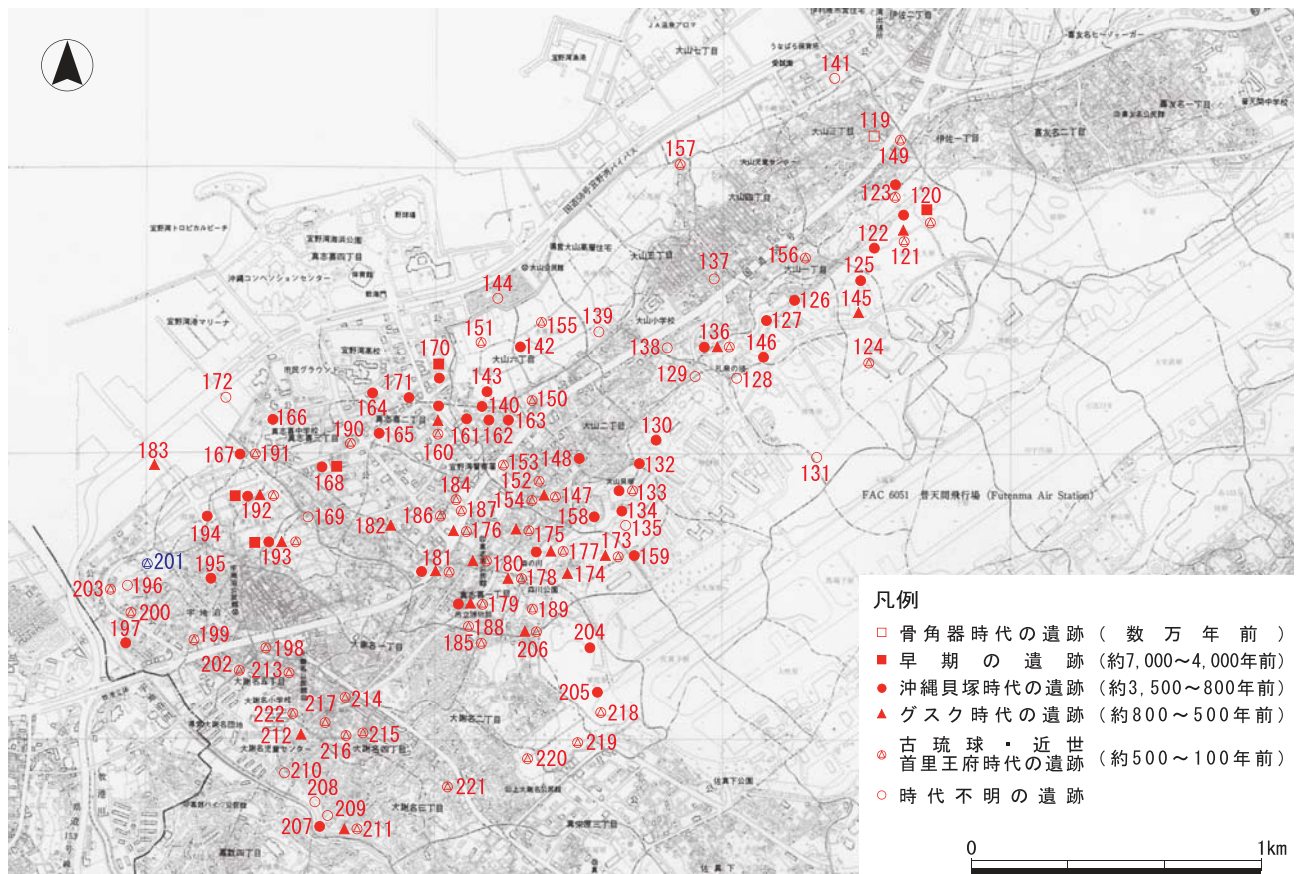


図版4 大謝名上空から見たキャンプブーン  
(写真集『ぎのわん』より)

第1表 ぢゃな地域の遺跡

大字	遺跡名	大字	遺跡名	大字	遺跡名	大字	遺跡名
大山	119 大山洞穴	大山	145 芋久保原第二遺跡	真志喜	171 安座間原第二遺跡	宇地泊	197 宇地泊遺物散布地
	120 岳之佐久原第一洞穴遺跡		146 チャングスク遺跡		172 真志喜地先石器散布地		198 クンカー古湧泉
	121 岳之佐久原第一遺跡 (旧称北方遺跡)		147 前門原第一遺跡		173 マヤーブ洞穴遺跡		199 ウガンシーヤマ祭祀遺跡
	122 岳之佐久原第二遺跡 (旧称南方遺跡)		148 前門原第二遺跡		174 製立原遺跡 (旧称蔵当原遺跡)		200 ヒートゥジー祭祀遺跡
	123 岳之佐久原第三遺跡		149 フルチンガー古湧泉		175 森川原第一遺跡		201 西原丘陵古墓群
	124 加良当原第一遺跡 (旧称南方遺物散布地)		150 カンジャーガー古湧泉		176 森川原第二遺跡		202 ハンタヌシチャ古墓群 (奥間ノ墓舎)
	125 加良当原第二遺跡 (仮称)		151 ウフチャーストゥン祭祀遺跡		177 ウンサクモー遺跡		203 西原トーチカ戦跡*
	126 ウフォーアブ遺物散布地		152 メームトゥブストゥン祭祀遺跡		178 富盛原第二遺跡 (旧称蔵当原遺跡)		204 軍花原遺跡
	127 芋久保原第一遺跡		153 メーフストゥン祭祀遺跡		179 蔵当原遺跡		205 久永地原遺物散布地
	128 芋久保原第三遺跡		154 カンサギモー祭祀遺跡		180 ノロ殿内祭祀遺跡		206 軍花原第二遺跡
	129 勢頭原第一遺跡		155 カニクモー祭祀遺跡		181 石川第一遺跡		207 大謝名洞穴遺跡
	130 勢頭原第二遺跡 (旧称大山第三洞穴遺跡)		156 大山東方丘陵古墓群		182 石川第二遺跡		208 前原第一遺物散布地
	131 勢頭原第三遺跡		157 クンジャンアブシ古道		183 真志喜地先外來陶磁器散布地		209 前原第二遺物散布地 (旧称北星川沿い①地点)
	132 富盛原第一遺跡 (旧称北方遺跡)		158 真志喜遺跡		184 奉行屋跡		210 港田原遺物散布地
	133 大山貝塚		159 富盛原第一遺跡		185 カンガー洞穴古湧泉		211 黄金森グスク遺跡
	134 富盛原第二遺跡 (旧称南方遺跡)		160 大川原第一遺跡		186 ムラスヒヌカン祭祀遺跡		212 大謝名原古瓦散布地
	135 富盛原第三遺跡		161 大川原第二遺跡		187 カンシガモー祭祀遺跡		213 ヤマトウガー古湧泉
	136 マヤーガマ洞穴遺跡		162 大川原第三遺跡		188 カンガー祭祀遺跡		214 クシヌカー古湧泉
	137 大山掘割貝塚		163 大川原第四遺跡		189 製立原古墓群		215 ウィースヤマ祭祀遺跡
	138 一里原遺物散布地		164 荒地原第一遺跡		190 荒地原古墓群		216 ウカマ祭祀遺跡
	139 後原遺物散布地		165 荒地原第二遺跡		191 グスクヌハナ古墓群		217 ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡
	140 前門原第三遺跡		166 グスクヌハナ遺跡 (旧称真志喜遺物散布地)		192 兼久原遺跡		218 軍花原古墓群
141 名利瀬原遺物散布地	167 グスクヌハナ南遺跡 (旧称西遺跡)	193 兼久原第二遺跡	219 久永地原第一古墓群				
142 水賀志原遺跡	168 グスクヌハナ東遺跡	194 兼久原第三遺跡	220 久永地原第二古墓群				
143 樋川原遺物散布地	169 白台原遺跡	195 東原遺跡	221 東原古墓群				
144 二重海岸石器散布地	170 安座間原第一遺跡	196 ヒートゥモー遺跡	222 カンジャーガー岩陰遺跡				

※ 平成17年度に行った分布調査の結果、監視哨を目的として掘られたと考えられる塚であることを確認した。そのため、遺跡の名称はもちろん、その評価についても再考の必要がある。



第3図 ぢゃな地域の遺跡分布図



## 第三章 宇地泊西原丘陵古墓群の調査の成果

### 第1節 遺跡の内容

#### 1. 古墓群の概要

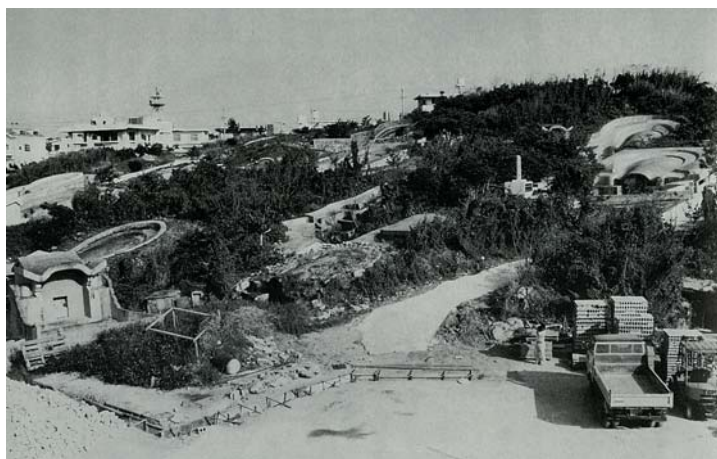
宇地泊丘陵古墓群は宇地泊部落の墓域であり、旧集落の北西方向に位置する。古墓が連なる丘陵は、旧集落に対して背面が緩やかに傾斜しており、この緩斜面を中心に墓が点在する。そのため、古墓の多くは丘陵を背にして海を臨んでおり、墓造営の好立地となっている。また、遺跡内には多数の拝所を確認することができる。とりわけ遺跡南西の丘陵頂上に位置するヒートゥモー遺跡は、漁夫の祭祀場として知られる。これは、市内唯一の漁民集落である宇地泊部落を特徴付ける拝所と言える。

当遺跡の古墓は、前述した緩斜面を含む丘陵縁辺の斜面域と、丘陵西側の崖面に造営されたものに大きく区分される（呉屋ほか 1989）。前者の斜面域に見られる古墓は、概ねモルタルなどによって修築あるいは改築されているため、旧状を留めるものは少ない。ただし、亀甲墓については、眉石などの形状から古式の様相が窺えるものもある。特に、いわゆる“ボージャー墓”と呼称される亀甲墓の亜型式も確認することができ、これが当古墓群の特徴の1つとなっている。

後者の崖面に造営された古墓群は、墓正面が装飾されない古式の掘込墓が中心である。しかし、中には正面のみを亀甲墓状に装飾したものや、屋根を造るものも確認することができる。また、洞穴墓として利用されるヤクジャーガマが開口するなど、斜面域の古墓群とは様相が大きく異なる。これらの古墓は、「宇地泊部落の歴史を語る重要な文化財」として位置付けられており、その保全策が求められる（呉屋ほか 1989）。

宜野湾市内では、26もの古墓群が存在する。これは、多くが開発の手が届かない米軍基地内に所在することもあって、県内では豊見城市に次ぐ報告数となっている。今回報告する宇地泊西原丘陵古墓群は、1974年に返還された米軍基地キャンプブーンに僅かにかかる北方に位置しており、古墓の修築や墓の新規造営が断続的に進行している遺跡である。特に、墓の新規造営の際には、既存の墓の削平や、取り壊しが行われることもある。そのため、市文化課では平成17年度に墓の分布状況の確認を行い、当古墓群の地形測量図を作成した（第4図）。

次項では、当古墓群の現状を把握するために、平成17年度に行った分布調査を基にして、遺跡内における古墓の整理を行う。



図版5 宇地泊西原丘陵古墓群（遺跡西方より撮影）

（上は1989年頃撮影、下は2008年2月現在）

## 2. 古墓群の現状









### 古墓の整理

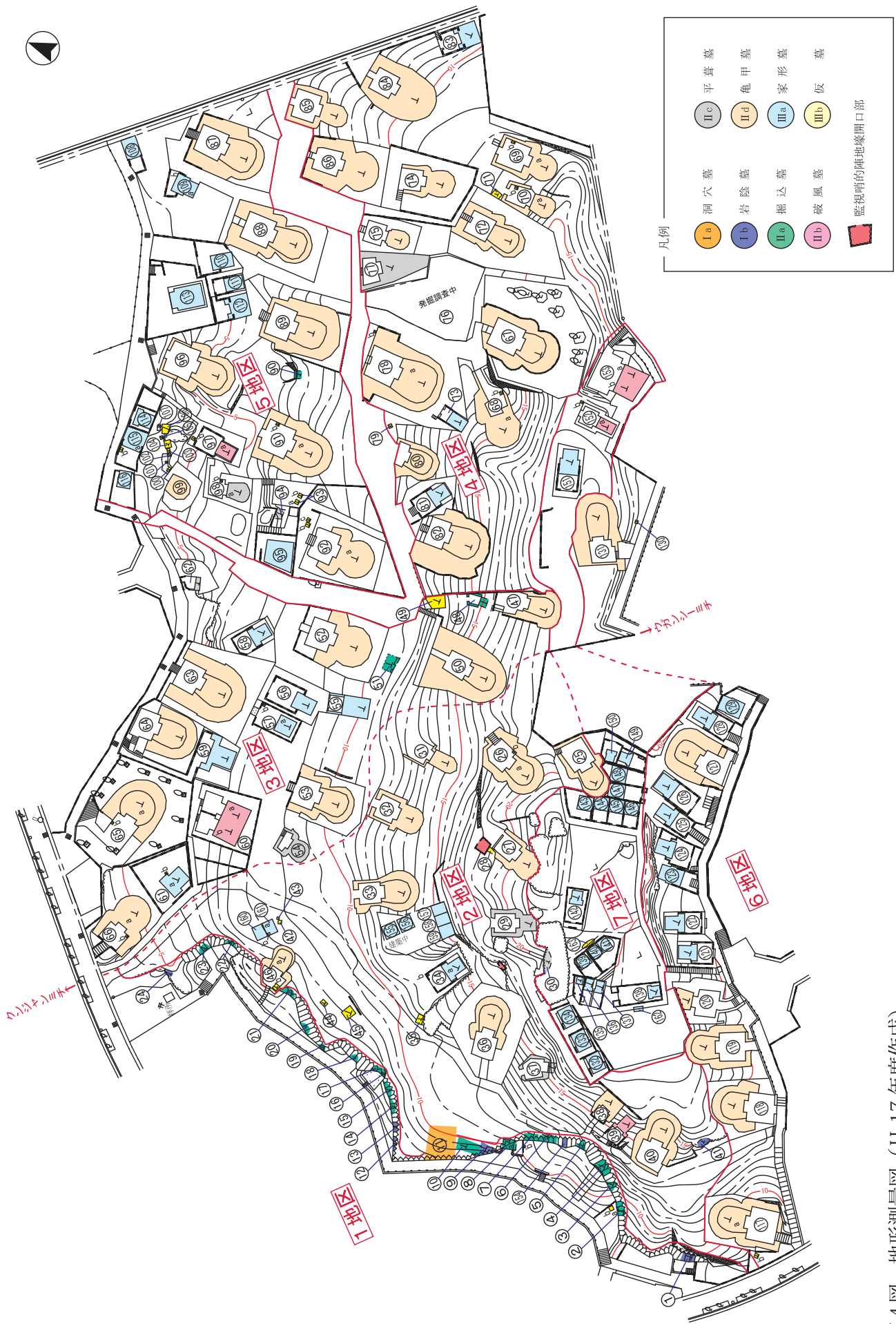
当古墓群における分布調査によって確認された墓は、全189基である。これらを分かり易く整理するため、便宜上、本古墓群が立地する丘陵を7区に区分して、1地区から個々の墓に整理番号を与えた。そして、古墓群の現状を把握するため、地区ごとに遺跡内における墓の情報を整理して、データベースを作成した。なお、第3表～第8表は、測量図を作成した平成17年度現在の情報を基に、平成19年5月に作成したものである。第9表では、平成19年5月までに造成された新規墓を整理した。

1地区は、丘陵西側の縁辺部で、基盤の琉球石灰岩が露頭して崖面を形成する。2地区は、1地区から丘陵頂に造成された整地部までの北西側傾斜地で、ウガンシーミチを北西に上って、クンジャンミチに続く旧交通路までとした。3地区は、2地区との境界である旧交通路から、丘陵ほぼ中央から北に延びる舗装路とその南延長上に築かれる石積みまでの範囲とした。4・5地区は、3地区との境界から東側の一帯で、そのほぼ中央を北東から南西に横切る舗装路を境に南側を4地区、北側を5地区とした。本章第2節で報告する宮里家古墓は4地区に、本章第3節で報告する比嘉家予定地不時発見古墓は5地区にそれぞれ所在する。そして、丘陵南側の斜面を6地区とし、丘陵頂に造成された整地部を7地区とした。ヒートウモ一遺跡は、7地区西側に所在する。

データベースの雛形は、「位置」「分類」「外観」に大別した。「位置」は、墓の位置する座標や地区名に加えて墓口の方向を記した。座標は、墓口の位置に与えている。「分類」では、先行研究によって示されている定義に基づいて、墓型式を記号化した(第2表)。「外観」では、屋根・墓庭・三味台・墓口などの外観についての所見や計測値をまとめた。多くが未調査であるため、「造り・状況」は、実見した所見を記した。計測値は、コンボックスやエスロンテープなどを用いた簡略的な値である。なお、墓各所の名称は、凡例の通りである。仮墓は計測を省いた。

第2表 墓型式

分類	墓型式	特徴	代表例/市内例	模式図
I	a ガマバカ 洞穴墓	自然洞穴を利用する墓。 洞穴開口部を石積みによって塞ぐものを「洞穴囲込墓」と呼ぶ。	・久米島町ヤッチのガマ ・宜野湾市喜友名山川原丘陵古墓群 フツキアブ洞窟	
	b 岩陰墓	自然の岩陰を利用する墓。 岩陰前面を石積みによって塞ぐものを「岩陰囲込墓」と呼ぶ。 岩陰囲込墓は、当古墓群において数基確認することができたため、これらを「I b」類とした。	・浦添市伊祖の高御墓 ・宜野湾市喜友名前原第一古墓群 岩陰A・D	
II	a フィンチャー 掘込墓 (正面装飾なし)	斜面や岩盤を掘り込んだ墓。 概ね、石積みや漆喰で入口が塞がれるのみで、正面は装飾されない。ただし、 屋根を構築するものや、例外的に正面のみを亀甲墓状に飾るものもある。これら は、「II a」類とした。	・宜野湾市小禄墓 ・宜野湾市奥間ノロ墓	
	b ファーファー 破風墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が破風形(切妻形)になるもの。 墓の背面が露出するものもある。	・那覇市玉陵 ・糸満市幸地腹門中墓	
	c ヒラフチバカ 平葺墓	正面を装飾した掘込墓で、平屋根を構築するもの。 眉石は直線状。	・浦添市伊祖の入め御拝領墓 ・浦添市内間西原近世墓群1号墓	
	d カミナカバカ 亀甲墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が亀甲形になるもの。平地に建てられるものもある。 袖回りが省略されて、亀甲の盛り上がり強調されるものを「ボージャーバカ」と 呼ぶ。これを「II d」類とした。	・那覇市銘苅古墓群 「伊是名御殿内の墓」 ・宜野湾市大山東方第V丘陵古墓群 「上江家管掌の亀甲墓」	
III	a ヤーダバカ 家形墓	平地に建てられた墓で、外観が家の形を呈するもの。 屋根は概ね破風形(切妻形)であるが、中には亀甲形のものや塔を建てるものがある。	—	
	b カリハカ 仮墓	平地に建てられた簡易的な墓。 概ね小型で、市販のものと同構築されたものがある。中にはやや大きなものもあり、 「箱形墓」と呼称されるものもあるが、本報告では仮墓とした。	—	



第4図 地形測量図 (H 17 年度作成)

第3表 1～2地区における墓のデータベース（H17年度作成地形測量図より）

No.	位置		分類	屋根		外観		墓口		備考							
	座標	地区		方向	平面形・状況	寸法	平面形	墓庭	造り・状況		寸法	三味台寸法	墓口	造り・状況	寸法		
																墓庭	造り・状況
1	X	29474	1	西南	I b'類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	横長の方形	現在、墓庭はコンクリート壁によって囲まれる。	幅	4.0	幅	—	石灰岩の切石を積んで構築。墓口はモルタルによって塞がれる。石積み上部は崩壊。	幅	0.6
	Y	22889															
2a	X	29491	1	北北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	正方形	—	幅	4.5	幅	0.9	石灰岩の布積みによって構築。現在、墓口はモルタルによって塞がれる。	幅	0.6
	Y	22893															
2b	X	29489	1	北北西	III b類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22882															
3	X	29493	1	北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不明確	現在、腐葉土などの堆積によって急斜地となる。	幅	—	幅	—	石灰岩の布積みによって構築。石積み上部に隙間を造る。墓口はモルタル（か漆喰）で塞がれるが、上部は破損のため開口する。	幅	0.6
	Y	22897															
4	X	29496	1	西北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	正方形	現在、墓庭はモルタルによって構築される。	幅	2.4	幅	—	粗く面取りされた石灰岩の切石を積んで構築。現在、墓口はモルタルによって塞がれる。	幅	0.7
	Y	22899															
5	X	29501	1	西北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不定形	墓口手前は平坦にするが、墓庭は不明確。	幅	—	幅	—	粗く面取りされた石灰岩の切石を積んで構築。現在、墓口はモルタルによって塞がれる。石積み上部は崩壊。	幅	0.7
	Y	22902															
6	X	29508	1	西北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	多角形	現在、墓庭はコンクリートによって構築される。	幅	2.7	幅	—	石灰岩の切石を積んで構築。現在墓口は御影石？によって装飾される。	幅	0.7
	Y	22901															
7	X	29511	1	西南西	II a'類	斜面状（庇を造る）	縦軸	—	不明確	石灰岩の切石を積んで庭開いを構築するが、半壊する。	幅	—	幅	—	石灰岩の切石を積んで構築。現在、墓口はモルタルによって塞がれる。	幅	0.6
	Y	22900															
8a	X	29514	1	西南西	II a'類	半壊のため不明確。平坦か（庇を造る）。	縦軸	—	不明確	—	幅	—	幅	—	石灰岩の切石を積んで構築。現在、墓口はコービ？で塞がれる。	幅	0.6
	Y	22897															
8b	X	29511	1	南南東	III b類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22898															
9	X	29518	1	西	I b'類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不明確	—	幅	—	幅	—	墓口は野面積みによって塞がれていたと思われるが、現在、石積みは概ね倒壊しており、大部分が開口する。	幅	—
	Y	22894															
10	X	29521	1	西	II a類	層石状	縦軸	—	不明確	—	幅	—	幅	—	石灰岩の布積みによって構築。現在、蓋石破損のため、墓口上部は開口する。	幅	0.6
	Y	22894															
11	X	29527	1	西南西	I a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	石積みなどの構築はされない。	幅	—
	Y	22891															
12	X	29535	1	北西	I b類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	石積みなどの構築はされない。	幅	—
	Y	22889															
13	X	29536	1	北西	I b類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	石積みなどの構築はされない。	幅	—
	Y	22892															
14	X	29538	1	北北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	現在、腐葉土などの堆積によって急斜地となる。	幅	—	幅	—	基盤の岩盤を加工する。現在、墓口は開口する。	幅	0.6
	Y	22896															
15	X	29540	1	北北西	II a類	斜面状（庇を形造る）	縦軸	—	—	現在、腐葉土などの堆積によって急斜地となる。	幅	—	幅	—	石灰岩の布積みによって構築。現在、墓口は開口する。	幅	0.9
	Y	22899															
16	X	29542	1	西南西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	縦長の方形	現在、墓庭はコンクリートによって構築される。	幅	1.3	幅	1.5	基盤の岩盤を加工か。石灰岩の切石を蓋石とする。	幅	0.5
	Y	22901															
17	X	29544	1	西北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	縦長の方形	現在、墓庭はコンクリートによって構築される。	幅	1.3	幅	—	石灰岩の布積みによって構築か。石灰岩の礎と切石で塞がれる。	幅	0.5
	Y	22901															
18	X	29548	1	西北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不定形	現在、墓庭はコンクリートによって構築される。	幅	2.2	幅	—	基盤の岩盤を加工か。現在、石灰岩の切石を蓋石とし、隙間をセメントで塞ぐ。	幅	0.5
	Y	22902															
19	X	29554	1	北北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	—	幅	1.0	幅	—	—	幅	—
	Y	22902															
20	X	29559	1	北北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	—	幅	2.3	幅	—	—	幅	—
	Y	22904															
21	X	29564	1	不明	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不明	—	幅	—	幅	—	不明。	幅	—
	Y	22909															
22	X	29578	1	西北西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不明確	墓口手前は平坦にする。壁か、ガラスが残るが、墓庭は不明確。	幅	—	幅	—	基盤の岩盤を加工か。現在、セメントなどによって塞がれる。	幅	0.5
	Y	22914															
23	X	29582	1	南南西	II a類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	不明確	現在、コンクリートによって墓庭が形成されるが、公用路とつながる為、範囲は不明確。	幅	—	幅	—	基盤の岩盤を加工か。現在、コンクリートブロックやセメントによって塞がれる。	幅	0.5
	Y	22911															
24	X	29587	1	西	I b類	基盤の岩盤を利用。	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	石積みなどの構築はされず墓口は開口するが、現在は針金のネットによって保護される。	幅	—
	Y	22905															
25	X	29526	2	北東	II d類	亀甲形	縦軸	6.1	縦長の方形	地面を掘り下げて、袖の壁面に石灰岩の切石を積んで構築か。墓庭手前中央に円形の排水穴を造る。	幅	4.6	幅	2.4	石灰岩の布積みによって構築。現在、墓口・正面はモルタルが掛かる。	幅	0.6
	Y	22970															
26a	X	29539	2	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	6.9	台形	地面を掘り下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅1	4.7	幅	2.4	石灰岩の布積みによって構築。現在、墓口・正面はモルタルが掛かる。	幅	0.6
	Y	22966															
26b	X	29540	2	西北西	III b類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22968															

第4表 2～3地区における墓のデータベース（H17年度作成地形測量図より）

No.	位置		分類	外観										備考				
	座標	地区		方向	屋根		基盤		三味台		墓口							
					平面形・状況	寸法	平面形	造り・状況	寸法	寸法	造り・状況	寸法						
27	X	29532	2	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	5.4	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	3.7	幅	2.1	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6	墓庭外に監視哨的陣地壕北東側入口が開く。
	Y	22949					横軸	4.7			奥行	4.0	奥行	0.9		高さ	1.1	
28	X	22950	2	不明	III b類	不明	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	現在、取り壊されており詳細不明。
	Y	29538					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
29	X	29527	2	北北東	II c類	斜面状	縦軸	3.5	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは野面積みによって構築。現在は、セメントで補強される。	幅	3.7	幅	1.9	石灰岩ブロックを積んで構築。現在、墓口はコンクリート礎とセメントによって塞がれる。	幅	0.6	監視哨的陣地壕崩落の為、墓庭の大部分が陥没。
	Y	22938					横軸	3.0			奥行	4.2	奥行	0.9		高さ	1.1	
30	X	29520	2	北	II c類	斜面状	縦軸	—	不明確	向かって右側に設置される袖石は相方積みによって構築。	幅	—	幅	—	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6	三味台と思われるモルタル片が墓口前に残存。
	Y	22933					横軸	2.2			奥行	—	奥行	—		高さ	0.9	
31	X	29554	2	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	—	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩の切石を積んで構築か。庭囲いは半壊状態。	幅	4.1	幅	2.0	石灰岩の相方積みによって構築。	幅	0.7	保存状況悪い。屋根は、シートが被さるため詳細不明。
	Y	22962					横軸	—			奥行	4.2	奥行	0.7		高さ	1.1	
32	X	29556	2	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	6.1	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは野面積みによって構築。庭囲いは半壊状態。	幅	4.3	幅	2.5	石灰岩の布積みによって構築。現在、墓口は上部が開く。	幅	0.7	保存状況悪い。
	Y	22949					横軸	7.3			奥行	4.0	奥行	0.8		高さ	0.9	
33	X	29554	2	北西	II d類	亀甲形	縦軸	7.1	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を相方積みして構築か。	幅	4.0	幅	2.5	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.7	
	Y	22934					横軸	7.9			奥行	4.2	奥行	0.9		高さ	1.1	
34a	X	29537	2	北西	III a類	家形	縦軸	4.0	横長の方形	急斜地を削平し、地面を整理してコンクリートによって構築。	幅	4.0	幅1	2.1	コンクリートによって構築。	幅	0.7	1980年建立か。墓庭内に仮墓あり。三味台は2段。
	Y	22924					横軸	2.6			奥行	2.8	奥行1	0.9		奥行2	0.6	
34b	X	29540	2	南南西	III b類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	22922					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
35	X	29539	2	西北西	III b類	モルタル板	縦軸	—	台形	コンクリートブロックによって庭囲いを構築し、モルタルで墓庭を形成。	幅	—	幅	—	コンクリートブロックによって構築し、モルタル板によって墓口を塞ぐ。	幅	—	カピアンジは、コンクリートブロック片で枠組み。
	Y	22914					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
36	X	29526	2	西南西	II d類	亀甲形	縦軸	7.0	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いはモルタルで整地される。	幅	4.3	幅	2.4	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.7	庭囲い上に慰霊碑を建立。
	Y	22916					横軸	6.9			奥行	4.3	奥行	1.1		高さ	1.0	
37	X	29512	2	北北西	II c類	斜面状	縦軸	—	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に粗く成形された石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは野面積みによって構築。	幅	3.0	幅	1.9	丁寧に成形された大型の切石と粗く成形された小型の切石で構築。	幅	0.6	
	Y	22914					横軸	4.0			奥行	3.4	奥行	0.9		高さ	0.9	
38	X	29499	2	西北西	II d類?	亀甲形?	縦軸	3.4	正方形状	庭囲いは、コンクリートブロックによって構築。	幅	2.8	幅	1.8	正面はモルタルで覆われる。墓口は石灰岩によって塞がれる。	幅	0.7	
	Y	22910					横軸	4.5			奥行	2.4	奥行	0.6		高さ	0.9	
39	X	29495	2	西北西	II b類	破風形	縦軸	2.9	正方形状	地面を整理して、モルタルによって構築。庭囲いは、コンクリートブロックによって構築。	幅	3.2	幅	1.8	正面はモルタルで覆われる。	幅	0.6	
	Y	22907					横軸	2.3			奥行	2.9	奥行	0.7		高さ	1.1	
40	X	29488	2	西北西	II d類	亀甲形	縦軸	6.0	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩の切石を積んで構築か。	幅	3.3	幅1	2.5	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6	三味台は2段。
	Y	22908					横軸	6.8			奥行	3.4	奥行1	0.9		奥行2	1.0	
41	X	29479	2	南西	I b類	基盤の石灰岩を加工して利用。	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	基盤の石灰岩を利用。現在は墓口にコンクリートブロックを積むが、大部分が欠落・崩壊し、開口する。	幅	—	墓向かって左に野面積みによる石積みあり。
	Y	22911					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
42	X	29570	2	—	III b類	—	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	現在、取り壊されており詳細不明。
	Y	22921					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
43	X	29571	2	—	III b類	—	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	現在、取り壊されており詳細不明。
	Y	22922					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
44	X	29557	2	北西	III b類	箱形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	22910					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
45	X	29552	2	北西	III b類	破風形	縦軸	2.3	—	—	幅	—	幅	2.0	モルタルによって構築。	幅	0.5	大型仮墓。
	Y	22910					横軸	1.4			奥行	—	奥行	0.7		高さ	0.8	
46a	X	29568	2	西北西	II d類	亀甲形	縦軸	5.6	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	4.8	幅1	2.5	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6	ボージは、モルタルによって覆われるが、全体的に破損。墓庭内に仮墓を設ける。現在コンクリートで修築中。
	Y	22913					横軸	5.4			奥行	5.5	奥行1	0.9		奥行2	1.1	
46b	X	29567	2	北北東	III b類	モルタルの板	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	コンクリートブロックによって構築。
	Y	22910					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
47	X	29547	3	北北西	II d'類	亀甲形	縦軸	6.6	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは後代に修築か。	幅	3.4	幅	2.2	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6	
	Y	22996					横軸	6.0			奥行	5.4	奥行	0.9		高さ	1.1	
48	X	29557	3	北北西	II a類?	構築しない	縦軸	—	不明確	地面を整地するが、不明確。	幅	—	幅	—	石灰岩の切石を積んで構築。	幅	0.5	
	Y	22993					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	0.6	
49	X	29564	3	北西	III b類	平坦	縦軸	—	台形	地面を整理してモルタルによって構築。	幅	—	幅	—	石灰岩ブロックによって構築。	幅	—	屋根に「2001 12・16」の文字を彫る。
	Y	22990					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
50	X	29553	3	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	7.5	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	3.2	幅	2.1	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.7	
	Y	22979					横軸	9.7			奥行	4.4	奥行	1.1		高さ	1.1	
51	X	29568	3	北北東	II a類?	不明	縦軸	—	不明瞭	なし	幅	—	幅	—	石灰岩を蓋石とする。	幅	—	
	Y	22975					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—	
52	X	29580	3	北	II d類	亀甲形	縦軸	9.4	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。墓庭入口左右に排水穴を造る。	幅	4.1	幅	2.5	モルタルで覆われる。	幅	0.6	
	Y	22976					横軸	8.1			奥行	4.5	奥行	0.9		高さ	1.0	
53	X	29572	3	北	II d類	亀甲形	縦軸	8.7	横長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を相方積みして構築か。庭囲いは、相方積みによって構築。	幅	5.5	幅	2.4	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.7	
	Y	22946					横軸	9.9			奥行	4.5	奥行	0.9		高さ	1.1	

第5表 3～4地区における墓のデータベース（H17年度作成地形測量図より）

No.	位置		分類	外観										備考			
	座標	地区		方向	屋根		墓庭		三味台		墓口						
					平面形・状況	寸法	平面形	造り・状況	寸法	寸法	蓋の状況	寸法					
54	X	29574	3	北北東	IIc類?	ドーム状	縦軸	5.0	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	3.6	幅	2.0	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	22936					横軸	5.6			奥行	0.8	奥行	0.8		高さ	0.9
55	X	29574	3	北北西	IIIa類	亀甲形 (亀甲墓模倣)	縦軸	4.8	正方形状	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅	3.1	幅	1.5	コンクリートによって構築。	幅	0.6
	Y	22965					横軸	3.9			奥行	2.7	奥行	0.9		高さ	1.0
56	X	29583	3	北北東	IIIa類	家形	縦軸	4.6	正方形状	地面を整地して、モルタルによって構築。	幅	4.6	幅1	1.9	モルタルによって構築。	幅	0.7
	Y	22962					横軸	2.9			奥行	4.4	幅2	4.6		奥行1	0.7
57a	X	29585	3	北北東	IIIa類	平坦	縦軸	3.2	縦長の方形	地面を整地して、モルタルによって構築。	幅	4.4	幅	2.7	モルタルによって構築。	幅	0.6
	Y	22957					横軸	3.4			奥行	8.1	奥行	0.7		高さ	0.9
57b	X	29588	3	西北西	IIIb類	破風形	縦軸	—	—	地面を整地して、モルタルによって構築。	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22959					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
58	X	29595	3	北北西	IIIa類	家形	縦軸	4.0	縦長の方形	地面を整地して、モルタルによって構築。	幅	4.0	幅1	2.1	モルタルによって構築。	幅	0.6
	Y	22970					横軸	2.6			奥行	1.9	幅2	3.9		奥行1	0.9
59	X	29593	3	北	IIIa類	斜面状 (破風状)	縦軸	4.9	縦長の方形	庭囲いをコンクリートブロックで片側のみ構築。	幅	6.7	幅1	2.4	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.7
	Y	22947					横軸	3.6			奥行	1.6	幅2	4.9		奥行1	0.9
60 a・b	X	a.29588	3	北	IIb'類	破風形	縦軸	5.6	a:正方形状 b:縦長の方形	石灰岩を布積みして構築。モルタルによって構築。墓庭入口aは右、bは左に排水穴を造る。	幅a	3.9	幅a	2.3	石灰岩の布積みによって構築。	幅a	0.6
	Y	b.29589					横軸	7.5			幅b	3.9	幅b	2.3		高さa	1.1
61a	X	29592	3	北北西	IIIa類	家形	縦軸	4.7	台形	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅1	9.1	幅	2.0	コンクリートによって構築。	幅	0.9
	Y	22922					横軸	3.3			奥行	4.6	幅2	10.7		奥行	0.9
61b	X	29594	3	北北西	IIIb類	破風形	縦軸	—	—	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22922					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
62	X	29609	3	北北西	IIc類?	斜面状	縦軸	—	正方形状	石灰岩の切石を積んで庭囲いを構築。	幅1	2.1	幅	1.9	石灰岩の相方積みによって構築か。	幅	0.6
	Y	22977					横軸	2.6			奥行	2.4	奥行	0.5		高さ	0.9
63	X	29601	3	北	II d類	亀甲形	縦軸	9.4	縦長の方形	地面を掘下げて構築。モルタルで覆われる。	幅	5.4	幅	2.4	モルタルで覆われる。	幅	0.6
	Y	22959					横軸	11.3			奥行	4.5	奥行	0.9		高さ	1.1
64	X	29605	3	北	II d類	亀甲形	縦軸	8.0	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは後代に修築か。	幅	5.4	幅1	2.4	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	22948					横軸	8.7			奥行	4.1	幅2	5.3		奥行1	0.9
65a	X	29604	3	西北北西	II d類	亀甲形	縦軸	7.4	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を相方積みして構築か。	幅	4.8	幅	2.4	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	22930					横軸	8.5			奥行	6.3	奥行	0.9		高さ	1.0
65b	X	29608	3	南南西	IIIb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22928					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
66a	X	29599	3	西北北西	II d類	亀甲形	縦軸	6.7	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	4.6	幅	2.2	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	22910					横軸	7.0			奥行	3.7	奥行	0.9		高さ	1.1
66b	X	29597	3	西北北西	IIIb類	平葺形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	22908					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
67	X	29566	4	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	7.6	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは築造で覆われる。墓庭入口右に排水穴を造る。	幅	3.5	幅1	2.6	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	23042					横軸	7.9			奥行	4.8	幅2	5.3		奥行1	0.9
68a	X	29566	4	北東	II d類	亀甲形	縦軸	6.4	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩の切石を積んで構築か。	幅	4.9	幅	2.4	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	23028					横軸	7.2			奥行	3.6	奥行	0.9		高さ	1.1
68b	X	29567	4	北北西	IIIb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	23032					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
69a	X	29577	4	北	II d'類	亀甲形	縦軸	5.6	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは相方積みによって構築。	幅	5.2	幅1	2.2	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.7
	Y	23075					横軸	5.7			奥行	3.3	幅2	5.2		奥行1	0.9
69b	X	29582	4	西	IIIb類	箱形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	23078					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
70a	X	29574	4	北	II d類	亀甲形	縦軸	5.2	正方形状	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは相方積みによって構築。庭囲いは半壊状態。	幅	3.7	幅	2.2	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	23068					横軸	5.0			奥行	4.0	奥行	0.9		高さ	1.1
70b	X	29578	4	西	IIIb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	23070					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
71	X	29581	4	北北東	IIIb類	箱形	縦軸	—	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—
	Y	23067					横軸	—			奥行	—	奥行	—		高さ	—
72	X	29580	4	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	7.5	正方形状	地面を掘下げて構築。モルタルで覆われる。墓庭入口左右に排水穴を造る。	幅	4.5	幅	2.1	モルタルで覆われる。蓋石は石灰岩の切石を用いる。	幅	0.6
	Y	23060					横軸	6.2			奥行	4.6	奥行	0.9		高さ	1.1
73	X	29575	4	北北東	IIIa類	破風形	縦軸	2.3	縦長の方形	地面を整地してモルタルによって構築。	幅	2.5	幅	1.9	コンクリートによって構築。	幅	0.6
	Y	23024					横軸	2.5			奥行	1.5	奥行	0.6		高さ	1.0
74	X	29595	4	北北西	II d類	亀甲形	縦軸	5.9	正方形状	地面を掘下げて構築。モルタルで覆われる。墓庭手前左側に排水穴を造る。	幅	4.1	幅	1.9	モルタルで覆われる。	幅	0.6
	Y	23065					横軸	5.6			奥行	4.2	奥行	0.9		高さ	1.1
75	X	29598	4	北	II d類	亀甲形	縦軸	6.2	正方形状	地面を掘下げて構築。モルタルで覆われる。墓庭入口左に排水穴を造る。	幅	4.1	幅	1.9	石灰岩の布積みによって構築。	幅	0.6
	Y	23052					横軸	6.4			奥行	3.7	奥行	0.8		高さ	1.0

第6表 4～5地区における墓のデータベース（H17年度作成地形測量図より）

No.	位置			分類	外観										備考		
	座標	地区	方向		屋根		墓庭		三味台		墓口						
					平面形・状況	寸法	平面形	造り・状況	寸法	寸法	造り・状況	寸法					
76	X	23045	4	北北西	II d類?	亀甲形	縦軸	5.0	不明	幅	—	幅	2.6	—	幅	0.7	宮里家古墓。 詳細は第三章第2節にて報告。
	横軸						4.0	奥行		—	奥行	0.8	高さ		1.1		
77	X	29597	4	北北西	II c類?	ドーム状	縦軸	4.7	台形	幅1	4.2	幅	2.2	—	幅	0.6	—
	横軸						4.3	幅2		5.2	奥行1	2.4	奥行		1.0	高さ	
78a	X	29586	4	北北西	II d類	亀甲形	縦軸	8.9	縦長の方形	幅	4.2	幅1	2.4	—	幅	0.6	1978年修築。 三味台は2段。 墓室外に仮墓を設ける。
	横軸						10.9	幅2		6.0	奥行1	0.9	奥行2		0.9	高さ	
78b	X	29594	4	—	III b類?	—	縦軸	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	現在、コンクリートブロック片が散乱。 78aに合葬か。
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
79	X	29585	4	北西	III b類	破風形	縦軸	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	—
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
80	X	29579	4	北北東	II d'類	亀甲形	縦軸	6.1	横長の方形	幅	4.6	幅	2.0	—	幅	0.7	—
	横軸						6.5	奥行		1.7	奥行	0.3	高さ		1.0		
81	X	29572	4	北西	III a類	家形	縦軸	3.9	横長の方形	幅	3.8	幅1	2.1	—	幅	0.6	1980年建立。 三味台は2段。
	横軸						2.7	幅2		3.8	奥行1	0.9	奥行2		0.8	高さ	
82	X	29566	4	北	II d類	亀甲形	縦軸	8.6	横長の方形	幅	5.5	幅	2.4	—	幅	0.6	—
	横軸						9.8	奥行		3.9	奥行	0.9	高さ		1.1		
83	X	29600	4	北北西	III a類	破風形	縦軸	3.7	縦長の方形	幅	2.1	幅	2.1	—	幅	0.7	1979年建立。
	横軸						2.8	奥行		3.2	奥行	0.9	高さ		1.0		
84	X	29606	4	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	8.0	縦長の方形	幅	3.5	幅	2.2	—	幅	0.6	—
	横軸						9.2	奥行		4.3	奥行	1.1	高さ		1.1		
85	X	29619	4	北	II d類	亀甲形	縦軸	6.5	正方形形状	幅	4.9	幅	2.1	—	幅	0.6	—
	横軸						6.7	奥行		5.1	奥行	0.9	高さ		1.0		
86	X	29611	4	北	II d類	亀甲形	縦軸	7.2	正方形形状	幅	4.8	幅	2.1	—	幅	0.6	—
	横軸						7.6	奥行		4.9	奥行	0.9	高さ		1.1		
87	X	29633	5	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	7.8	正方形形状	幅	5.4	幅	2.3	—	幅	0.7	—
	横軸						8.4	奥行		5.1	奥行	0.9	高さ		1.0		
88	X	29618	5	北	II d類	亀甲形	縦軸	9.9	横長の方形	幅	5.4	幅1	2.4	—	幅	0.6	三味台は2段。
	横軸						10.6	幅2		5.4	奥行1	0.9	奥行2		0.9	高さ	
89	X	29608	5	北	II d類	亀甲形	縦軸	8.2	横長の方形	幅	4.5	幅1	2.4	—	幅	0.6	三味台は2段。
	横軸						7.9	幅2		6.1	奥行1	0.9	奥行2		?	高さ	
90	X	29605	5	北北西	II a類?	不明	縦軸	—	不明瞭 (横長の方形か)	幅	—	幅	—	—	幅	?	—
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		?		
91a	X	29601	5	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	8.2	横長の方形	幅	6.0	幅	2.4	—	幅	0.6	—
	横軸						8.7	奥行		5.1	奥行	0.9	高さ		1.1		
91b	X	29605	5	西	III b類	破風形	縦軸	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	墓上部は、コンクリートブロックによって構築。
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
92a	X	29585	5	北北東	II d類	亀甲形	縦軸	8.8	縦長の方形	幅	3.0	幅1	2.5	—	幅	0.7	1981年修築。 墓庭外に仮墓を設ける。
	横軸						10.6	幅2		6.0	奥行1	0.9	奥行2		0.5	高さ	
92 b-c	X	29593	5	北北西	III b類	破風形	縦軸	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	—
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
93 a-b	X	29596	5	北北東	III b類	破風形	縦軸	—	台形	幅	—	幅	—	—	幅	—	—
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
94	X	22995	5	北北東	II c類	斜面状	縦軸	—	縦長の方形	幅	1.9	幅	—	—	幅	0.5	—
	横軸						1.7	奥行		2.5	奥行	—	高さ		0.6		
95	X	29598	5	北北西	III a類	家形	縦軸	—	台形	幅	—	幅	1.9	—	幅	0.6	2005年建立。 工事中に古墓不時発見 詳細は第三章第3節にて報告。
	横軸						—	奥行		—	奥行	0.9	高さ		1.1		
96	X	29623	5	北北西	II d類	亀甲形	縦軸	9.7	横長の方形	幅	5.2	幅1	2.2	—	幅	0.6	三味台は2段。
	横軸						7.4	幅2		4.2	奥行1	1.0	奥行2		0.9	高さ	
97a	X	29614	5	北北東	II b類	破風形	縦軸	3.8	横長の方形	幅	4.0	幅	2.2	—	幅	0.6	1998年修築。 墓庭外に仮墓を設ける。
	横軸						2.7	奥行		3.4	奥行	0.8	高さ		1.1		
97b	X	29619	5	北北東	III b類	破風形	縦軸	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	1998年建立か。
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
98a	X	29610	5	北北西	II c類	ドーム状	縦軸	5.1	横長の方形	幅	3.5	幅	2.2	—	幅	0.6	—
	横軸						6.5	奥行		2.6	奥行	0.9	高さ		1.1		
98b	X	29611	5	北北西	III b類	破風形	縦軸	—	—	幅	—	幅	—	—	幅	—	—
	横軸						—	奥行		—	奥行	—	高さ		—		
99	X	29626	5	北北東	II d類	土砂で覆われるため 形状不明。	縦軸	—	不明確	幅	—	幅	—	—	幅	0.6	—
	横軸						3.2	奥行		—	奥行	—	高さ		0.8		

第7表 5～6地区における墓のデータベース（H17年度作成地形測量図より）

No.	位置			分類	外観										備考	
	座標	地区	方向		屋根		基礎		三味台		墓口					
					平面形・状況	寸法	平面形	造り・状況	寸法	寸法	造り・状況	寸法				
100	X	29625	5	北北東	Ⅲb類	箱形	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	23002					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
101	X	29625	5	北北西	Ⅲb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	23000					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
102	X	29623	5	北北西	Ⅲb類	102・103:箱形 104:モルタル板	縦軸	—	102:不定形	102:モルタルによって構築。	幅	—	—	幅	—	
104	Y	22999					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
105	X	29622	5	北北西	Ⅲb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	22996					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
106・107	X	29619	5	106 北北西 107 西南西	Ⅲb類	箱形	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
Y	22993	横軸					—	奥行			—	奥行		—	高さ	—
108	X	29634	5	南西	Ⅲa類	家形	縦軸	4.2	台形	地面を整地して、モルタルによって構築。	幅1	1.9	幅	2.1	幅	0.6
	Y	23017					横軸	3.1			幅2	3.2		奥行		2.3
109a	X	29638	5	北	Ⅲa類	家形	縦軸	4.5	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅	3.4	幅	1.6	幅	0.7
	Y	23047					横軸	2.9			奥行	5.2		奥行		0.7
109b	X	29639	5	北	Ⅲb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	23049					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
110	X	29626	5	北北西	Ⅲa類	家形	縦軸	4.5	台形	地面を整地して、モルタルで構築。	幅1	4.1	幅	2.0	幅	0.7
	Y	23036					横軸	3.0			幅2	6.8		奥行		5.8
111	X	29624	5	北北西	Ⅲa類	家形	縦軸	3.7	横長の方形	地面を整地して、モルタルで構築。	幅	2.9	幅	1.6	幅	0.7
	Y	23032					横軸	2.6			奥行	2.2		奥行		0.9
112	X	29621	5	北北西	Ⅲa類	亀甲形	縦軸	4.1	横長の方形	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅	4.0	幅	1.8	幅	0.7
	Y	23028					横軸	4.8			奥行	2.3		奥行		0.9
113	X	29630	5	北北西	Ⅲa類	家形	縦軸	6.8	多角形	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅1	2.1	幅	0.6	幅	0.5
	Y	23028					横軸	4.3			幅2	3.4		奥行		2.0
114	X	29629	5	北北東	Ⅲa類	破風形	縦軸	4.0	横長の方形	地面を整地して、モルタルによって構築。	幅	4.2	幅	2.0	幅	0.7
	Y	23003					横軸	2.7			奥行	0.9		奥行		0.8
115a	X	29629	5	西	Ⅲa類	家形	縦軸	3.9	横長の方形	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅	4.0	幅1	2.1	幅	0.6
	Y	22998					横軸	2.8			幅2	4.0		奥行		3.1
115b	X	29631	5	—	Ⅲb類	—	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	22996					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
116	X	29629	5	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸	3.4	台形	地面を整地して、コンクリートによって構築。	幅1	3.5	幅	1.4	幅	0.6
	Y	22990					横軸	2.5			幅2	5.0		奥行		6.1
117a	X	29466	6	南南東	Ⅱd類	亀甲形	縦軸	7.6	横長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。庭囲いは、相方積みによって構築。	幅	6.3	幅	2.5	幅	0.7
	Y	22899					横軸	10.2			奥行	5.4		奥行		0.9
117b	X	29462	6	南	Ⅲb類	破風形	縦軸	—	—	—	幅	—	—	幅	—	
	Y	22894					横軸	—			奥行	—		奥行	—	高さ
118	X	29474	6	南南東	Ⅱd類	亀甲形	縦軸	5.4	横長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	5.4	幅1	2.3	幅	0.6
	Y	22920					横軸	7.5			幅2	5.2		奥行		4.4
119	X	29484	6	南南東	Ⅱd類	亀甲形	縦軸	5.4	正方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩を布積みして構築か。	幅	5.0	幅	2.5	幅	0.7
	Y	22929					横軸	6.0			奥行	4.9		奥行		0.9
120	X	29491	6	南	Ⅱd類	亀甲形	縦軸	2.5	横長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩の切石を積んで構築か。庭囲いは、相方積みによって構築。	幅	5.2	幅1	2.2	幅	0.6
	Y	22935					横軸	4.0			幅2	5.2		奥行		4.1
121	X	29493	6	南南東	Ⅲa類	斜面状?	縦軸	3.9	横長の方形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅	3.9	幅1	2.1	幅	0.6
	Y	22945					横軸	2.6			幅2	3.9		奥行		2.4
122	X	29498	6	南南東	Ⅲa類	家形	縦軸	3.9	横長の方形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅	4.0	幅1	2.1	幅	0.7
	Y	22949					横軸	2.8			幅2	4.0		奥行		2.6
123	X	29501	6	南	Ⅲa類	家形	縦軸	4.6	台形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅1	3.8	幅	1.6	幅	0.7
	Y	22957					横軸	3.2			幅2	4.8		奥行		2.5
124	X	29504	6	南	Ⅲa類	家形	縦軸	3.8	縦長の方形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅	3.1	幅	2.2	幅	0.7
	Y	22961					横軸	3.0			奥行	3.7		奥行		0.9
125	X	29506	6	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸	3.9	縦長の方形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅	2.0	幅	2.0	幅	0.7
	Y	22967					横軸	2.8			奥行	3.6		奥行		0.9
126	X	29509	6	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸	4.1	縦長の方形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅	3.9	幅	2.4	幅	0.7
	Y	22972					横軸	3.6			奥行	4.9		奥行		0.7
127	X	29507	6	西南西	Ⅱd類	亀甲形	縦軸	6.6	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に石灰岩の切石を積んで構築か。庭囲いは後代に構築か。モルタルで覆われる。	幅	4.8	幅	2.2	幅	0.6
	Y	22979					横軸	9.4			奥行	5.6		奥行		0.9
128	X	29506	6	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸	4.2	横長の方形	急斜地を削平し、地面を整地してモルタルによって構築。	幅	3.7	幅1	1.9	幅	0.6
	Y	22987					横軸	2.5			幅2	3.7		奥行		1.0



第8表 6～7地区における墓のデータベース（H17年度作成地形測量図より）

No.	位置			分類	屋根		外観		三味台		墓口		備考	
	座標	地区	方向		平面形・状況	寸法	平面形	墓庭 造り・状況	寸法	寸法	造り・状況			寸法
											造り・状況	寸法		
129	X	29504	6	南	Ⅲa類	家形	縦軸 4.8 横軸 3.0	台形	地面を整地してモルタルに よって構築。	幅1 4.2	幅 1.5	コンクリートによって構築。	幅 0.7	
	幅2 7.5									奥行 0.6	高さ 1.1			
130	X	29534	6	一	Ⅲb類	不明	縦軸 — 横軸 —	—	—	幅 —	幅 —	—	幅 —	
	奥行 —									奥行 —	高さ —			
131	X	29539	6	西南西	Ⅱd類	亀甲形	縦軸 8.6 横軸 8.2	正方形状	地面を掘下げて構築。 袖石・庭囲いは後代に構築か。	幅 4.3	幅 2.3	石灰岩の布積みによって構築。	幅 0.6	
	奥行 4.2									奥行 0.9	高さ 1.1			
132 と 134	X	29508	7	南西	Ⅲa類	家形	縦軸 4.1 横軸 2.7	縦長の方形	地面を整地して、モルタルに よって構築。	幅 3.2	幅 1.7	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 1.5									奥行 0.7	高さ 1.1			
135	X	29512	7	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.3 横軸 1.2	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 1.8	幅 1.3	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 3.4									奥行 0.3	高さ 1.1			
136 ・ 137	X	29510	7	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.4 横軸 1.6	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 1.8	幅 1.1	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 3.1									奥行 0.3	高さ 1.0			
138	X	29499	7	北北西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.7 横軸 2.1	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 3.4	幅 1.4	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 8.1									奥行 0.5	高さ 1.0			
139	X	29513	7	南西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.7 横軸 2.1	多角形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 3.0	幅 1.4	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 5.1									奥行 0.5	高さ 1.0			
140 ・ 141	X	29511	7	南西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.4 横軸 2.1	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 6.2	幅 1.3	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 5.3									奥行 0.8	高さ 1.0			
142	X	29518	7	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.9 横軸 2.0	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 3.7	幅1 1.4 幅2 1.8	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 6.4									奥行1 0.5 奥行2 0.4	高さ 0.9			
143 と 146	X	29518	7	南西	Ⅲa類	家形	縦軸 3.0 横軸 3.0	台形	地面を整地して、モルタルに よって構築。	幅1 5.3	幅 1.8	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	幅2 4.0									奥行 0.5	高さ 1.0			
147 と 149	X	29518	7	南南東	Ⅲa類	家形	縦軸 3.3 横軸 2.6	縦長の方形	地面を整地して、モルタルに よって構築。	幅 2.9	幅 1.9	145・147:御影石によって構築。 146:コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 3.8									奥行 0.3	高さ 1.0			
150	X	29522	7	東北東	Ⅲa類	家形	縦軸 2.4 横軸 1.7	縦長の方形	地面を整地して、モルタルに よって構築。	幅 3.6	幅 1.2	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 2.6									奥行 0.5	高さ 1.0			
151	X	29549	7	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸 5.0 横軸 4.0	正方形状	地面を整地して、モルタルに よって構築。 コの字状に段を造る。	幅 3.8	幅1 1.7 幅2 3.8	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 3.4									奥行1 0.7 奥行2 1.2	高さ 1.0			
152a	X	29547	7	北北東	Ⅱb類	破風形	縦軸 3.8 横軸 2.2	縦長の方形	地面を掘下げて、袖の壁面に 石灰岩の切石を積んで構築か。	幅 3.3	幅1 1.8 幅2 3.3	石灰岩の切石を積んで構築。 香炉石や門石はコンクリート製。	幅 0.6	
	奥行 1.9									奥行1 1.8 奥行2 0.7	高さ 1.1			
152b	X	29552	7	西北西	Ⅲb類	破風形	縦軸 — 横軸 —	—	—	幅 —	幅 —	—	幅 —	
	奥行 —									奥行 —	高さ —			
153 a・b	X	a.29547 b.29547	7	北北東	Ⅱb類	破風形	縦軸 5.9 横軸 3.7	縦長の方形	袖石は石灰岩を布積みして構築。	幅 5.3	幅 —	石灰岩の布積みによって構築。	幅a 0.6 幅b 0.6	
	奥行 1.0									奥行 —	高さa 1.0 高さb 1.1			

第9表 H19年5月までに造営された新規墓のデータベース

No.	位置			分類	屋根		外観		三味台		墓口		備考	
	座標	地区	方向		平面形・状況	寸法	平面形	墓庭 造り・状況	寸法	寸法	造り・状況			寸法
											造り・状況	寸法		
154	X	29504	1	西南西	Ⅰb類	基盤の岩盤を利用。	縦軸 — 横軸 —	—	—	幅 —	幅 —	石積みなどの構築はされない。	幅 —	
	奥行 —									奥行 —	高さ —			
155	X	29551	2	西北西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.1 横軸 1.7	正方形状	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 2.2	幅 1.1	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 2.1									奥行 0.4	高さ 1.0			
156	X	29548	2	北西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.1 横軸 1.7	正方形状	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 3.0	幅 1.1	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 3.0									奥行 0.4	高さ 1.0			
157 と 159	X	29541	2	北西	Ⅲa類	家形	縦軸 2.1 横軸 1.7	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 2.1	幅 1.1	御影石によって構築。	幅 0.6	
	奥行 3.1									奥行 0.4	高さ 1.0			
160	X	29579	2	西北西	Ⅲa類	家形	縦軸 4.8 横軸 3.6	多角形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 6.1	幅 2.0	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 9.6									奥行 0.9	高さ 1.1			
161a	X	29575	2	西北西	Ⅲa類	家形	縦軸 4.8 横軸 3.6	縦長の方形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅 6.7	幅 2.0	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	奥行 10.1									奥行 0.9	高さ 1.1			
161b	X	29576	2	南南西	Ⅲb類	破風形	縦軸 — 横軸 —	—	—	幅 —	幅 —	—	幅 —	
	奥行 —									奥行 —	高さ —			
162	X	29500	7	西南西	Ⅲa類	家形	縦軸 5.0 横軸 3.4	台形	地面を整地して、コンクリートに よって構築。	幅1 3.2	幅 1.6	コンクリートによって構築。	幅 0.6	
	幅2 4.2									奥行 0.9	高さ 1.1			
163	X	29515	7	北東	Ⅲb類	なし	縦軸 — 横軸 —	—	—	幅 —	幅 —	—	幅 —	
	奥行 —									奥行 —	高さ —			

## 古墓群の組成と傾向

### 1) 墓の立地と方向

17世紀末以降の古墓は、風水の影響を受けて造営された傾向が強いという<sup>\*</sup>。民間に広まったいわゆる<sup>フン</sup>風水は、地域によって多少の違いはあるが、一般的に、山や丘陵を背にして海に面する土地や、低地よりも高地を敷地とする方が良いとされる。また、墓口を家の方向に向けることは良くないとされるため、集落を背後に海を臨むことができる当古墓群が広がる丘陵は、造墓の好立地と言える。

第5図のように、当古墓群では65%の墓が海の方角を向く。このうち、掘り込み式の墓(Ⅱ類)が11%を占める。これは、掘り込み式の墓の向きが地形に起因するためであるが、完全に内陸を向く南東方向(旧集落の方角)の斜面には1基も造墓されない。

墓の向きを地区ごとに概観すると、内陸を向く墓が1地区・6地区・7地区に比較的多いことがわかる。1地区は、西側に形成された崖面であるため、造営される墓は概ね西方を向く。丘陵西側には比屋良川が流れるため、これが風水と関係する可能性もある。南側丘陵の6地区に造営される墓は、必然的に南側を向く。これらは全て内陸を向くが、主に比屋良川が流れる西側に亀甲墓が集中し、東側に家形墓が集中する傾向がある。7地区は、現在丘陵頂が削平されて整地されており、新しい墓が主体となって造営される。このような新規の墓が、風水に左右される例は減少傾向にあるという(福島2007)。ただし、鬼門とされる北東方角を向く墓は、亀甲墓で2基確認されたのに対して、家形墓では1基も確認できなかった。自由に向きを決められる家形墓では、意図的に鬼門は避けられていると思われる。

次に、墓型式別にその向きを概観すると、地形をそのまま利用する洞穴・岩陰墓(Ⅰ類)は、概ね内陸(河川)の方角を向く。また、Ⅱ類墓は海を向くものが多い。これに対して、Ⅲ類墓は向きが一定しない。仮墓を除く平地式の墓は、所有者の干支が重視される傾向にあるため、方位の差が大きいという(名護博物館編1994)。なお、当古墓群の墓は、南南東から西回りに東北東までの各方角を向く。ただし、真北・真南・真西を向くものは少なく、概ね若干ずれる。

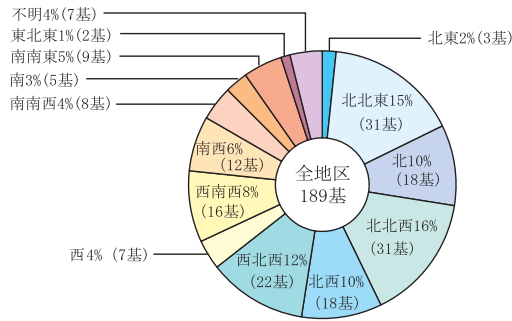
※ただし、風水が民間に普及したのは琉球処分(1879年)後とされる。

### 2) 墓型式の割合

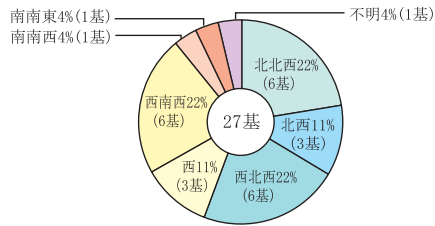
平成17年9月～19年5月にかけて、計189基の墓が確認されている。ただし、当古墓群は現在でも墓地として利用されており、新規墓の造営に伴って、古墓の破壊や改築が年々進行している。そのため、第4図に示した地形測量図中の墓の数基も現在では消滅しているものもある(19～21・28・42・43・78 b・115 b・130)。

新築される墓の多くは、本土復帰以降から主流となっている家形墓(Ⅲa類)であり、当古墓群で最も多い墓型式となっている。そして、仮墓を含めたⅢ類墓は、当古墓群の過半数を占める。一方、Ⅱ類墓は全体の43%であり、Ⅲ類墓を僅かに下回る。亀甲墓(Ⅱd類)はⅢa類に次いで多く、Ⅰ・Ⅱ類墓の主体を占める。Ⅰ類は最も少なく、4%に過ぎない。ただし、ヤクジャーガマは様々な遺骨が安置されるが、「1基」とした。前述した通り、1地区では墓の造営に崖面が利用されているため、Ⅰ・Ⅱ類墓が主体を占める。中でもⅠ類墓は、他地区には殆どないため、1地区を特徴付ける墓型式と言える。また、Ⅱ類墓はa類のみであり、Ⅱa類の86%が1地区に集中する。2・3地区は、概ね墓型式の組成に大差はない。傾斜地であることからⅡ類墓が比較的多く、Ⅲa類は少ない。4地区も同様の傾向であるが、Ⅱd類が主体を成す。5地区は、平地や整地部が点在することに加えて仮墓が多いため、Ⅲ類墓が主体を占める。6地区は丘陵南側の急斜面であるが、平地式のⅢa類が主体を占める。7地区は丘陵頂を削平した整地部で、Ⅲa類が大半を占める。

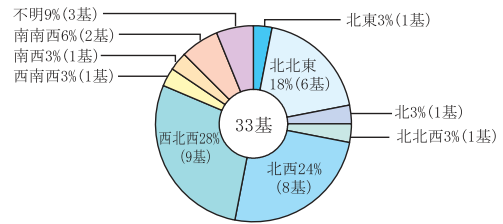
古墓群全地区の墓向き割合



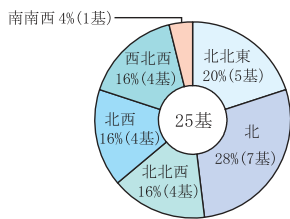
1地区墓向きの割合



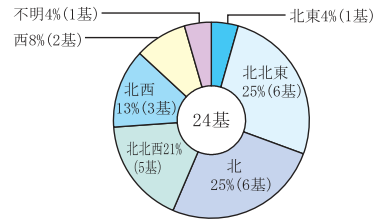
2地区墓向きの割合



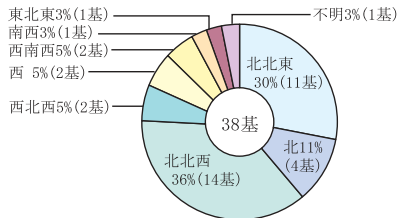
3地区墓向きの割合



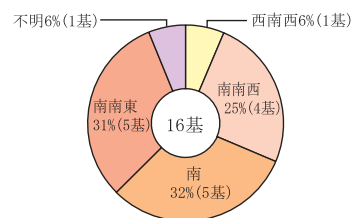
4地区墓向きの割合



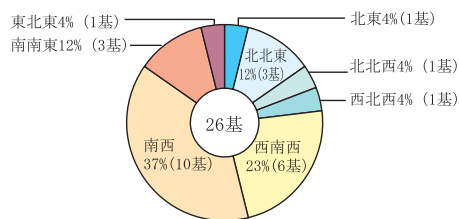
5地区墓向きの割合



6地区墓向きの割合



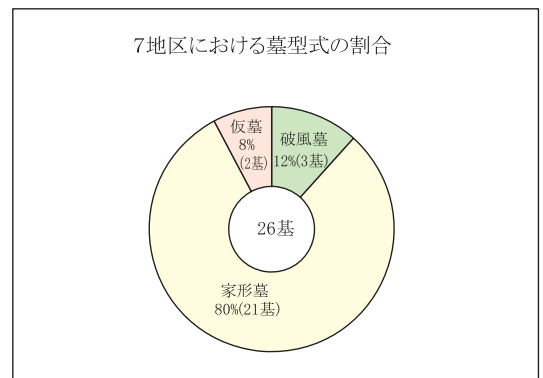
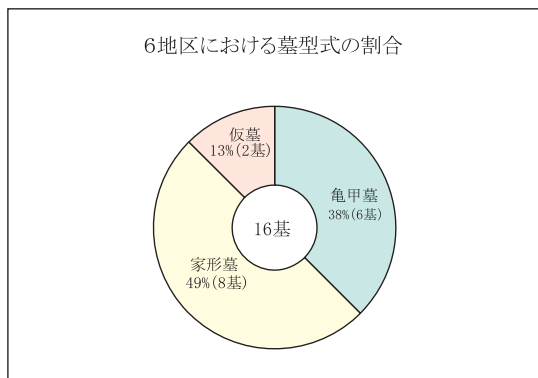
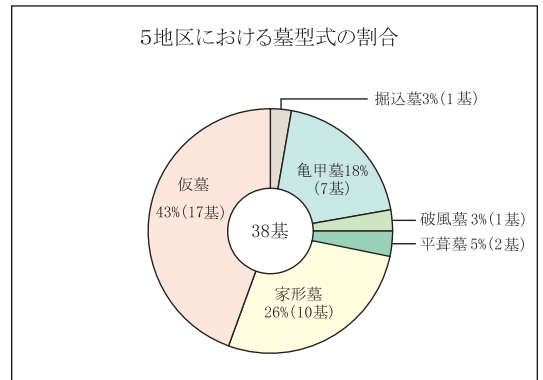
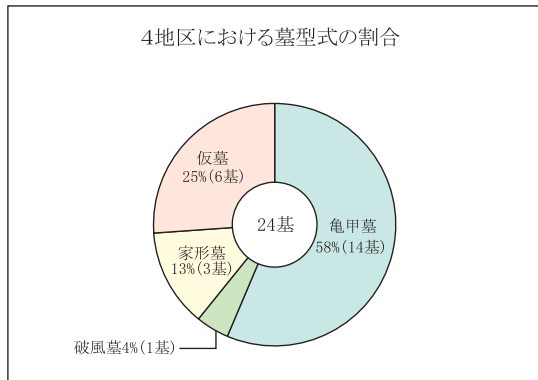
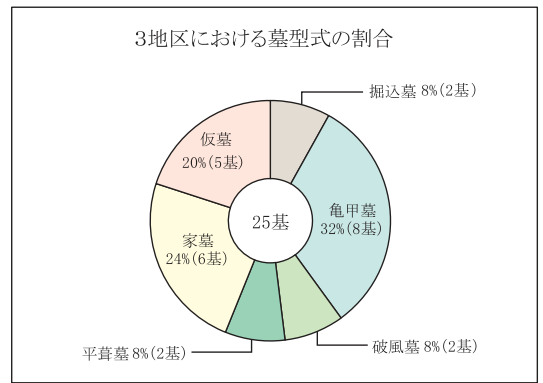
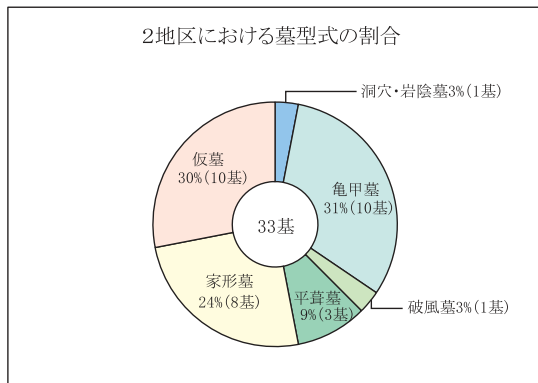
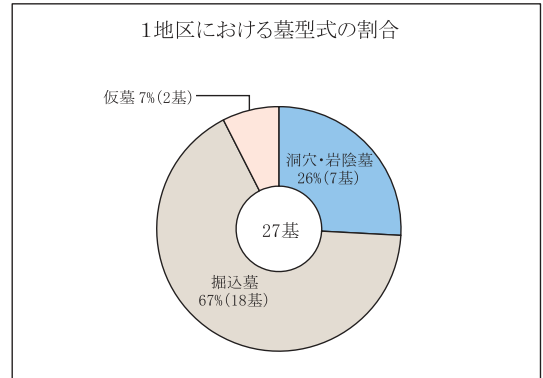
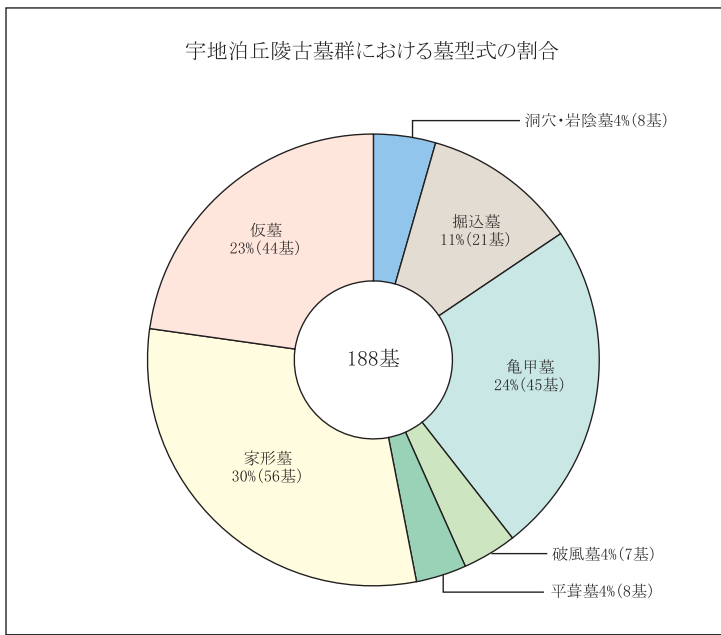
7地区墓向きの割合



	1地区	2地区	3地区	4地区	5地区	6地区	7地区
海向き	北東	—	1	—	1	—	1
	北北東	—	6	5	6	11	—
	北	—	1	7	6	4	—
	北北西	6	1	4	5	14	—
	北西	3	8	4	3	—	—
	西北西	6	9	4	—	2	—
内陸向き	西	3	—	—	2	2	—
	西南西	6	1	—	—	2	1
	南西	—	1	—	—	1	—
	南南西	1	2	1	—	—	4
	南	—	—	—	—	—	5
	南南東	1	—	—	—	—	5
	東北東	—	—	—	—	1	—
	不明	1	3	—	1	1	—

方向 型式	海向き						内陸向き							不明	合計	
	北東	北北東	北	北北西	北西	西北西	西	西南西	南西	南南西	南	南南東	東北東			
洞穴・岩陰墓	—	—	—	—	2	—	2	3	1	—	—	—	—	—	—	8
掘込墓	—	1	—	7	1	6	1	3	—	1	—	—	—	—	1	21
亀甲墓	2	13	12	5	1	5	—	2	—	1	1	3	—	—	—	45
破風墓	—	4	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
平葺墓	—	3	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
家形墓	—	4	2	8	8	3	1	7	11	3	3	5	1	—	—	56
仮墓	1	6	1	7	6	7	3	1	—	3	1	1	1	—	6	44
合計	3	31	18	31	18	22	7	16	12	8	5	9	2	—	—	189

第5図 墓向きの割合 (H19年5月現在)



第6図 墓型式の割合 (H19年5月現在)

### 3) 墓の外観

データベースでは、主に屋根・墓庭・三味台・墓口の形状と大きさについて整理した。各部位における面積および寸法の平均は第10表の通りである。

屋根の形状は、概ね墓型式に準じる。なお、平面形は縦長（奥行が長い）が多いが、Ⅱd類は平均的に横長（幅が長い）になる傾向がある（第10表）。Ⅱ類の墓庭は、Ⅱa類を除いて横長の方形が多い。Ⅲa類も横長の方形が多いが、造営される場所の関係で不定形になるものも多い。また、面積については、Ⅱd類が突出して大きく、Ⅲa類がこれに続く。墓口の大きさはⅡa類が最も小さいが、他は各型式で大きな差は見られない。三味台は、Ⅱb類やⅡd類が大きい。Ⅱa類の三味台は、後代に設置されたものが多いと思われる。また、三味台が無い墓にはカビアンジの施設が設置されないものが多い（第11表）。Ⅱd類では、三味台の隅を穿ったり石などで囲ったりすることによって、カビアンジを行う空間を設けるものが多いが、Ⅲa類のような新しい墓ではカビアンジ用の容器を置くものが多い。

以上で概観した屋根・墓庭・三味台・墓口は、各墓型式に概ね共通して見られるが、亀甲墓は凡例に示すような、他型式の墓には見られない属性を多く有する。これが、亀甲墓を特異な墓とする要因の1つとなっている。特に、眉や亀甲状を呈する屋根の形状が独特であるが、宜野湾市では眉による亀甲墓の編年が試案されている（呉屋ほか1989）。そこで、第12表に示すように、眉各部位の比率とボーシ・墓庭の形状から、当古墓群の亀甲墓の類型を整理したい。ただし、対象とする資料は、眉正面がモルタルやコンクリートで覆われない亀甲墓で、眉各部位の比率がわかるものである。

第13表を概観すると、眉は、端部の反り具合と長さ・中央部の曲がり具合と高さでその形状が決まることが分かる。ボーシは、縦軸と横軸の比率は概ね等しく、1:1.1～1:1.2の範囲に納まる傾向にある。また、白同土の間隔とボーシの横軸との比率から、ボーシの平面形が丸くなるものと、U字状を呈するものに分かれるが、第13表からは、ボーシの平面形と眉の形状との相関関係は見られない。

なお、ボーシヤー墓と考えられる亀甲墓は、モルタルなどで修築を受けたものも含めて少なくとも5基を確認した（47・69 a・74・80・120）。いずれも、袖廻りを省略し、ボーシが誇張されている。ただし、改変された墓や、土砂などで覆われるため原状を確認することのできないものも多い。

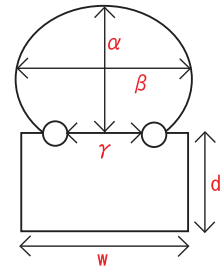
第10表 墓庭・墓口・三味台・屋根の大きさ（平均値）

大きさ		型式		掘込墓 (Ⅱa)	破風墓 (Ⅱb)	平葺墓 (Ⅱc)	亀甲墓 (Ⅱd)	家形墓 (Ⅲa)
		面積	幅 奥行					
墓庭	面積			9.7	10.0	8.4	19.5	16.6
墓口				0.4	0.7	0.6	0.7	0.7
三味台				0.6	2.6	1.7	3.2	2.1
屋根	幅			2.3	3.7	3.7	7.4	2.8
	奥行			-	4.4	4.6	7.0	3.8











第11表 三味台とカビアンジの有無

三味台	無し				1段				2段以上			不明	合計
	カビアンジ							カビアンジ					
	有		無	不明	有		無	不明	有		不明		
容器	その他	容器			その他	容器			その他				
洞穴・岩陰墓(Ⅰ)			8										8
掘込墓(Ⅱa)	1		13			1	1					5	21
破風墓(Ⅱb)			2			4			1				7
平葺墓(Ⅱc)			2			4		1				1	8
亀甲墓(Ⅱd)				1	5	17	2	3	1	11	1	4	45
家形墓(Ⅲa)					30	14		1	6	4	1		56
仮墓(Ⅲb)	1	2	35				1					5	44
合計	2	2	60	1	35	40	4	5	7	16	2	15	189
					65				84			25	

第12表 眉とボージ・墓庭における各部位の比率

眉正面	a/b	1に近づく程 (bが小さい程)、眉端部が高く反り上がる。	 <p>眉正面模式図</p>
	a/A	1に近づく程 (Aが小さい程)、眉端部の反りが矮小される。	
	a/B	1に近づく程 (Bが小さい程)、眉端部の長さが強調される。	
	A/B	1に近づく程 (Bが小さい程)、眉上部の丸味が強調される。	
墓平面	$\alpha : \beta$	$\alpha$ と $\beta$ 近づく程、ボージの形状は正円に近づく。	 <p>ボージ・墓庭模式図</p>
	$\gamma / \beta$	1に近づく程 ( $\beta$ が小さい程)、ボージの平面形はU字状を呈す。	
	$w / (\alpha + d)$	$(\alpha + d)$ が大きくなる程、墓全体の平面形は縦長を呈す。	

第13表 宇地泊西原丘陵古墓群における主な亀甲墓の類型

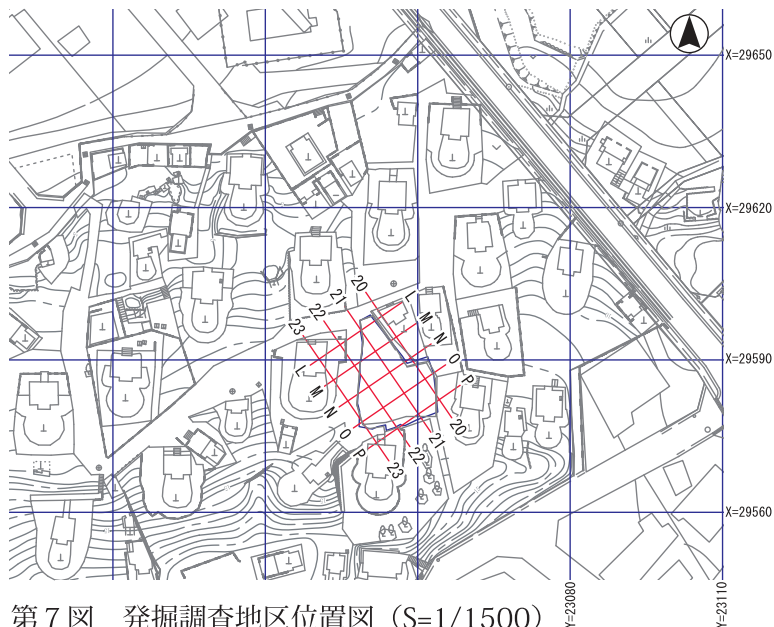
番号	地区	向き	眉	ボージと墓庭	三味台	墓口	備考
26	2	北北東		$\alpha : \beta \approx 1.2:1$	1.9㎡	0.7㎡	
				$\gamma / \beta \approx 1/1.2$			
29	2	北北東		$\alpha : \beta \approx ?$	1.4㎡	0.8㎡	眉半壊のため模式図は左右をほぼ対象に復元。屋根計測不可。
				$\gamma / \beta \approx ?$			
30	2	北北東		$\alpha : \beta \approx 1:1.2$	2.0㎡	0.6㎡	眉半壊のため模式図は左右をほぼ対象に復元。
				$\gamma / \beta \approx 1/2.0$			
31	2	北西		$\alpha : \beta \approx 1:1.1$	2.3㎡	0.8㎡	
				$\gamma / \beta \approx 1/2.3$			
49	2	西北西		$\alpha : \beta \approx 1:1$	1段目: 2.3㎡ 2段目: 5.5㎡	0.6㎡	眉に向かって左側端部にモルタル覆う。
				$\gamma / \beta \approx 1/1.5$			
68	3	西北西		$\alpha : \beta \approx 1:1.2$	2.2㎡	0.6㎡	眉端部僅かにモルタル掛かる。
				$\gamma / \beta \approx 1/2.2$			
76	4	北北西		$\alpha : \beta \approx 1:1.3:1$	2.1㎡	0.8㎡	宮里家古墓。
				$\gamma / \beta \approx 1/1.5$			
83	4	北北東		$\alpha : \beta \approx 1:1.1$	0.6㎡	0.7㎡	
				$\gamma / \beta \approx 1/2.0$			
85	4	北		$\alpha : \beta \approx 1:1.1$	2.2㎡	0.7㎡	
				$\gamma / \beta \approx 1/2.5$			
101	5	北北東		$\alpha : \beta \approx ?$	なし	0.5㎡	眉半壊のため模式図は左右をほぼ対象に復元。屋根計測不可。
				$\gamma / \beta \approx ?$			

## 第2節 宮里家古墓発掘調査の成果

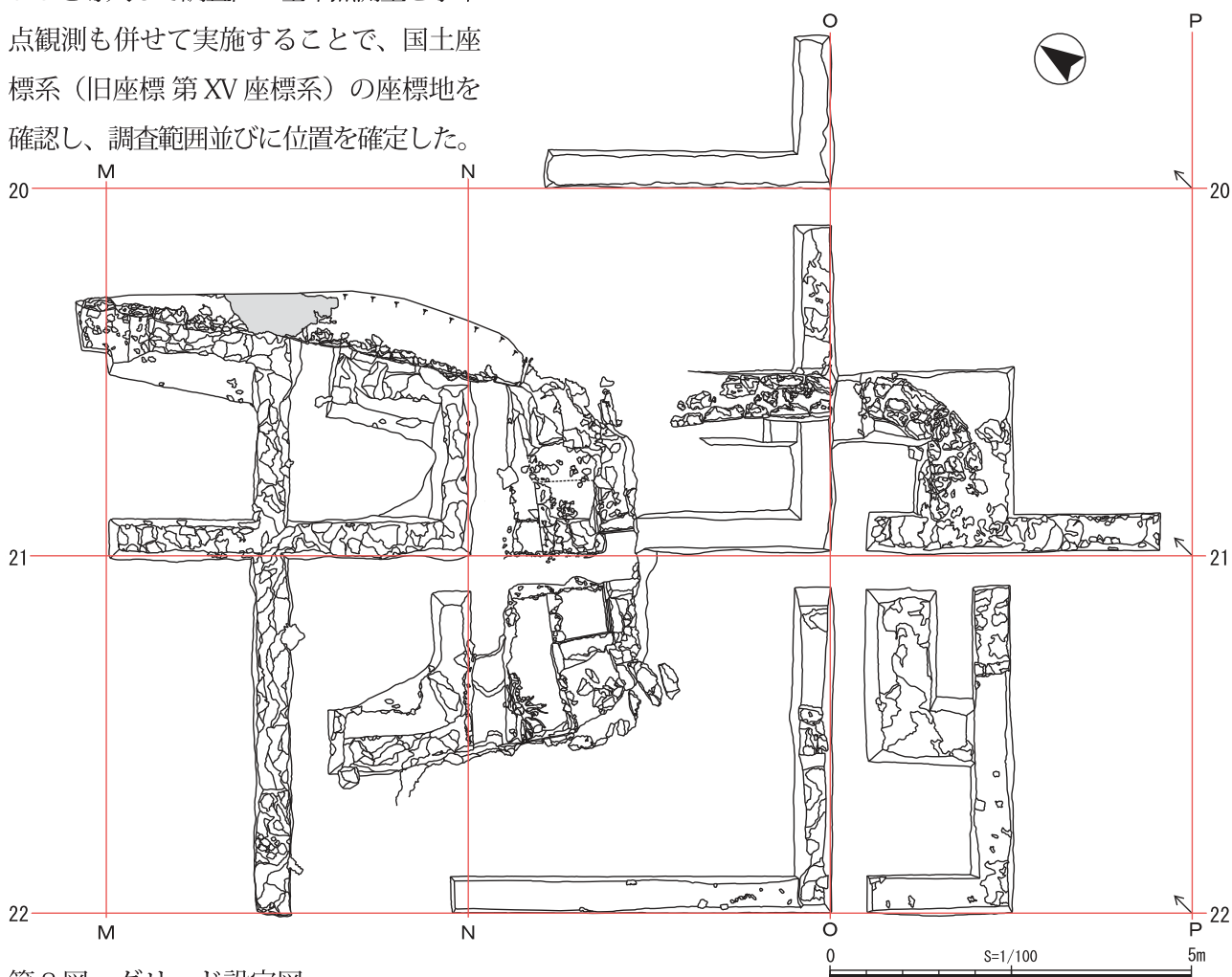
### 1. 調査区の設定と層序

今回の調査対象となった宮里家所有の古墓は、周知の遺跡である宇地泊西原丘陵古墓群においても、各種調査が必要と判断される古式亀甲墓で、個人墓地造成による造成工事がなされているのを確認したことから、所有者の了解と宇地泊区自治会の協力を得て、造成工事の延期と埋蔵文化財調査の実施に至った。

宮里家が所有する古墓の調査区設定については、平成16年度段階の古墓内部のレーザー測量による断面ラインを基本的軸線とし、墓室内から墓口に向けた略東西方向にアルファベット数字を、それに直交する形で略南北に算用数字を5m毎に付して任意の作業軸を設定した後に、略南東隅の交点の位置に各グリッド番号をN-21・O-21のように指示した。さらに、地籍併合図や登記簿図面等をもとに境界測量を行い、隣接する墓や里道との境界を把握し、その損壊防止に努めたほか、GPSを導入して調査区の基準点測量と水準点観測も併せて実施することで、国土座標系（旧座標 第XV座標系）の座標地を確認し、調査範囲並びに位置を確定した。



第7図 発掘調査地区位置図 (S=1/1500)



第8図 グリッド設定図

## 基本的層序

宮里家古墓においては、前述のとおり緊急調査に着手する時点で、既に造成工事により古墓前面部分が損壊され、眉石や一部袖石等が崩落していたが、幸いにも古墓上部や墓庭部の表層部分、庭積み等については掘削がなされていなかったため、設定されたグリッドラインの最小単位を2.5 mとし、必要とされる基本的層序の獲得を目的にトレンチを設定した（第8図参照）。層序は、古墓上部と古墓下部において堆積状況や造成状況が異なるため、それぞれに基本的層序として設定した。特に、古墓上部はボーシ周縁の石列内外の造成状況が異なるため、ボーシ石列内・外として扱った。以下に、宮里家古墓の基本的層序について記す。

### < 古墓上部 基本的層序 > (I a～b・II a層は共通)

I a層 腐植土層。暗褐色混礫土層でビニール・ゴミ等の現代遺物が散見される。7.5YR4/1

I b層 客土。灰褐色混礫土層でコンクリ片・ゴミ等の現代遺物が散見される。7.5YR4/1・10YR4/2

II a層 旧表土①。墓としての終期か。暗褐色混礫土層でカタツムリ・ピン片・等含。2.5 Y R 4/1・10 Y R 3/1～4/1

II b層 旧表土②。II a層以前の表土。茶褐色混礫土層で10～20 cm大の石灰岩礫が主体。一部にモルタル片を多量に含むが、現代遺物は見られない。2.5 Y R 4/1・10 Y R 4/1～5/2

#### ボーシ石列内

II c層 古墓造成時の表層。茶褐色混礫土層で1～5 cm大の石灰岩礫を多量に含む。10 Y R 4/2～5/2

II d層 造成層①。黄灰褐色細礫層で石灰岩細礫を充填して形成する。10 Y R 4/2～6/3

II e層 造成層②。黄灰褐色細礫層で、II d層より石灰岩細礫を堅く充填している。10 Y R 6/3～7/3

※これより下部に、裏込石が充填されており、さらに下部には石灰岩板石が墓室内天井を構成する。

#### ボーシ石列外

II c層 古墓造成時の表層。茶褐色混礫土層。石列外北側では礫に比してマーシの割合が高い。石列外南側では1～5 cm大の石灰岩礫を多量に含む。7.8 Y R 4/2・10 Y R 4/2

II d層 造成層①。茶褐色混細礫土層。石列外北側では1～5 cm大の石灰岩礫の割合が高い。石列外南側では10～15 cm大の石灰岩礫を多量に含む。7.5 Y R 4/2・10 Y R 4/2

VII 層 地山（マーシ）。茶褐色土で一部に風化石灰岩礫を含む。基地内基本層序のVII層。7.5 Y R 4/2・10 Y R 4/2

VIII 層 基盤層の琉球石灰岩。基地内の基本層序のVIII層。10 Y R 6/3

### < 古墓下部基本層序 >

I a層 現地表面。暗褐色混礫土層でガラス片・ビニール等現代遺物含む。古墓損壊以降の堆積層。10YR5/2

I b層 旧地表面①。灰褐色混礫土層でI a層以前に堆積した層。カタツムリ・マイマイやビール缶・鉄屑等の現代遺物を多量に含む。10YR6/3

I c層 旧地表面②。黄灰褐色混礫土層で5～10 cm大の石灰岩礫を含む。5 Y R 4/1・7.5 Y R 4/1・10 Y R 3/1

II a層 旧地表面③。墓の終期を想定。暗褐色混礫土層で5～10 cm大の石灰岩礫を含む。7.5 Y R 4/1・10 Y R 4/2

II b層 古墓造成時の表層。黄灰褐色混細礫層で5 mm～1 cmの石灰岩細礫を充填する。本層の上面より多数の無文銭が検出されている。10YR4/2

II c層 造成層①。黄灰褐色混細礫層。II b層に比して細礫の割合低い。一部に10 cm大石灰岩礫。7.5 Y r 5/3

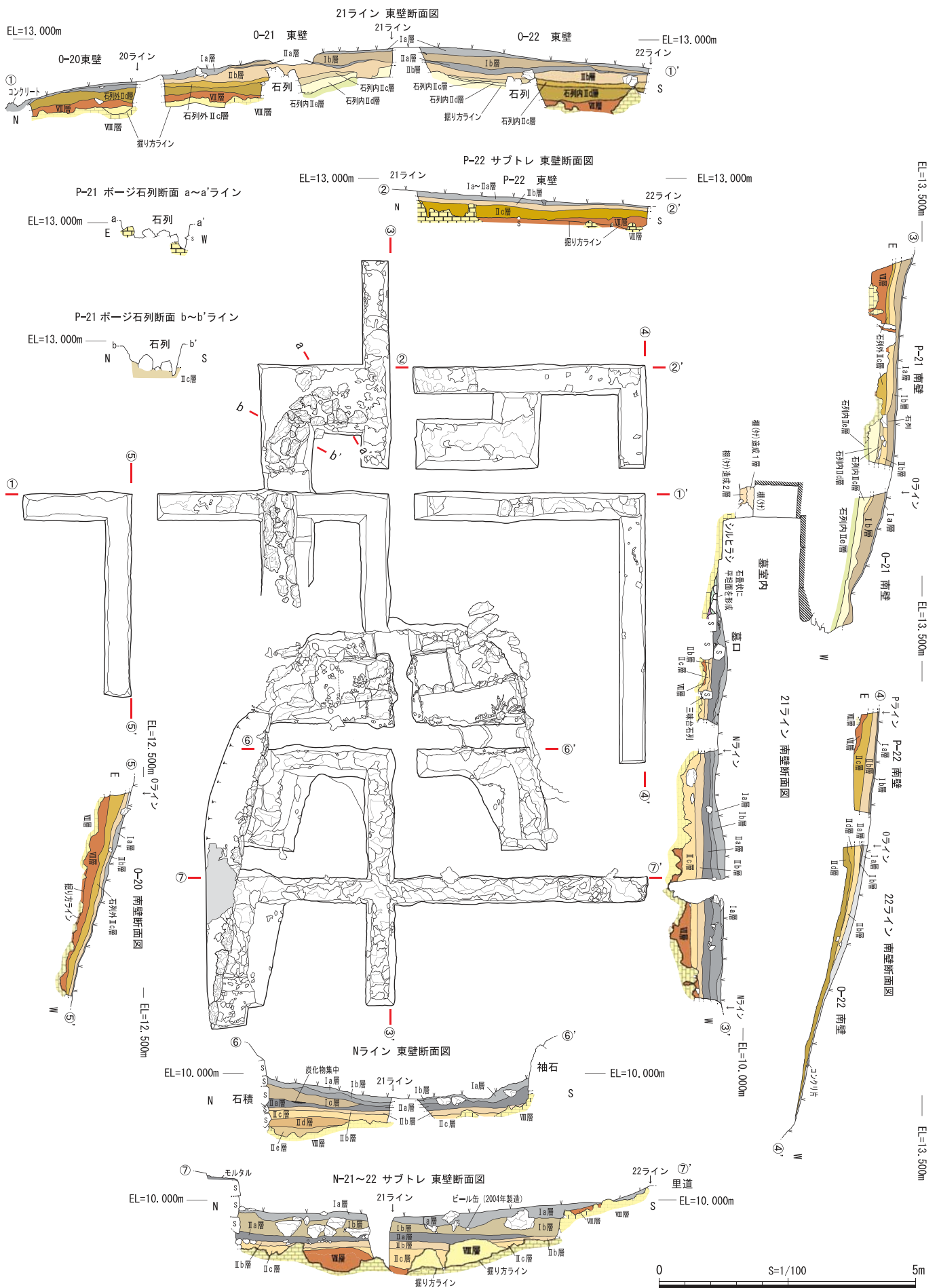
II d層 造成層②。茶褐色混礫土層。マーシを混入するが5～10 cm大の石灰岩礫が主体。7.5 Y R 4/2・10 Y R 4/2

II e層 造成層③。黄灰褐色混細礫層。平坦面を形成するための造成。7.5 Y R 5/3・10 Y R 5/3

VII 層 地山（マーシ）。茶褐色土で一部に風化石灰岩礫を含む。基地内基本層序のVII層。7.5 Y R 4/2・10 Y R 4/2

VIII 層 基盤層の琉球石灰岩。基地内の基本層序のVIII層。10 Y R 6/3





第9図 宮里家古墓 基本的層序

## 2. 遺構

宮里家古墓の立地は、方向的に北北西に軸を向けて海岸に面しており、石灰岩丘陵の緩斜面を造成して構築されている。形式的には亀甲墓（Ⅱd類）に分類され、古墓上部における発掘調査の結果、屋根の平面的な形状についても墓型式に準じて亀甲形であることが判断されており、いわゆるボージと称される亀甲墓の特徴的な形態を成している。

亀甲墓のもう一つの特徴的な形態である眉（マユ）についても、墓地造成工事により損壊される以前の写真を基に判断すると、眉頂部の曲がり具合が弱い。比高が低い。眉両端の反りが弱いという傾向が認められる（第13表）。また、墓口正面は鏡石（カガミイシ）・門冠い（ジョウカブイ）・隅石（シミイシ）の存在する定型化された石積み手法ではなく相方積みの仕様により構築されているのが確認できる。

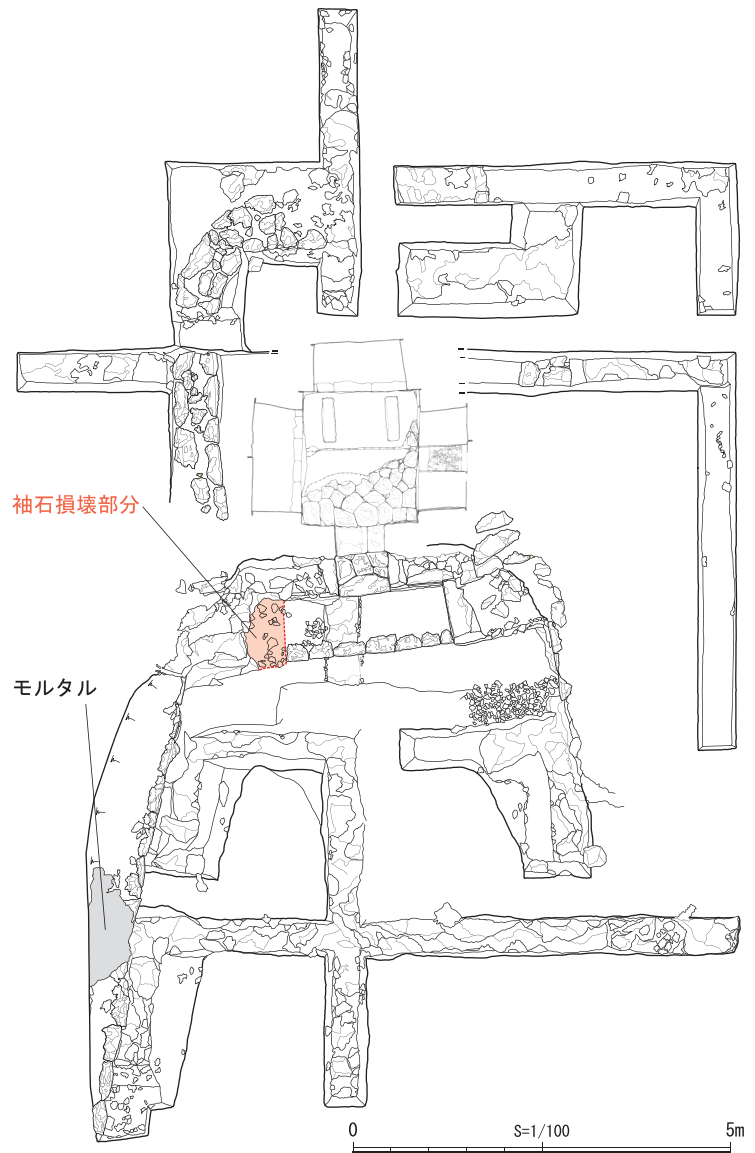


図版6 損壊前の状況

古墓下部については、調査着手以前より庭積み（ナージミー）が両側面において露出している状態であったが、発掘調査によりその全体が検出されている。また、石灰岩丘陵の緩斜面地において平坦面を形成するために、石灰岩礫や石灰岩細礫による造成を行って墓庭の床面等を構築しているほか、墓口前には一段の三味台（サンミデー）も確認されており、同様の造成が確認されている。

墓室内についてであるが、天井は琉球石灰岩の板石を3枚配して平坦に構築されていた。内部には厨子を安置するための棚（タナ）が出窓状にあり、正面右の棚は集骨施設としても機能していたほか、シルヒラシには棺桶を配置する際の台座としての加工が施されており、さらに、一段下位においては石畳様の敷石による平坦面が形成されるなど、丁寧な構築がなされている状況であった。

以下に、古墓上部・古墓下部の主要な遺構についての詳細を記す。



第10図 古墓平面図

ボーシ（屋根）

亀甲墓であるという型式的な特徴から、ボーシの平面的な形状についても亀甲形が想定されたことから、古墓上部においては、当初設定したグリッド設定を基に2.5 m単位でサブトレンチを設定して検出を試みたところ、O-21～P-21 グリッド間にて、ボーシ周縁に配された石列の北側半分に相当する部分が良好な状態で検出された。これに伴い、南側にもサブトレンチを拡張して残りの検出を試みたが、大きく改変されており、O-22 グリッドのOライン上に設定したトレンチにて一部が検出されたのみであった。

検出されたボーシの平面的形状はU字状を呈しており、石列内側は3層からなる石灰岩礫等の造成を行い、ボーシ頂部を膨らませているが、石列外側は石灰岩礫を多量に混入したマージ母材の造成層で古墓上部を形勢しており、石列の内外で造成状況が異なっている。また、石列の内面は切石で丁寧な加工が施されているが、外面は不定形で雑な処理が成されている。



ボーシ石列検出（南東より）

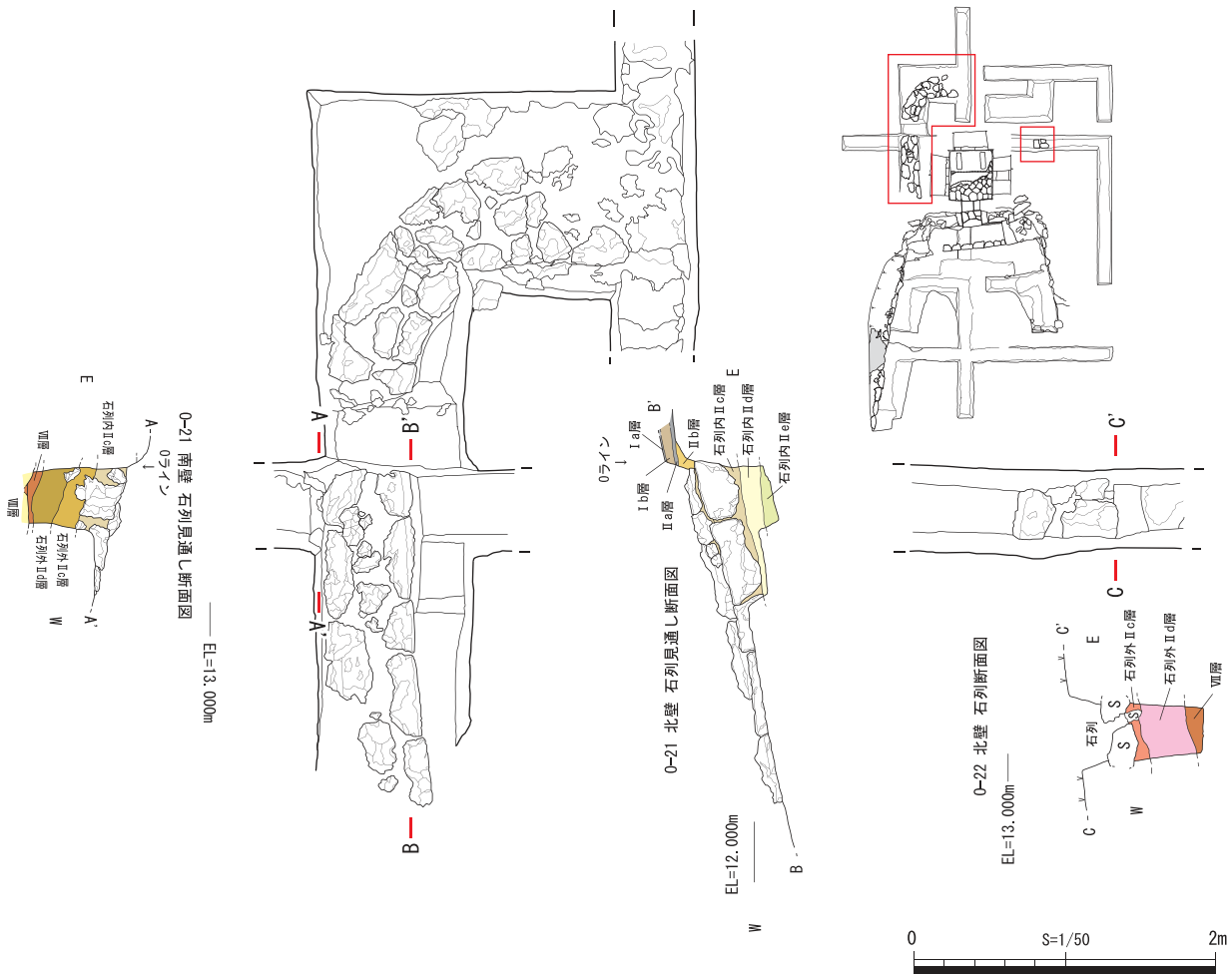


ボーシ石列検出（南より）



図版7 ボーシ石列検出状況等

造成状況



第 11 図 ボーシ平面図・見通し断面図

### 墓庭（ハカナー）

墓庭については、石灰岩丘陵の緩斜面地形を平坦面とするために大規模な造成を施しており、後述する三味台（サンミデー）と一連の造成を行っている（第9図参照）。特に石灰岩地形における陥没が著しい箇所においては、Ⅱ d～e層の礫混土層により基礎的な平坦面の形成を行っており、上層に石灰岩礫（Ⅱ c層）を充填した後、さらに5 mm～1 cm台の細礫（Ⅱ b層）を充填して、古墓造成時の床面としている。墓庭の寸法については判然としないが、最大幅・奥行ともに7 m前後の台形様が予想される。また、墓庭からは、無文銭が7点検出されている。その他、墓庭に関連する主要な遺構としては、庭積み（ナージミー）と三味台（サンミデー）が上げられる。

### 庭積み（ナージミー）

庭積みは、調査着手以前より墓庭の両側面において露出している状態であったが、今回の調査により比較的良好な状態で残存していることが確認されている。各袖石から西側に広がる形で構築されており、北側庭積みは6 mにも及ぶが、南側庭積みについては1 m程度のみ残存している状態であった。北側庭積みについては、袖石に連なる部分では比較的丁寧な切石加工による相方積みが見られるが、西側の墓庭下手へ行くにつれて不定形で雑な積み石となっている。南側庭積みは、露頭する石灰岩の間隙を埋めるように丁寧な相方積みによる積み石が成されている。

### 三味台（サンミデー）

墓口前には三味台が確認されている。石灰岩切石による石列を段状に1段配して、内側を墓庭床面造成の際と同様のⅡ b～c層による造成を行って床面を形成しているが、厳密に言うならば、墓庭の床面造成に比して石灰岩小礫と細礫で充填された丁寧な造りとなっている。北側の一部石列は、個人墓地造成工事の際に袖石とともに損壊されており、欠落している状態であった。なお、三味台の床面からは7点の無文銭が検出されているほか、沖縄産施釉陶器の火炉や瓶と思われる葬送儀礼に関連する遺物が得られており、興味深い。

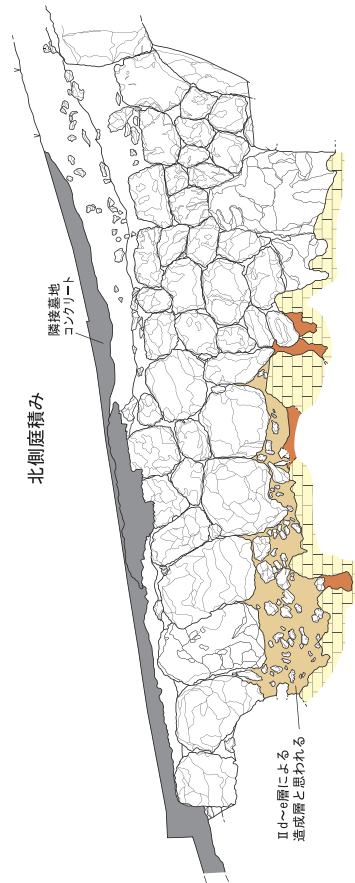


北側庭積み

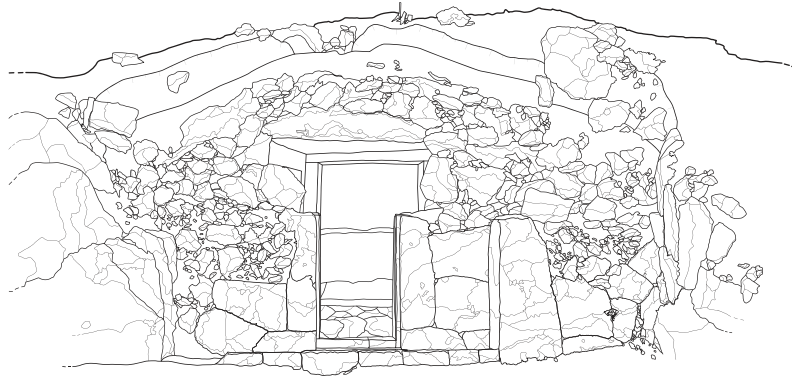


南側庭積み

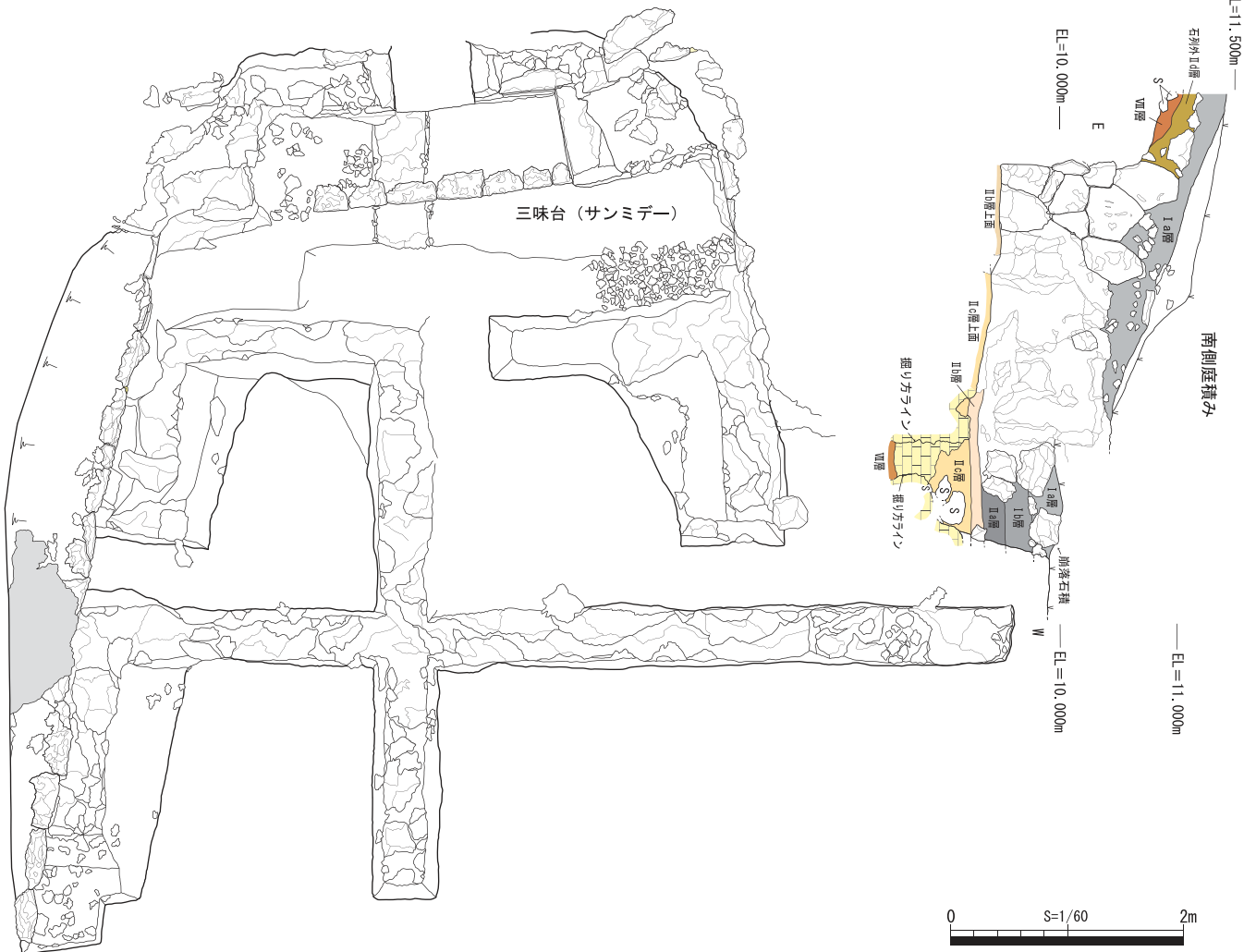
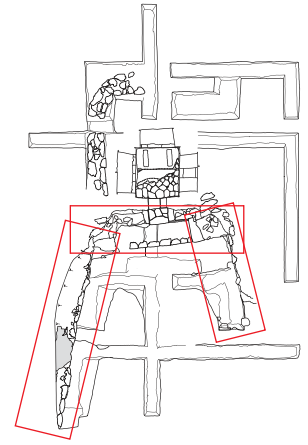
図版8 庭積み（ナージミー）



図版9 三味台（サンミデー）検出状況



古墓正面図



第 12 図 墓庭平面図・庭積み見通し断面図・古墓正面図

第 14 表 宮里家古墓データベース

単位:m, m<sup>2</sup>

76	位置			型式	屋根					墓庭					三味台		墓口			
	座標		地区		向き	形状	造り・状況		寸法		形状	造り・状況		寸法		造り・状況			寸法	
	X	Y	Z		II d?		亀甲形	ボーン周縁に石列を配して亀甲形をなす。古式亀甲墓に見られる円形状の形態ではなく、U字状を呈するものと思われる。	面積	幅		奥行	面積	幅	奥行	面積	幅	奥行	高さ	
	29586	23044	11.100	4	北北西			18.3	5.0	4.0				1段	2.6	0.8	定型化された手法ではなく、相方積みの仕様である。石畳の敷石による丁寧な構築で平坦面をなしている。	幅	奥行	高さ
	床面(シルセラン+棚)				墓室					天井					遺物					
	形状		造り・状況		シルセラン		棚		天井		高さ		蔵骨器			副葬品など		人骨	年代	
	面積		寸法		形状		数		形状		高さ		床面から			副葬品など		有	構築方法を考慮して古式亀甲墓の可能性有	
	6.5		面積 2.7		方		奥 1 7.2 0.6		平坦		0.8		石厨子 3基			煙管・簀・無文鏡				
	幅 2.7		幅 1.5		右 1 8.4 0.6		左 1 7.7 0.6		瓶球石灰岩敷石を3枚配して平坦な天井を構成する。		0.8		赤堀家形 1基							
	奥行 2.4		奥行 1.8		左 1 7.7 0.6						0.8		ボーン・厨子 1基							
	出窓状				棚が正面・右・右にあり、右側は排水機能を有する。棺桶配置用の台座を加工するなど丁寧な造り。															

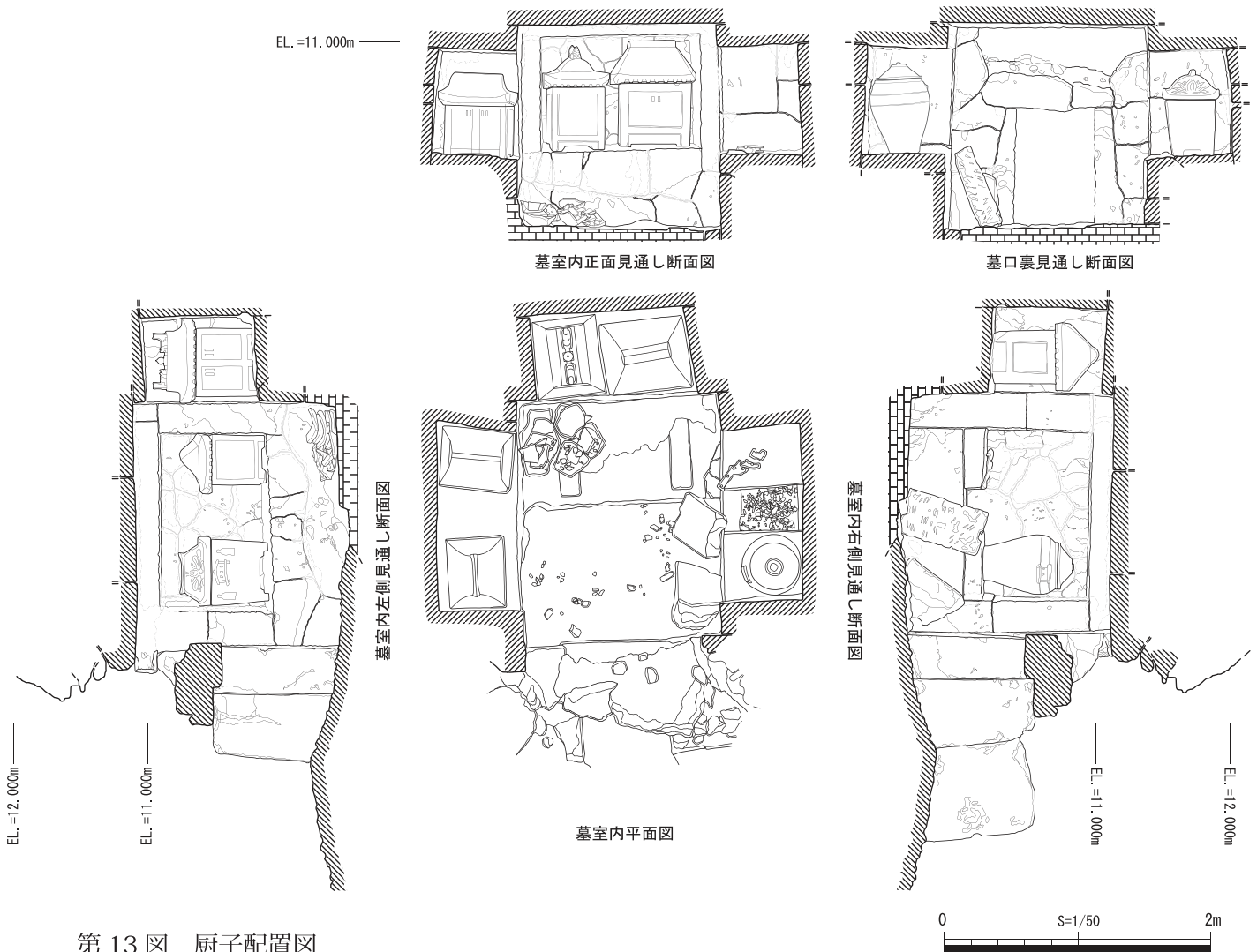
### 墓口及び墓室内

先述のように、本古墓は個人墓地造成に伴い墓正面が大きく損壊しており、現状からは当時の状況を窺い知れない。損壊前の状況については前述したが、一部残存する袖石等からも定型化された石積み手法ではなく相方積みの仕様であるのが確認できる。墓口は石畳様の敷石で平坦面が形成されている。

墓室内には厨子を安置する棚（タナ）が石柱と相方積みにより出窓状に構築されており、目地には漆喰が塗布されていた。また、正面右の棚は集骨機能も有しており、第13図の原図となるレーザー測量時には集骨したままの状態で見つかる。シルヒラシには棺桶安置用の台座が加工されており、表層を除去後、一段下位面には石畳敷石による平坦面が形成されていた。天井は石灰岩板石を3枚配石して平坦に構築されており、非常に丁寧な造りとなっている。



図版 10 古墓損壊状況及び墓口検出状況



第13図 厨子配置図



左棚

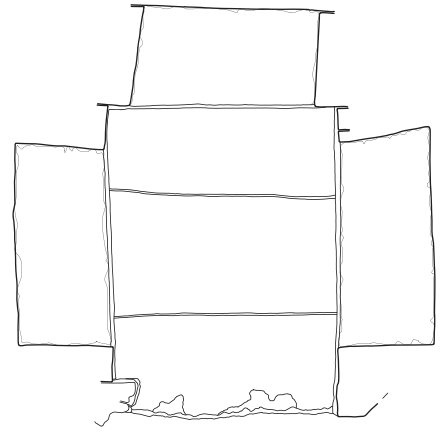


正面棚

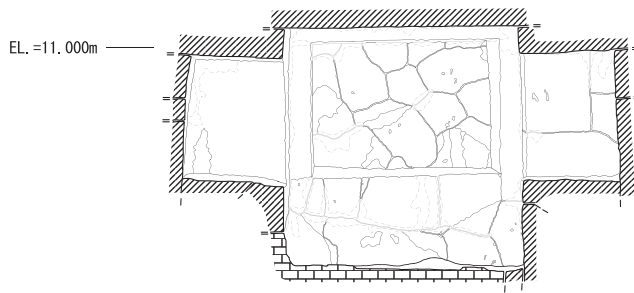


右棚

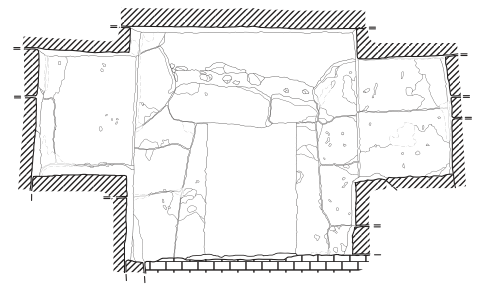
厨子 配置状況



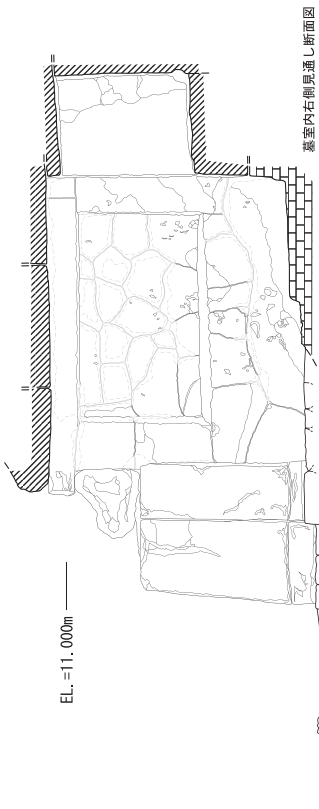
墓室内天井展開図



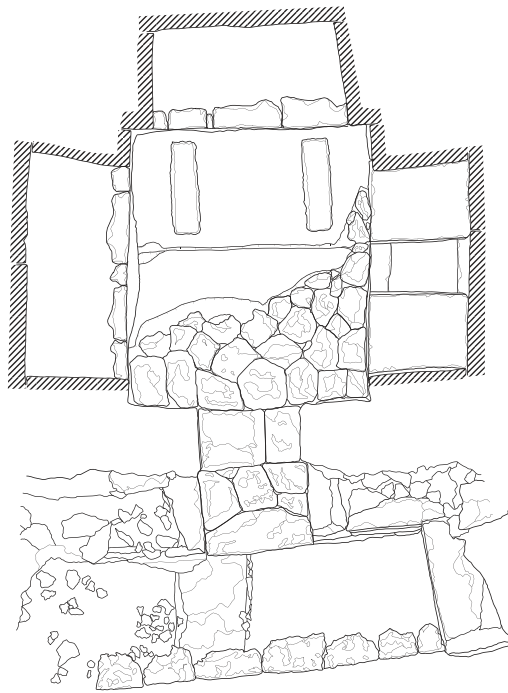
墓室内正面見通し断面図



墓口裏見通し断面図



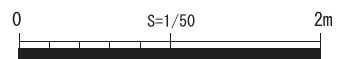
墓室内右側見通し断面図



墓室内平面図



墓室内左側見通し断面図



第 14 図 墓室内平面図・見通し断面図



南側庭積み検出状況



北側庭積み検出状況



三味台造成状況



北側庭積み・墓庭造成状況



墓口検出状況



墓室内敷石造成状況



墓室内検出状況



墓室内右棚



### 3. 遺物

#### 概要

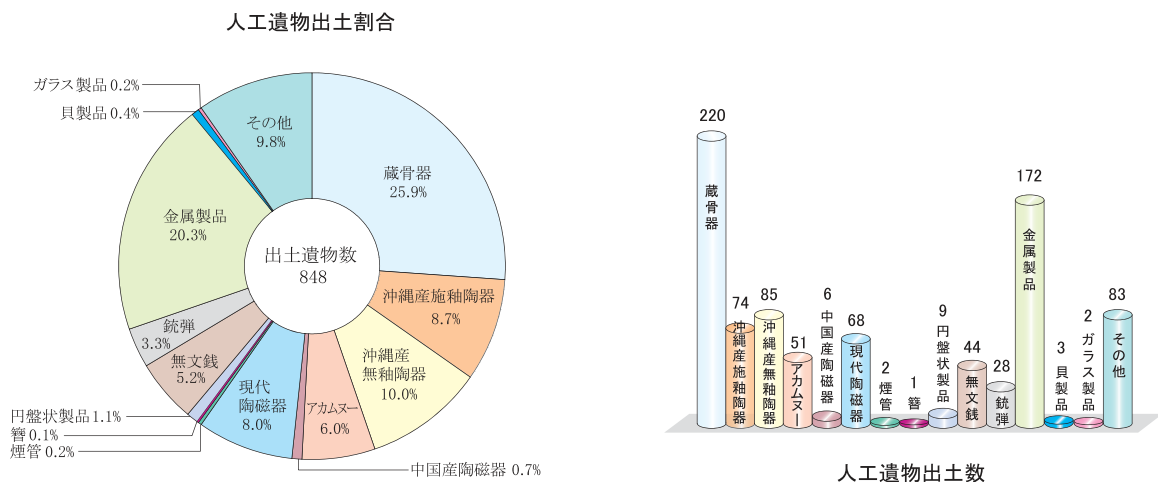
宮里家古墓では、963 点の遺物が得られた。このうち人工遺物は 88% を占める。中でも蔵骨器が多く、少なくとも 20 個体分が得られている。ただし、蔵骨器は墓室外で表採されたものが多く、墓室内から得られた資料は蔵骨器全体の 10% に過ぎない。墓室内の棚には、家形 4 基とボージャー 1 基が安置されていた。いずれも完形である。この他は概ね小片で、蓋を除いて全形を復元できる資料は乏しい。そのため、一部の資料に関しては、積極的に図上復元を試みた。蔵骨器を含めた沖縄産陶器は、人工遺物全体の約 45% を占める。このうち、沖縄産施釉・無釉陶器は 19% にあたる。無釉陶器の出土量は、施釉されたものに比べて若干多いが、小片が多いため図化できた資料は 9 点のみである。一方、施釉陶器も多くは小片であるが、図上復元できるものも多く、比較的多様な器種が得られている。

沖縄産の焼き物は、陶器の他にアカムヌーが得られている。出土量は人工遺物全体の 6% に過ぎず、その殆どが小片であるが、器種は多様である。全て墓室外からの出土および表採で、墓室内からは得られていない。焼き物は、この他に中国産と現代陶磁器が得られている。中国産陶磁器の出土量は極めて少なく、人工遺物全体の 1% に満たない。全て墓室外からの出土である。

蔵骨器に次いで多く得られたものは金属片で、人工遺物全体の 20% を占める。これらの多くは墓室内から得られているが、用途は不明である。金属製品は、無文銭や銃弾などが比較的多く得られている。この他に、出土量は少ないものの、円盤状製品や煙管、簪なども得られている。円盤状製品は、9 点の資料が得られているが、墓室内からは出土していない。一方、煙管や簪は墓室内から得られているため、副葬品として持ち込まれたものと思われる。

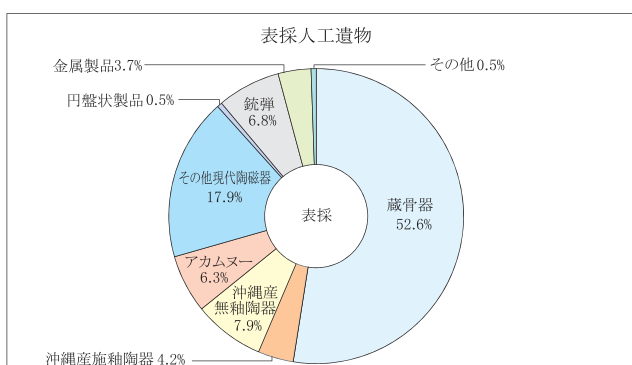
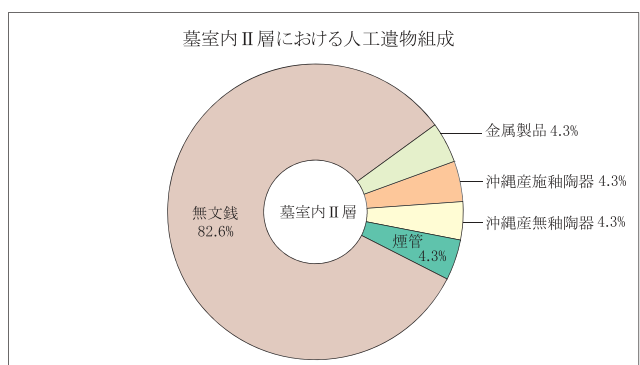
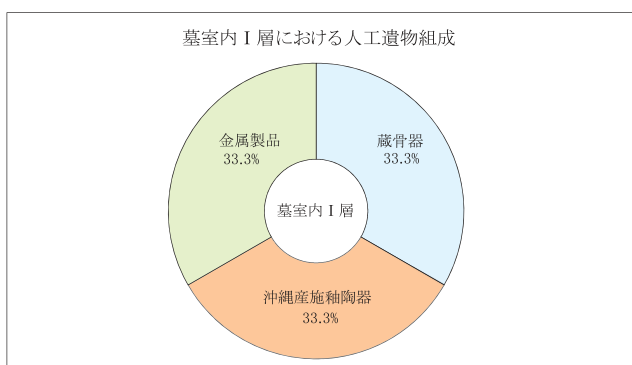
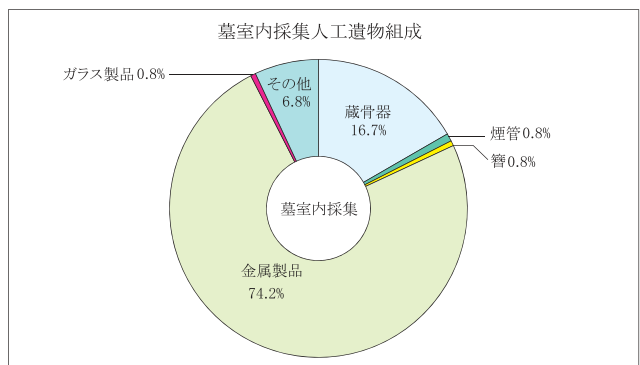
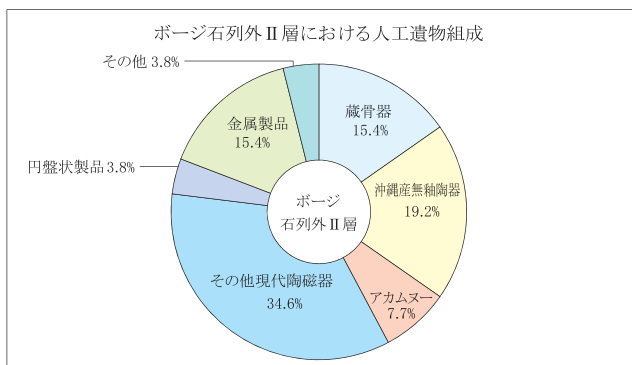
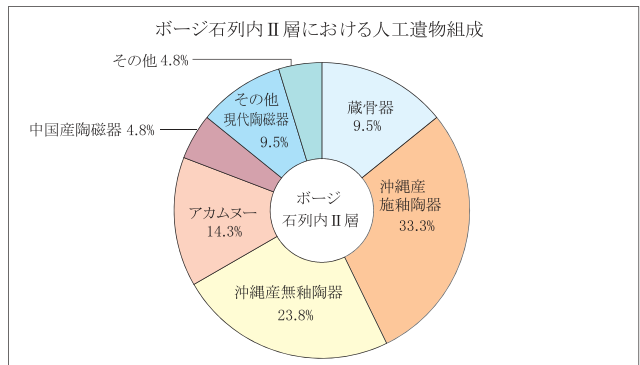
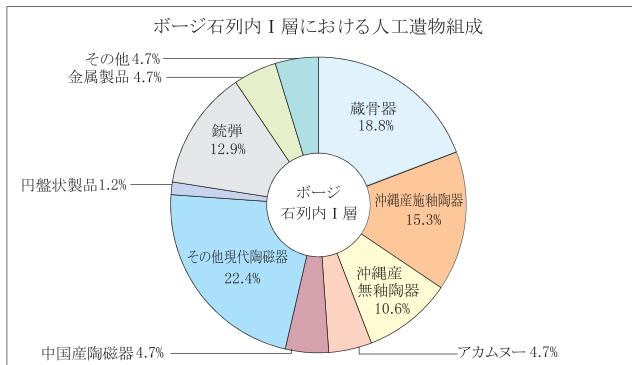
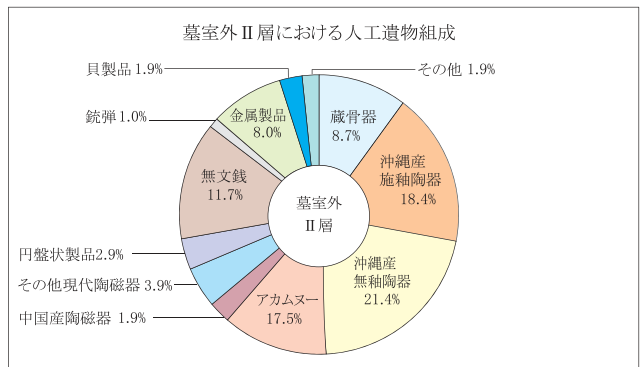
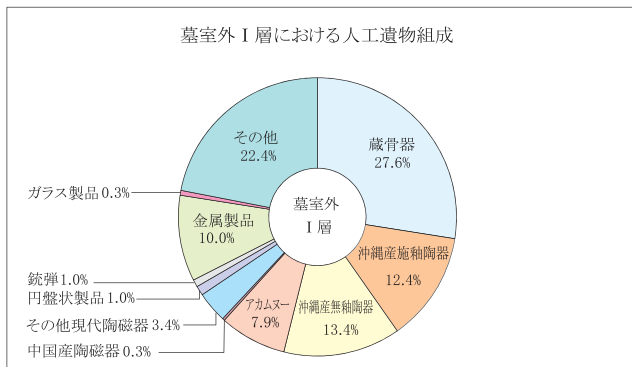
墓庭周辺では、I～II 層を通して多様な遺物が得られている。特に II 層では、無文銭の出土が目立つ。これは、墓室内ではより顕著で、8 割以上を無文銭が占めている。また、墓室内の床面および I 層からは金属片が多量に得られているが、これらが戦後に持ち込まれたものかは不明である。墓室外では戦後生産された現代陶磁器や骨壺片が得られているのに対して、墓室内ではこれらの遺物を確認することはできない。

自然遺物は、貝類・獣骨・石類が得られた。このうち、貝類が過半数を占める。獣骨は鋭利な刃物で切断された痕が確認できるものが多く、比較的新しい食料残滓と考えられる。なお、自然遺物は全て墓室外から得られている。



第 15 図 宮里家古墓における人工遺物の組成





第 16 図 層位別人工遺物検出状況

各遺物の様相

1) 蔵骨器

宮里家古墓では、200 点余りの蔵骨器が得られた。これらは器形や葬制などによって、第 16 表のような 10 種に分けられる。この内、石製と赤焼の家形蔵骨器・完形のボージャー計 5 基は、諸般の事情により調査終了前に搬出されたため、3次元レーザー測量を基に簡略的な実測図を作成した（第 18 図～ 22 図）。

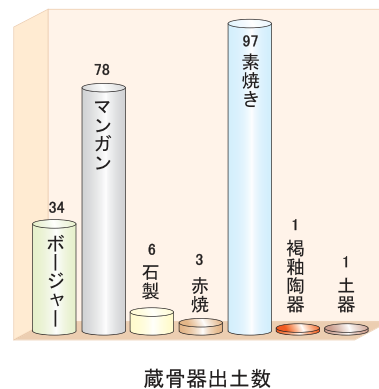
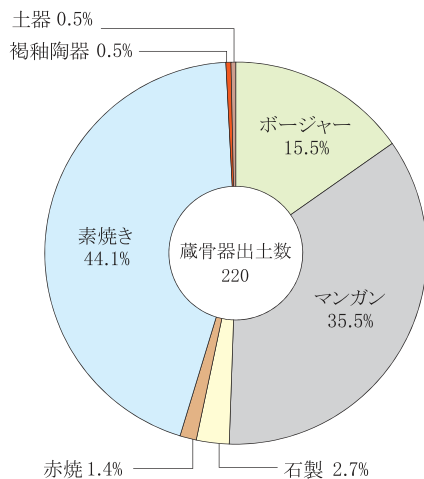
石製の家形蔵骨器（石厨子）は、入母屋形と寄棟形の 2 種がある。一般的に入母屋形が古いとされるが、銘書が確認できていないため、年代は不明である。いわゆる赤焼の家形蔵骨器は寄棟形のもので、ボージャーに特徴的な窓枠が正面に貼付される。ボージャーの出土量は、蔵骨器全体の 16% である。完形の 1 基を含めて、少なくとも 3 個体が確認できた。墓庭からの出土が多いが、墓室内でも多く得られている。ボージャーは、概ね 18 世紀に焼成されている。

マンガン掛け蔵骨器は、全体の 36% を占める。これらは、ほぼ墓室外で得られている（第 17 表）。少なくとも 6 個体が得られているが（第 17 表 A～F）、『銘苺古墓群（VI）』（金武 2007）を参考にすると、これらは器形によって「軒付甕形」と「外反甕形」の 2 種に分けられる（第 16 表）。軒付甕形蔵骨器は、「蓋にも身にも瓦屋根の軒が付くタイプで、身には蓮花、獅子などの貼付文が全面に見られる」ものである。焼成された年代は、19 世紀末と考えられる。外反甕形蔵骨器は、頸部が立ち上がるタイプを簡略化したもので、「頸部が明瞭でなく、胴部から口縁へ外反する」ものである。主に、大正から昭和にかけて生産されたという。最も多く得られたものは、彩色された素焼きの蔵骨器で、全体の 44% を占める。これには、家形と壺形（骨壺）の 2 種があり、前者は 2 個体、後者は少なくとも 3 個体が得られている（第 17 表 G～K）。これらは、火葬の普及に伴って昭和 30 年代以降に焼成されたものである（上江洲 1980）。この他に、転用器として用いられたと思われる褐釉陶器片と土器片もそれぞれ小片が 1 点得られている。

第 16 表 宮里家古墓の蔵骨器

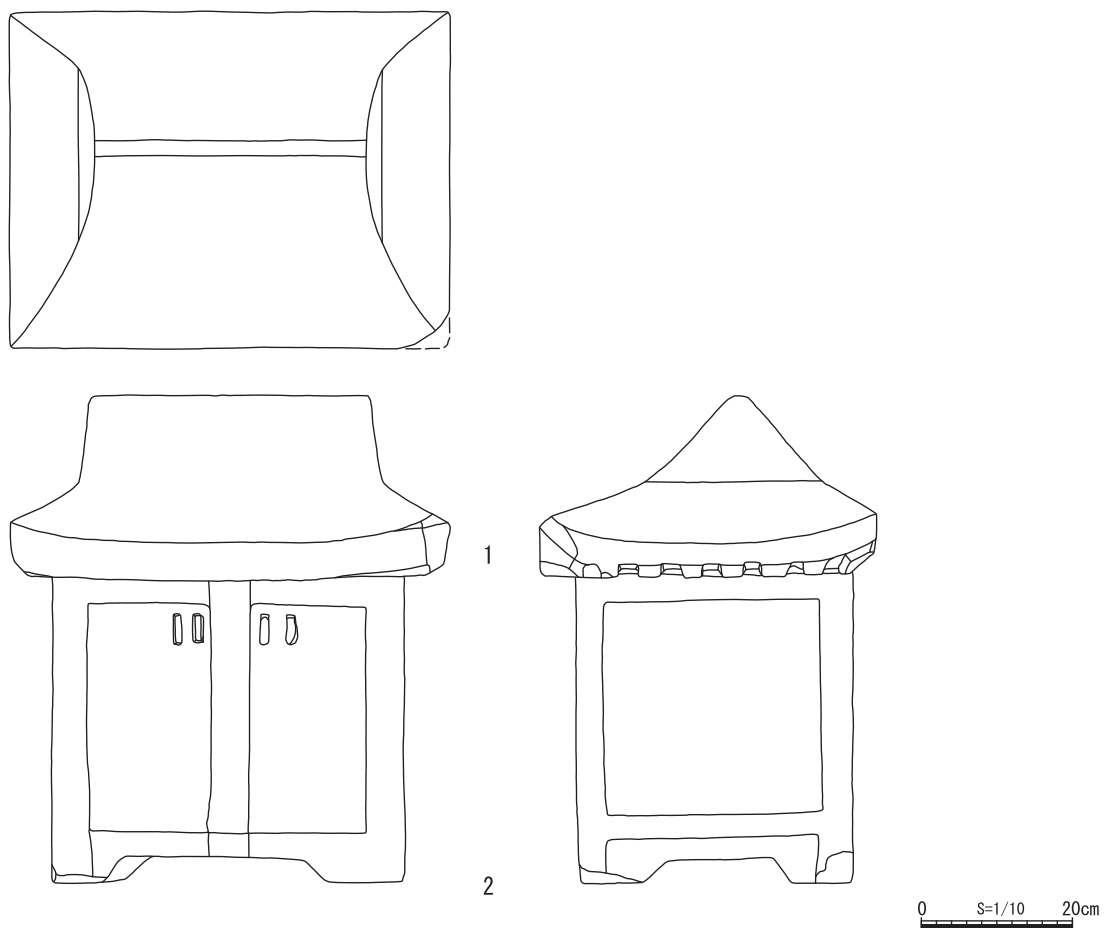
洗骨	専用器	家形	入母屋造り	石製(石厨子)
			寄棟造り	
		寄棟造り	赤焼	
	甕形	無頸	ボージャー	
		軒付	マンガン掛け	
		外反		
転用器	壺形	タイ産	褐釉陶器	
		八重山系	土器	
火葬	専用器	家形壺形 (筒状含む)	入母屋造り	素焼き(彩色)

蔵骨器の割合



第 17 図 宮里家古墓における蔵骨器の組成

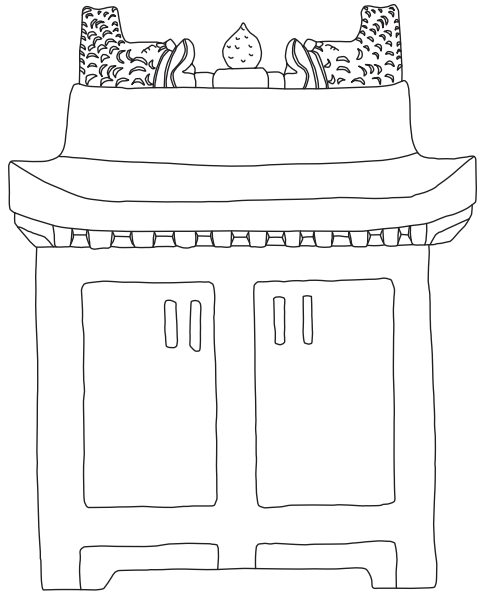
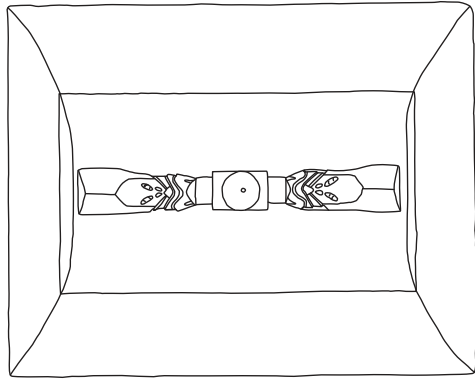




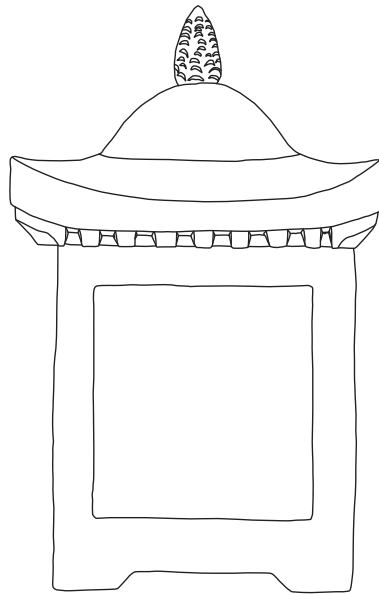
第 18 图 藏骨器 1



图版 12 藏骨器 1



3



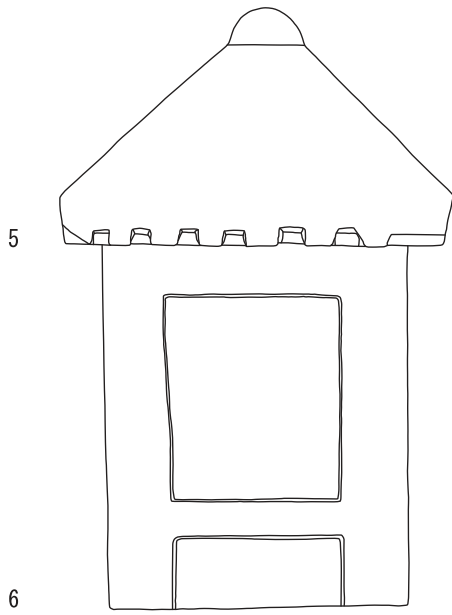
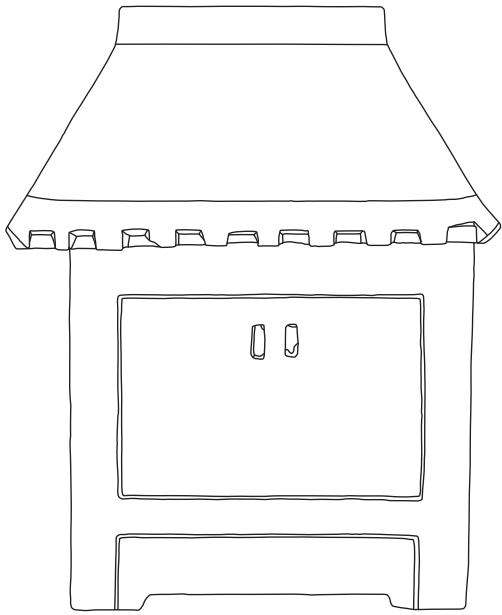
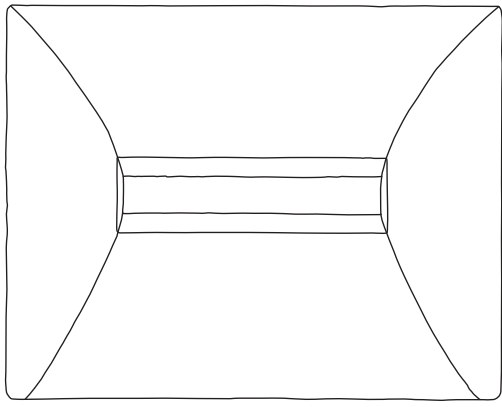
4

0 S=1/10 20cm

第 19 图 藏骨器 2



图版 13 藏骨器 2



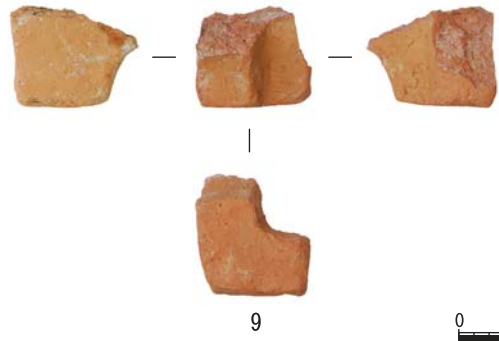
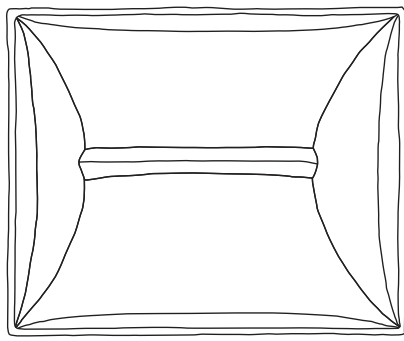
0 S=1/10 20cm

第 20 图 藏骨器 3

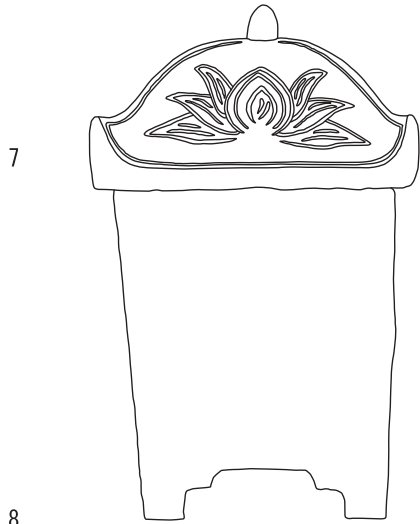
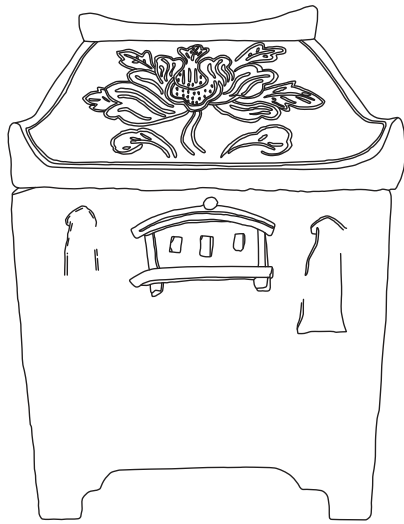


图版 14 藏骨器 3





0 s=1/5 10cm

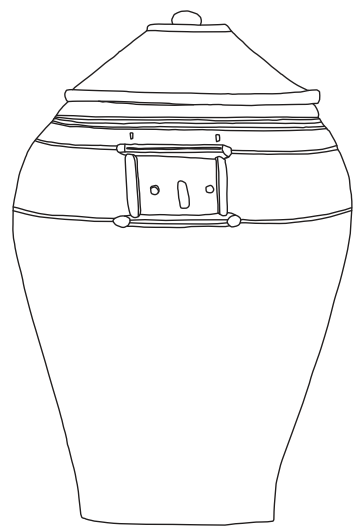
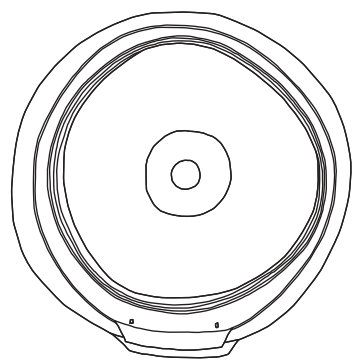


0 s=1/10 20cm

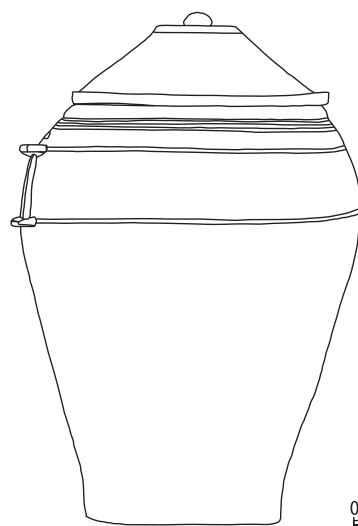
第 21 图 藏骨器 4



图版 15 藏骨器 4



10



11

0 S=1/10 20cm

第 22 图 藏骨器 5



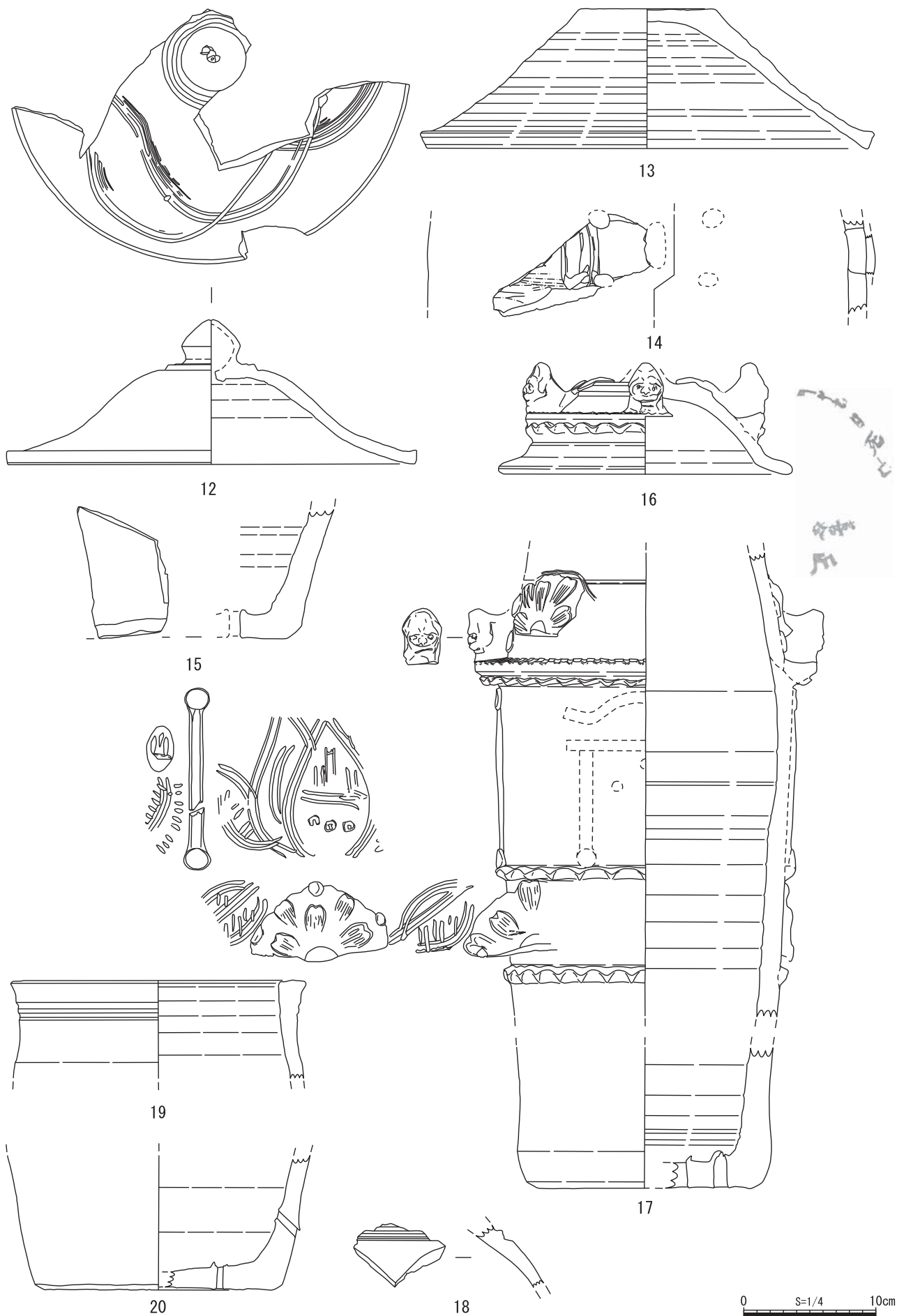
图版 16 藏骨器 5

第18表 蔵骨器観察表1

単位:cm

図番号		分類	器種	部位	法量	所見	出土場所		
第18図	図版12	1	家形	蓋	完形	平面:58.0×39.0 器高:29.5	石厨子の蓋。入母屋形を呈す。隅棟は撥ねる。側面の軒には垂木が彫られる。文様や装飾は見られない。	墓室内	棚(左)右
		2	家形	身	完形	口径:46.5×36.5 器高:41.0	石厨子の身。方形で4脚付き。柱や床を彫り出し、方形の孔を4個穿つ。	墓室内	棚(左)右
第19図	図版13	3	家形	蓋	完形	平面:62.0×49.0 器高:32.0	石厨子の蓋。入母屋形を呈す。大棟には、宝珠を挟んでシヤチホコが飾られる。隅棟は撥ねる。軒には垂木が彫られる。	墓室内	棚(奥)左
		4	家形	身	完形	口径:52.0×39.5 器高:45.5	石厨子の身。方形で4脚付き。柱や床を彫り出し、方形の孔を4個穿つ。	墓室内	棚(奥)左
第20図	図版14	5	家形	蓋	完形	平面:65.5×51.5 器高:31.5	石厨子の蓋。寄棟形を呈す。隅棟は直状に下がる。軒には垂木が彫られる。文様や装飾は見られない。	墓室内	棚(奥)右
		6	家形	身	完形	口径:53.0×40.0 器高:48.0	石厨子の身。方形で4脚付き。柱や床を彫り出し、方形の孔を2個穿つ。	墓室内	棚(奥)右
第21図	図版15	7	家形	蓋	完形	平面:52.0×43.0 器高:24.5	赤焼蔵骨器の蓋。寄棟形を呈す。隅棟は撥ねる。蓮を含む草花の線刻文を施す。	墓室内	棚(左)左
		8	家形	身	完形	口径:50.0×37.0 器高:43.5	赤焼蔵骨器の身。方形で、段を有する4脚付き。正面には、方形の孔を3個穿った窓が貼付される。窓の両側には法師像が並ぶ。	墓室内	棚(左)左
		9	家形	身	脚部	—	正面に向かって左奥の脚部。外面は、ナデによって比較的丁寧に調整されるが、内面調整は粗い。また、胎土は粗く、0.3cm以下の砂利や赤色粒子、粗穀を多く含む。	墓室内	棚左直上
第22図	図版16	10	ボージャー	蓋	完形	端径:45.0 撮径:4.0 器高:12.0	撮みは、いわゆる饅頭形。蓋段を造る。底は、直状で端部でやや開く。	墓室内	棚(右)右
		11	ボージャー	甕	完形	口径:33.0 胴径:45.0 底径:26.0 器高:55.0	肩が張るタイプで、中型のサイズに属す。正面に貼付される窓の底は直線状。肩部に2条の線刻文が廻る。	墓室内	棚(右)右
第23図	図版17	12	ボージャー	蓋	撮～底部	端径:30.8 撮径:4.7 器高:11.0	撮みは宝珠形で、その内部は空洞となる。撮みの周囲には段が造り出される。底には櫛描きによる波状文が廻る。底端部の径は平均的な大きさだが、器高は比較的低いため、器形はやや扁平状となる。内外は、回転ナデによって器面調整される。ロクロは時計回り。	墓室外	MN 表採、 墓庭 I a～II a層
		13	ボージャー	蓋	底部	上面径:10.0 端径:33.5 器高:10.7	撮みは貼付されず、蓋段も造られない。内外面は、回転ナデによって丁寧に調整されるが、成形時の接地面である上面は調整されない。ロクロは時計回り。	墓室外	ボージ石列内 表採
		14	ボージャー	甕	胴部	胴径:33.0	窓枠部片。内外の器面調整後に貼付された窓枠に沿って、径約1.5cmの孔が上下に穿たれ、枠内中央にも穿孔される。中型サイズのタイプか。	墓室内	シルヒラシ前 表採
		15	ボージャー	甕	底部	—	底面が穿孔される。内面は回転ナデ、外面はヘラ状工具によって調整される。ロクロは反時計回り。	墓室外	ボージ石列内 表採
		16	マンガン掛け	蓋	撮～底部	端径:21.4	陶製軒付甕形蔵骨器の蓋。17に付属する。瓦屋根の軒を模った突帯が廻る。降軒に獅子の装飾が貼付される。軒状の突帯直下には、波状の貼付文が廻る。撮みは欠損する。「…口(月?)十七日死亡/喜口…」の銘書あり。	墓室外	MN 表採、 ボージ石列内表採・I a層、 不明
		17	マンガン掛け	甕	肩～底部	胴径:22.8 底径:15.9	陶製軒付甕形蔵骨器。降軒に獅子の装飾が貼付される。軒状の突帯直下には、波状の貼付文が廻る。波状貼付文は、以下に3条確認でき、それぞれが文様帯を区画する。軒状突帯下の文様帯には、蓮花の線影文や文様帯を縦位に区画する貼付文が配される。この下の文様帯には、木の葉状の線影文や蓮花の貼付文が交互に配される。器形は寸胴で、底部からほぼ筒状に立ち上がり、肩部の張りは弱い。内面は、粘土が柔らかいうちにヘラ状工具によって調整される(ヘラナデか)。	墓室外	墓庭 I a～I b層、 MN 表採・I a層、 ボージ石列内 表採、 グリッド不明 表採、不明
		18	マンガン掛け	蓋	撮付近	—	撮み周辺に廻る段を1段確認することができる小片。色調や素地などから22に付属する可能性がある。	墓室外	庭積み I a層
		19	マンガン掛け	甕	口縁部	口径:22.0	陶製外反甕形蔵骨器。22に類似し、肩の張りは微弱になると思われる。頸部は不明瞭。	墓室外	墓庭 I a～I b層 ボージ石列内 表採
		20	マンガン掛け	甕	底部	底径:17.2	19の底部と思われる。孔形は長方形で、底部側面にも穿たれる。	墓室外	ボージグリッド不明 表採
		第24図	図版18	21	マンガン掛け	甕	口縁部	—	陶製外反甕形蔵骨器。色調や素地などから、23・24と同一個体の可能性あり。
22	マンガン掛け			甕	口縁～胴部	口径:28.5	陶製外反甕形蔵骨器。胴部の張りは弱く、ナデ肩を呈す。そのため、頸部は不明瞭。肩部の線影文は、蓮弁と思われる。胴下半には蓮花の線影文が配される。	墓室外	墓庭 I a～I b層、MN 表採
23	マンガン掛け			甕	胴部	—	陶製外反甕形で、窓枠を貼付しないものと思われる。櫛描きによる波状と圏線を交互に施す。胴部は若干張り、胴下部で角度を変えて底部に至る。	墓室外	ボージ石列内 表採
24	マンガン掛け			甕	底部	底径:11.2	小型の底部。23と同一個体と思われる。孔形は円形で、底部側面にも穿たれる。角度も持って立ち上がる。	墓室外	MN 表採 ボージ石列内 表採
25	マンガン掛け			甕	脚部	—	陶製外反甕形蔵骨器、もしくは陶製有頸甕形蔵骨器の脚部と思われる。調整は粗い。	墓室外	庭積み I a層
26	タイ産褐釉陶器			壺	肩部	—	壺の肩部片。被熱のため、釉調は不鮮明。内面は露胎する。蔵骨器へ転用された可能性が考えられる。	墓室外	墓庭 I a～I b層

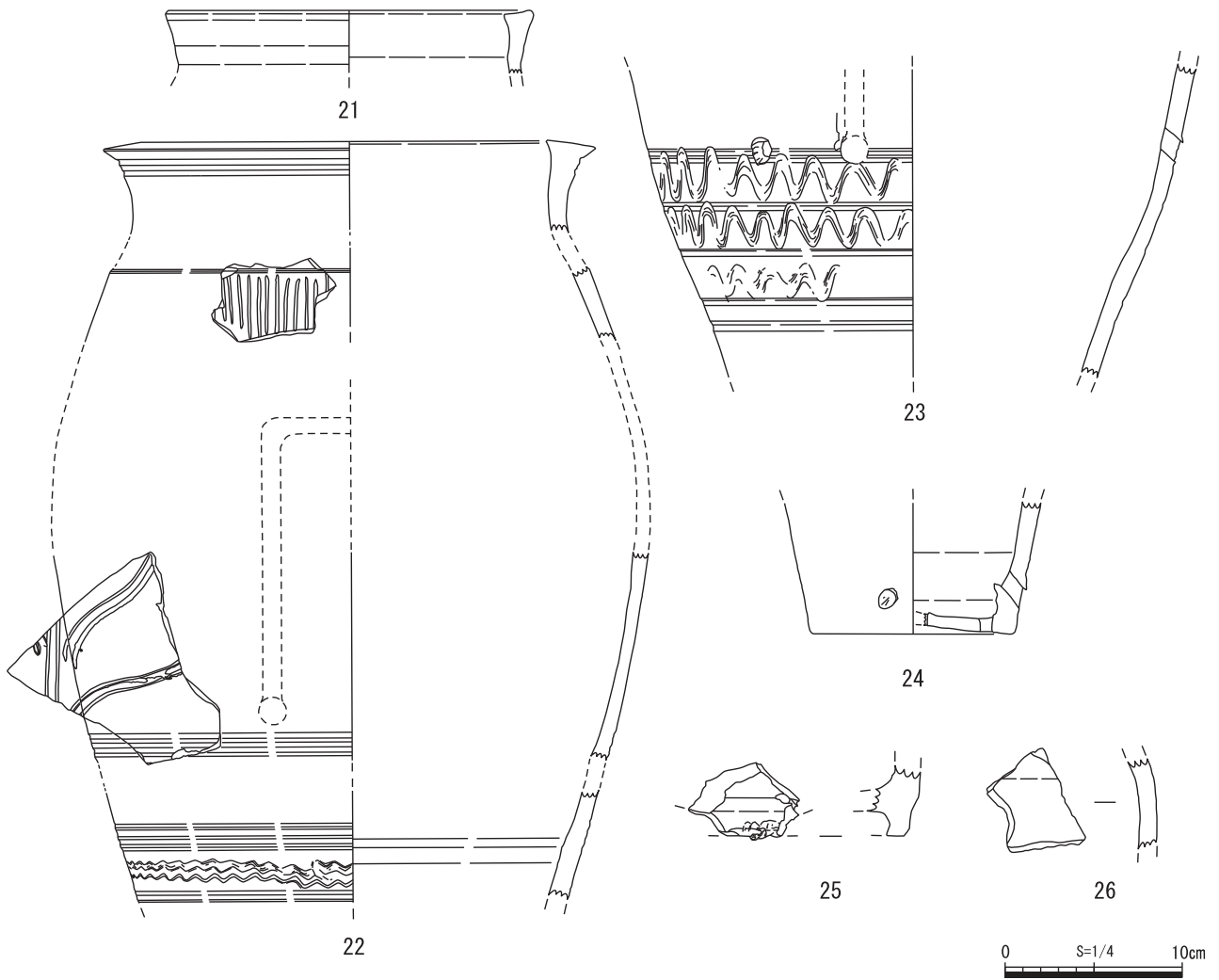
※「胴径」は、最大胴径を表す。



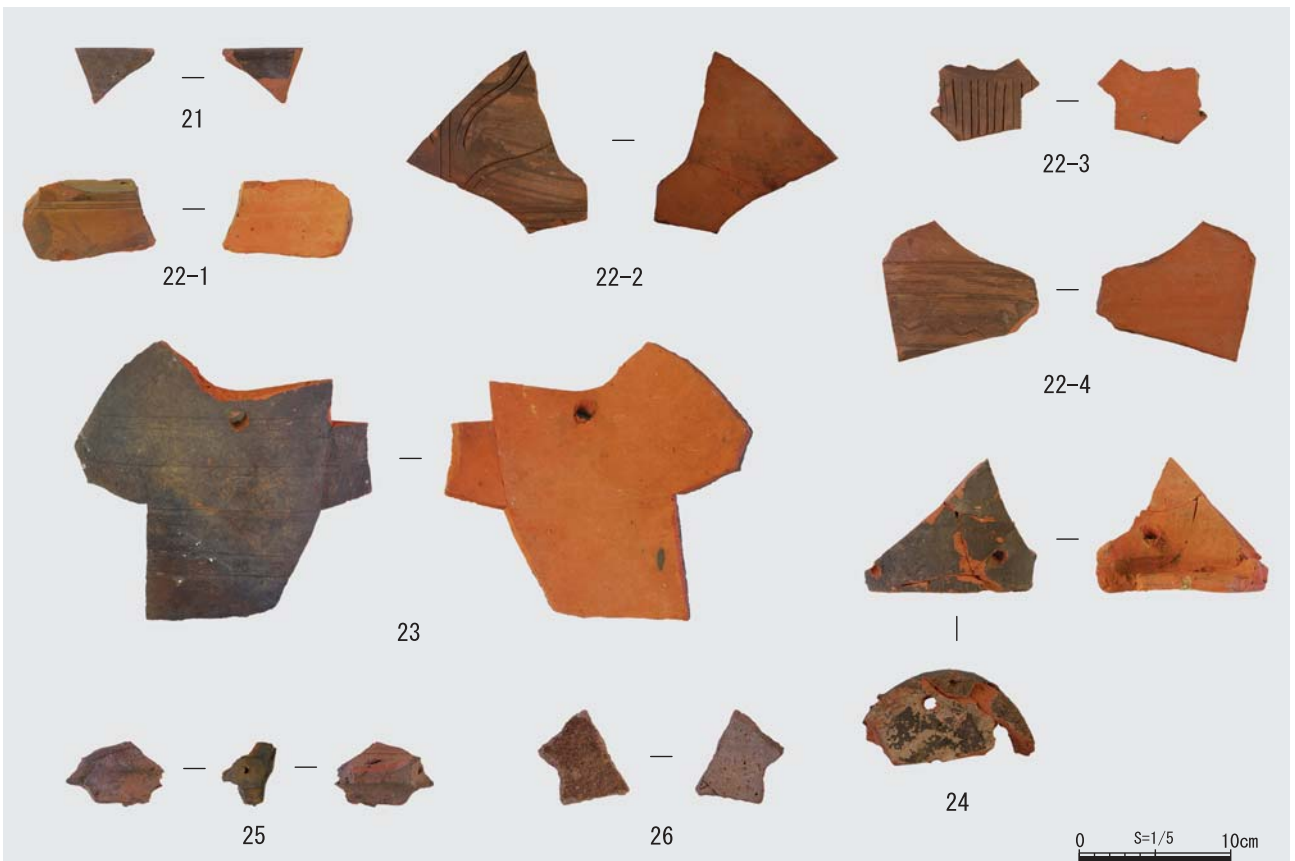
第 23 图 藏骨器 6 (破片)



图版 17 藏骨器 6



第 24 图 藏骨器 7

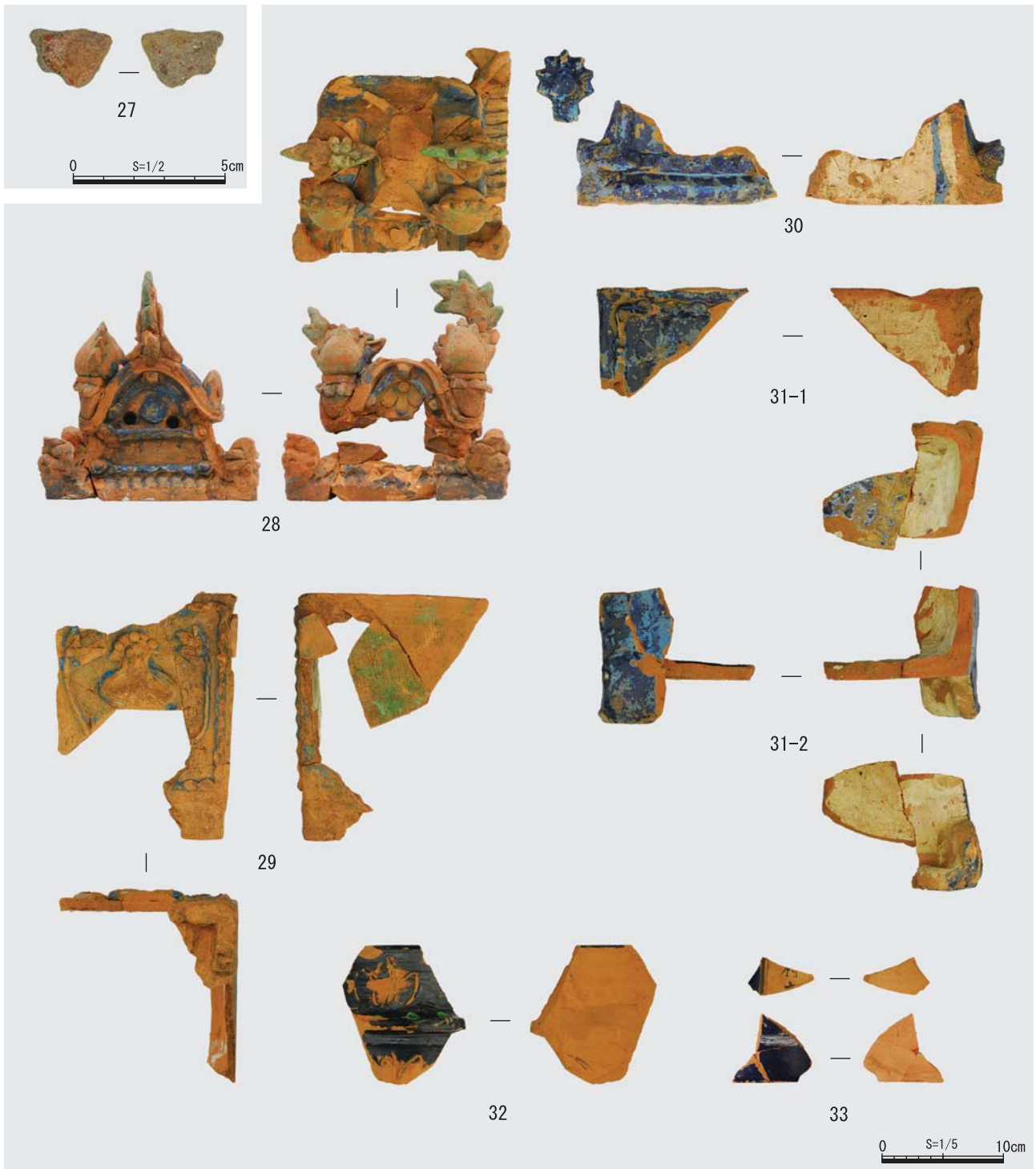


图版 18 藏骨器 7

第 19 表 蔵骨器観察表 2

単位: cm

図番号	器種	部位	法量	所見	出土場所			
図版 19	27	八重山系 土器	壺	胴部	—	2×3cmの小片。径0.3cmまでの大粒の赤色粒子や微細な石灰質砂粒を多く含む。宮古式土器か。蔵骨器へ転用された可能性が考えられる。	墓室外	ボーシ石列内Ⅱb層
	28	家形	蓋	撮～底部	器高:19.7 幅 :17.0 奥行:17.0	重層屋根を呈す蓋。焼成後に彩色される。棟の両端に鯨を置く上屋根の底には、宝珠と円盤状の飾りを貼付し、下屋根の底には獅子の面などを貼付する。戦後の火葬用蔵骨器。	墓室外	墓庭Ⅰa・Ⅱa～Ⅱb層、 M・N 表採・Ⅰa層、 ボーシ石列内 表採・Ⅰa層、 Ⅰa～Ⅰb層、 ボーシ石列内 Ⅱc層
	29	家形	身	口～底部	器高:20.1	28に対応する身。4脚。側面に蓮花と法師像を貼付する。内面には漆喰が塗布される。	墓室外	M・N 表採、 ボーシ石列内 表採
	30	家形	蓋	底部	—	大部分が欠損するため、形状や大きさは不明。焼成後に彩色されるが、身の内面にはコバルト釉が垂れる。戦後の火葬用蔵骨器。	墓室外	M・N 表採
	31	家形	身	口～底部	—	—	墓室外	ボーシ石列内 表採
	32	壺	身	口～胴部	口径:11.0	焼成後に彩色された、素焼きの骨壺。口縁直状、口唇平坦。頸部に突帯を貼付し、これを境に胴部が張る。外面に蓮花を彫る。戦後の火葬用蔵骨器。	墓室外	M・N 表採
	33	壺	身	胴・底部	底径:16.0	焼成後に彩色された、素焼きの骨壺。器形は円筒状か。正面に窓枠を作り、その中に銘書を入れる。戦後の火葬用蔵骨器。	墓室外	M・N 表採



図版 19 蔵骨器 8



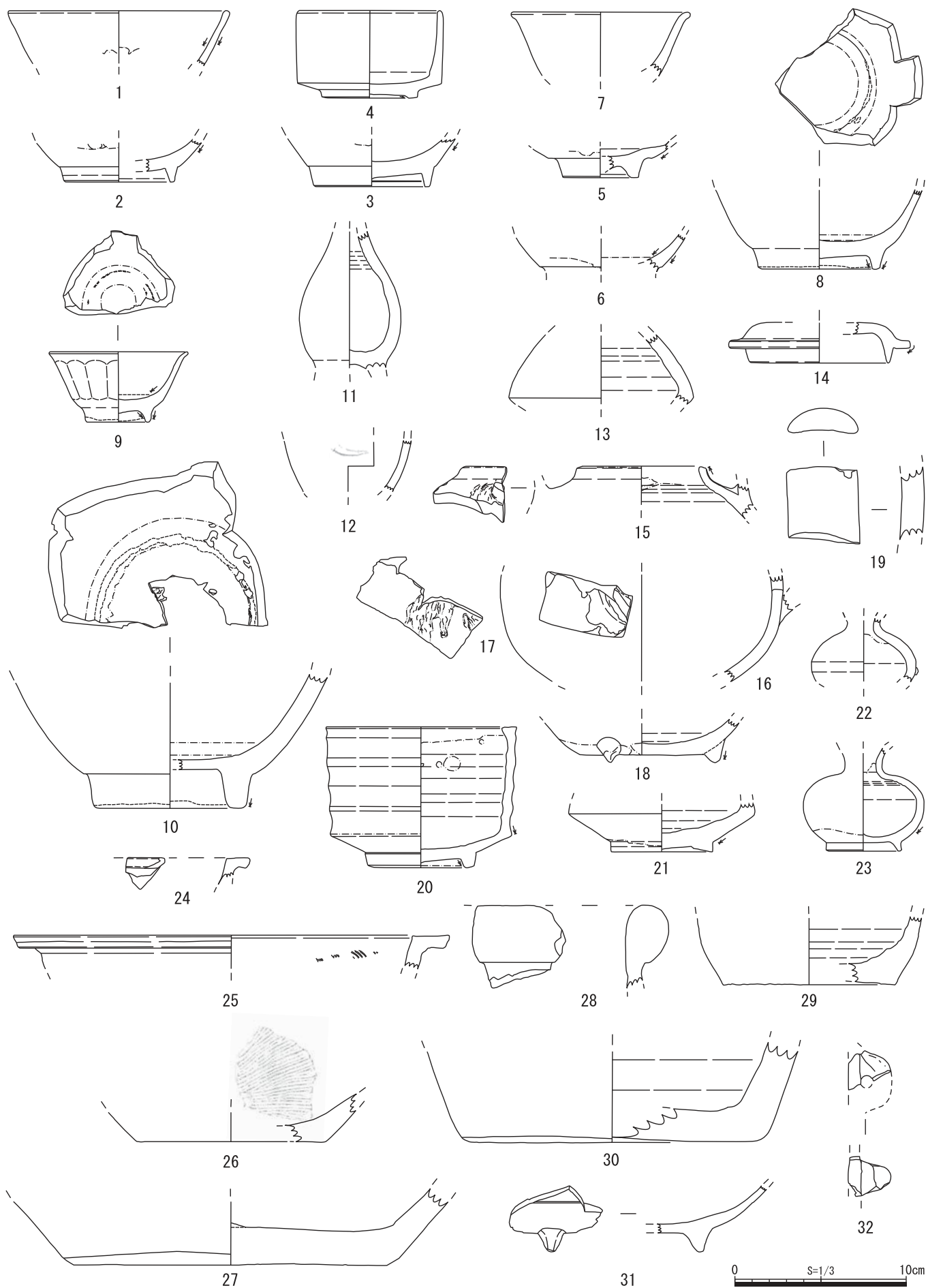


第22表 沖縄産陶器観察表

単位: cm

図番号	種葉	器種	部位	法量	所見	出土場所				
第25図	図版20	1	単掛け	灰釉	碗	口縁	口径:12.7	口縁直状に開く。貫入あり。熱を受ける。	墓室外	墓庭 I a層、I c層
		2	単掛け	灰釉	碗	底部	底径:6.2	高台断面三角状。高台際は段を造る。立ち上がりは緩やか、内外面の大半を露胎する。ロクロの回転は、時計回り。	墓室外	墓庭 南北I b層
		3	単掛け	灰釉	碗	底部	底径:6.6	造りは、2に近似する。	墓室外	墓庭 I a～II c層
		4	単掛け	灰釉	碗	口縁～底部	口径:8.0 底径:5.0 器高:5.1	器形円筒状。口縁は直状に立ち上がる。口唇舌状。高台内削りは浅い。内外を施釉し、畳付けを水平に削って釉剥ぎする。	墓室内外	墓庭 I a～I b層 墓口 I a～II a層 ボーシ石列内 I a層
		5	単掛け	灰釉	碗	底部	底径:4.2	高台は小振りで、断面方形状。高台内は円錐状。底部内面に段を造る。貫入あり。	墓室外	墓庭 I a～I b層
		6	単掛け	鉄釉	碗	底部付近	—	腰部片。高台際は段を造る。外面の釉は、体部下位まで施される。	墓室外	墓庭 I c層
		7	単掛け	白化粧	碗	口縁	口径:10.3	口縁外反し、口唇舌状を呈す。貫入あり。	墓室外	ボーシ石列内 I a～I b層
		8	単掛け	白化粧	碗	底部	底径:6.6	高台断面方形状。角度を持って立ち上がる。高台内は、円錐状に若干盛り上がる。内外を施釉し、見込みを蛇の目状に釉剥ぎする。貫入あり。	墓室外	墓庭 I a層
		9	単掛け	白化粧	小碗	口縁～底部	口径:8.0 底径:3.6 器高:4.1	口縁外反、口唇舌状を呈す。外面面取り。高台断面三角状。内外を施釉し、見込みを蛇の目状に釉剥ぎ。貫入あり。	墓室外	ボーシ石列内 II c層
		10	掛け分け	褐釉+白化粧	鉢	底部	底径:8.0	ワンブー。高台断面方形状。高台内削りは深い。内外を施釉し、畳み付けと見込みを釉剥ぎする。見込みの釉剥ぎは蛇の目状。	墓室外	ボーシ石列内 表採
		11	単掛け	鉄釉	瓶子	頸部～底部付近	胴径:5.9	ピンシー。高台欠損。底部破損状況から高台は袴状を呈すと思われる。	墓室外	庭積み II b層直上
		12	単掛け	白化粧(色絵)	瓶子	底部付近	—	ピンシー。袴状高台直上。絵付けは巴文と思われる。貫入あり。	墓室外	墓庭 I a層
		13	単掛け	褐釉	酒器	胴部	胴径:10.7	カラカラー。胴が“く”の字状に張る。内面無釉でロクロ痕が顕著に残る。ロクロは時計回りか。	墓室外	ボーシ石列内 表採
		14	単掛け	褐釉	急須の蓋	底部	端径:7.9 底径:10.6	底を鏝状に造り出すもの。底下面には、滑り止めとの間に溝が1条廻る。端部(滑り止め)は断面舌状を呈し直状に垂下する。頂部は平坦。	墓室外	墓庭 I c層
		15	掛け分け	黒釉+海鼠釉	急須	口縁	口径:9.4	口縁やや内傾して立ち上がる。口唇やや斜位に削り、磨く。口縁内面は、ロクロ成形後に削る。断面かまぼこ状の把手を貼付。藍色を基調として二重掛けされた失透釉が流紋を呈す。	墓室外	ボーシ石列内 II b層
		16	掛け分け		急須	注口	—		墓室外	墓庭 I a～II a層
		17	掛け分け		急須	胴部	胴径:16.5		墓室外	墓庭 I a～I b・II a層
		18	単掛け	褐釉	急須	底部	底径:8.5	底面平坦。丸味を持って立ち上がる。外底面の稜線に沿って、円錐状の脚を三箇所貼付する。ロクロは時計回りか。	墓室外	M・N I a層
		19	単掛け	黒釉	按瓶	把手	幅 :4.1 厚さ :0.8	断面かまぼこ状。やや内湾。	墓室外	墓庭 I a層
		20	単掛け	褐釉	火入れ	口縁～底部	口径:11.0 底径:5.4 器高:8.2	ヒツイ(火取り)。器形は円筒状。口縁内側に肥厚。口唇平坦。器壁は、内外面に丸彫りの横線(あるいは回転ナデ)を施す。高台断面方形状で、畳付けを斜位に削る。ロクロは、反時計回り。	墓室外	墓庭 I a～I b・II a層 三味台 II b層
		21	単掛け	褐釉	火入れ	底部	底径:6.0	ヒツイ(火取り)。基筒底状。器形は円筒状と思われるが、胴部から口縁部はやや内傾する。	墓室外	墓庭 II b層
		22	単掛け	褐釉	瓶か油壺	頸部～胴部	頸径:1.9 胴径:6.1	外面下半には回転ケズリによる調整痕が残る。器形は23に似るが、器壁は厚く、ややぼつりとする。	墓室外	墓庭 I a層
		23	単掛け	褐釉	瓶か油壺	頸部～底部	頸径:2.2 胴径:7.0 底径:4.0	胴部は丸味を帯びて、頸部は直状に立ち上がる。高台断面三角状で、“ハ”の字状に開く。肩部内面には、回転ケズリによる調整痕が顕著に残る。	墓室外	墓庭 I a～II a層 三味台 II b層
第25図	図版20	24	無釉	播鉢	口縁	—	鏝状に屈曲する口縁部片。口径不明。鏝幅は、25に比べて狭い。内面に播目は確認できず。	墓室外	ボーシ石列内 I b～II b層	
		25	無釉	播鉢	口縁	口径:25.4	鏝状に屈曲する口縁部片。鏝上面には、圏線が1条廻る。内面は、左上がりの播り目を施す。	墓室外	墓庭 I a～II c層	
		26	無釉	播鉢	底部	底径:11.0	内面は播目が充填する。外面面・外底面はナデによって調整。	墓室外	墓庭 I a～II c層	
		27	無釉	鉢	底部	底径:18.3	接地面が明瞭な底部片。立ち上がり部は、約1.0cm幅でルーズに面取りされる。ロクロは反時計回り。内面は、ロクロ調整後にナデ調整。破損部を中心に、サンゴ礫混じりのモルタルが付着する。	墓室外	M・N 表採	
		28	無釉	壺	口縁	—	外面丸味を帯びて肥厚する口縁部片。口径不明。マンガン釉を施す。肥厚部外面は丁寧な回転ナデによって調整。	墓室外	M・N 表採	
		29	無釉	壺	底部	底径:10.0	接地面明瞭。角度をもって立ち上がる。外面マンガン釉を施す。内面は、調整痕が顕著に残る。	墓室外	墓庭 I a層	
		30	無釉	壺か甕	底部	底径:16.4	やや椎に造られる底部片。角度をもって立ち上がる。外面は、マンガン釉を施す。内面は、ロクロ調整後にナデ調整。	墓室外	MN 表採 ボーシ石列内 I a～I b層	
		31	無釉	急須	底部	—	底面に円錐状の脚を貼付する。立ち上がりは緩やか。内面にはマンガン釉が掛かる。	墓室外	墓庭 I a層	
		32	無釉	火炉	把手	—	上面から下面に向けて、径約0.7cmの小孔を穿つ。全面にマンガン釉が掛かる。	墓室外	墓庭 不明	

※「胴径」は、最大胴径を表す。



第 25 図 沖縄産施釉陶器・無釉陶器



図版 20 沖縄産施釉陶器・無釉陶器

### 3) アカムヌー

アカムヌーとは、壺屋焼の中でも小型の登り窯で焼かれた雑器を指す（曾根 1983）。鍋や急須、火炉のように火にかける器種が多く、耐火性を高めるためにニービを混ぜるという（那覇市立壺屋焼博物館編 1998）。このような典型的なアカムヌーは、燈褐色もしくは黄褐色を帯びており、その胎土は精選され、ロクロによって薄く成形される特徴がある（金城 1993）。そして、焼成温度が低いため土師質になるものが多い。しかしその一方で、焼成温度が高く、陶器のように硬く焼き締まる「赤い焼物」も多い。一般的に、沖縄ではこれらを総じて「陶質土器」と呼称している。ただし、焼成の良いものは瓦質土器の範疇にも収まるが、両者を明確に区別する基準はない。しかし、いわゆる「瓦質土器」は、中世の指標となる資料であるため、「瓦質の土器」と区別されるべきである。そこで、本項ではアカムヌーを焼成によって、「陶質」と「瓦質」に大別した。つまり、焼成不良で前述したような特徴を有するものを「陶質のアカムヌー」とし、焼成良好で瓦質あるいは陶器のように硬く焼き締まる赤い焼き物を「瓦質のアカムヌー」とした。なお、前者は典型的なアカムヌーで、焼成不良のため土師質になるものであるが、便宜上「陶質」と表現した。

宮里家古墓では、50点余りのアカムヌーが得られている。概ね小片であるため器種不明の資料が多いものの、陶質のアカムヌーは、急須・鍋・火炉の破片が主である。中でも急須と鍋の出土量が多いが、これらは同一個体の可能性が考えられる。瓦質の土器は全てアカムヌーの範疇に収まると判断した。よって、当古墓では瓦質土器は出土していない。瓦質のアカムヌーは、陶質のアカムヌーと同量得られているが、組成は異なり鉢が主体を占める。次いで香炉が多いが、これらは同一個体である。

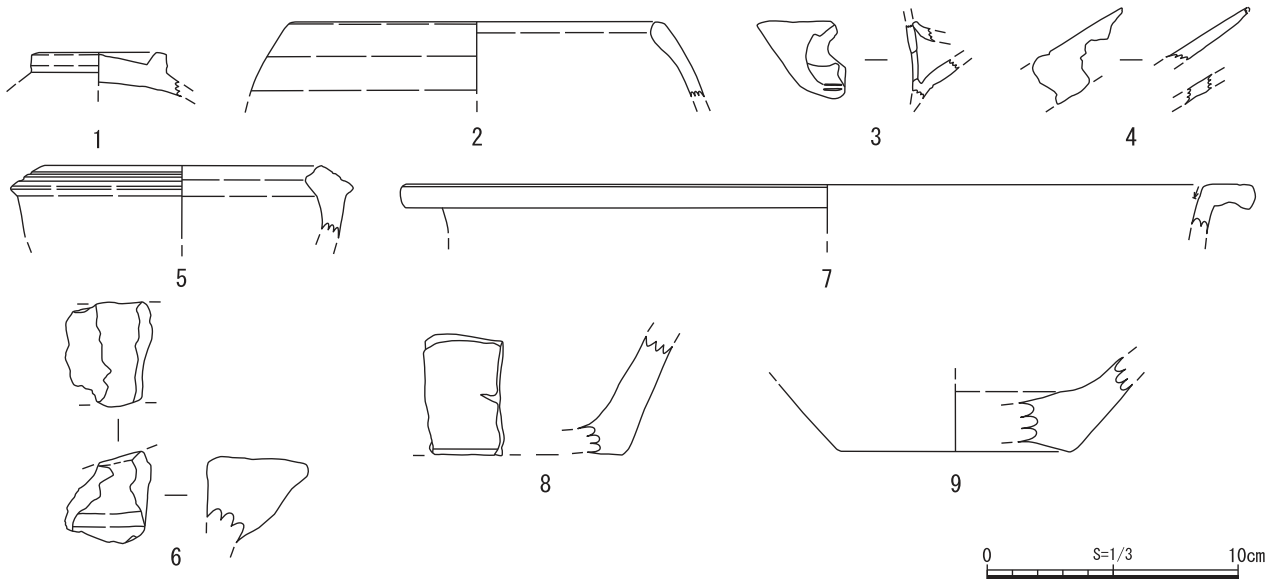
第 23 表 アカムヌー集計表

出土地	出土遺物	陶質									瓦質										合計									
		火炉		鍋		鍋蓋		急須		水鉢		鍋か急須		不明		香炉		火炉		火入		揺鉢		鉢		壺か瓶		不明		
		胴部	口縁部	胴部	胴部	注口	注口か把手	口縁部	底部	胴部	底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部		胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部
墓庭	I a		1	1			1			1																	2	6		
	I c																										1	1		
	II a					3	3																		1			7		
	I a~I b							1						1		1							1					4		
	I a~I c																						1				1	2		
	I a~II a																								1			1		
	I a~II c	1									1														2		1	5		
II a~II b																											1	27		
庭積み	I a														1													1		
南北トレンチ	II b																							1		1		2		
墓庭	I a~I b																												1	
南北トレンチ	II b				1																							1		
庭積み	I b																												1	
南北トレンチ	II b																							1				1		
ボージ石列内	II c			1						1																		2		
	I a~I b									2																		2		
	I b~II b	1																									1	5		
ボージ石列外	II b														1													1		
出土地不明	層位不明																									1		1		
墓庭	I a~I b																												1	
ボージ石列内	I a~I b																												1	
ボージ石列外	II b																												1	
墓室外	表探																												1	
墓室外	表探		1	1						1	2	1					2					1		1			1	11		
合計			2	3		3	4			7	1	1	2	2								1	4	3	2					
		2		5	1		7	1	1		8		5	2	1	1								10	1	6	51			

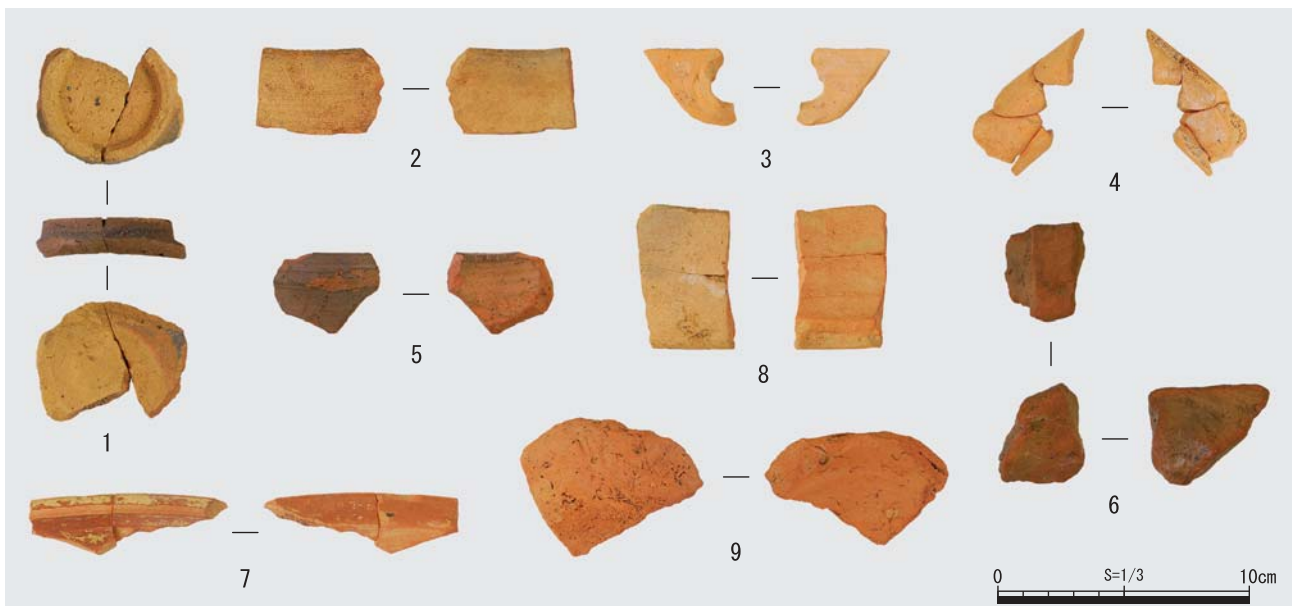
第24表 アカムヌー観察表

単位:cm

図番号	器種	部位	法量	焼成	所見	出土場所	
第26図 図版21	1	鍋蓋	撮部	撮径:5.4	陶質	撮み内は、円錐状に盛り上がる。成形は回転へら削りで、ロクロは反時計回り。胎土は粗く、白色砂粒やニーズと思われる黒色砂粒を多く含む。	墓室外 墓庭Ⅰa~Ⅰb層 墓庭南北トレⅡb層
	2	水鉢	口縁部	口径:14.6	陶質	口縁内傾し、内面は肥厚する。外面は、幅約0.5cmの単位でへら状工具による回転調整が残るが、内面はナデによって工具による調整痕は窺えない。胎土は比較的細かいが、ニーズと思われる黒色砂粒の他に、赤色粒子や雲母を多く含む。	墓室外 墓庭Ⅰa~Ⅰb層
	3	急須	注口部	—	陶質	器面に径約1.0cmの孔を穿ち、注口部を貼付する。焼成は不良で、胎土の粉末が指先に付着する典型的なアカムヌー。	墓室外 墓庭Ⅱa層
	4	急須	注口部	—	陶質	3と同一個体と思われる注口部片。器面に比較的近い部位にあたる。小片4点の接合資料であり、それぞれが磨耗するため、調整痕は窺えない。	墓室外 墓庭Ⅱa層
	5	火炉	口縁部	口径:11.0	瓦質	口縁は強く内傾し、口唇は平坦に成形される。頸部外面には粘土紐が貼付され、これによって口縁部が強調される。この外面には2条の圈線が廻る。内外面は丁寧にナデられる。胎土は比較的細かいが、径約0.3cmの砂利が残る。	墓室外 庭積みⅠa層
	6	火炉	口縁部	—	瓦質	馬蹄形火炉のものと思われる口縁部片。断面三角状を呈すが、調整が粗いため、若干いびつに成形される。胎土は比較的細かく、混入物は2に似る。	墓室外 墓庭Ⅱa~Ⅱb層
	7	鉢	口縁部	口径:33.5	瓦質	鈔縁口縁部片。端部は外面を肥厚させる。鈔上面に圈線を1条施す。器面は丁寧にナデられ、調整後に彩色される。胎土は比較的細かく、赤色・白色・黒色粒子(ニーズか)や雲母を含む。	墓室外 庭積みⅠb層 墓庭南北トレⅡb層
	8	鉢	底部	—	瓦質	立ち上がりは、比較的角をもつ。底面の器壁は薄い。器面はナデで調整されるが、内面は一部にへら状工具による調整痕が残る。胎土は比較的細かく、混入物は2に似る。	墓室外 墓庭Ⅰa~Ⅱc層
	9	鉢	底部	底径:9.2	瓦質	胴部に向かって開き気味に立ち上がる。内面は丁寧にナデられるが、外面は一部にへら状工具による調整痕が残る。胎土は粗い。	墓室外 墓庭Ⅰa~Ⅱc層



第26図 アカムヌー



図版21 アカムヌー

#### 4) 中国産陶磁器

白磁と染付けが少量得られている。白磁は、ほぼ完形の資料が1点のみ得られており、残りは全て染付けである。

#### 5) 煙管・簪

煙管と簪（ジーファー）は、それぞれ2点と1点が得られている。共に墓室内（棚）から得られているため、副葬品と考えられる。

第 25 表 中国産陶磁器集計表

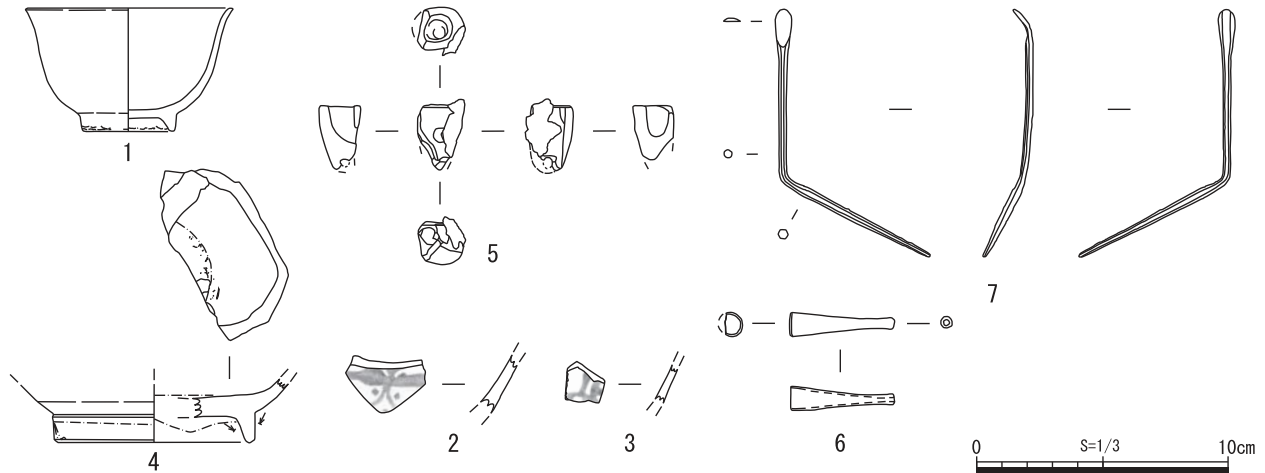
出土遺物			白磁		染付			合計
			碗	口～底	碗	胴部	底部	
墓下部	墓庭	Ia~Ib・IIa	1					1
	庭積み	IIa~IIc					1	1
墓上部	ボーシ	Ia		1				1
	石列内	Ia~Ib		1	1			2
		Ib~IIb			1			1
合計			1		3	1		6

第 26 表 中国産陶磁器観察表

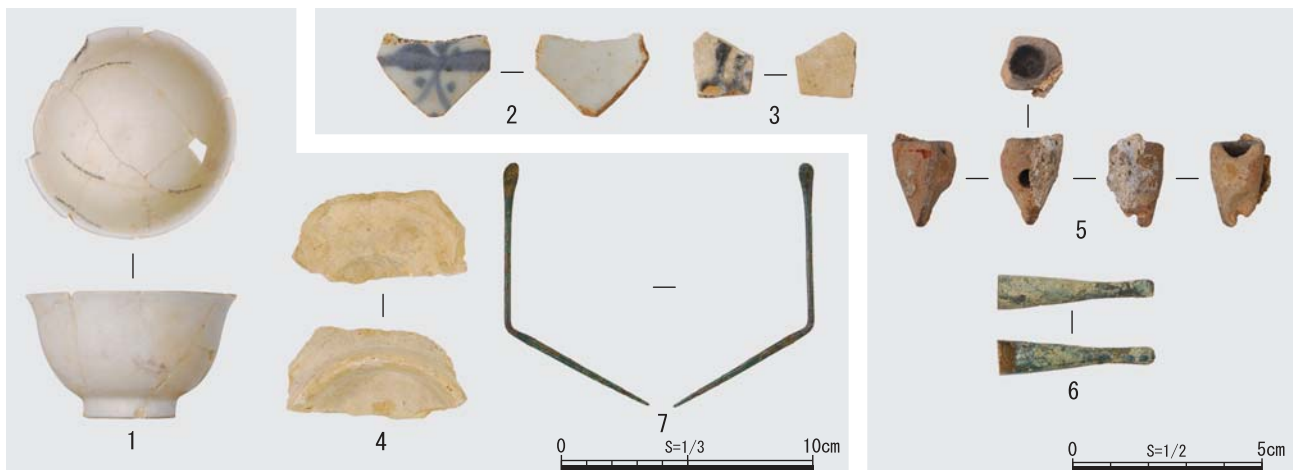
図番号		器種		部位	法量	所見	出土場所		
第 27 図	図版 22	1	白磁	碗	完形	口径 : 8.1 底径 : 3.5 器高 : 4.9	型造りの外反碗。口唇舌状を呈す。口禿。腰部は丸味を帯びて高台に至る。見込みは、やや円錐状に盛り上がる。高台断面は三角状で、高台内は“ハ”の字状に開く。豊付には砂粒が付着する。徳化窯産。	墓室外	墓庭 Ia~Ib・IIa層
		2	染付	碗	胴部	—	腰部の小片。釉は青白色。筆描きの文様を施す。草文か。窯不明。	墓室外	ボーシ石列内 Ia層
		3	染付	碗	胴部	—	釉は透明。一部露胎する。貫入あり。筆描きの文様を施す。広東窯か。	墓室外	ボーシ石列内 Ia~Ib層
		4	染付	碗	底部	底径 : 7.6	高台径が比較的大型の底部片。高台断面三角状を呈す。腰部から口縁に向かって直状に開く器形になると思われる。釉は白濁色で、見込みは釉剥きされる。また、高台も粗く釉剥きされる。貫入あり。福建・広東系。	墓室外	ボーシ石列内 Ia~Ib層

第 27 表 煙管・簪観察表

図番号		材質	部位	法量				所見	出土場所		
第 27 図	図版 22	5	土製	雁首	火皿外径 1.7	火皿内径 1.1	小口 0.7	重量 7.3	円錐状を呈し、下端は吊り下げ用の小孔を穿つ(破損)。造りは錐。宜野座村クジチ墓・名護市田井等遺跡でも、形状のよく似た石製の雁首出土(名城 1988、島福・松田 1988)。火皿にスス付着。漆喰付着。	墓室内	棚右(イケ)床面
		6	金属製	吸口	吸口外径 0.5	吸口内径 0.2	小口 0.9	重量 2.3	小口は一部破損する。また、何らかの材が残存。やや斜位に継ぎ目あり。青錆付着。	墓室内	棚左 IIa層
		7	青銅製	完形	全長 13.7	カブ 1.0×0.6	厚さ 0.2~0.3	重量 6.1	カブは耳掻き状を呈し、竿中央で屈曲する。断面の形状は屈曲部の上下で異なり、上部は円形状、下部は六角形を呈す。竿は、屈曲部直下から若干肥厚して六角錐の端部に至る。	墓室内	棚(左)



第 27 図 中国産・煙管・簪



図版 22 中国産・煙管・簪

6) 円盤状製品

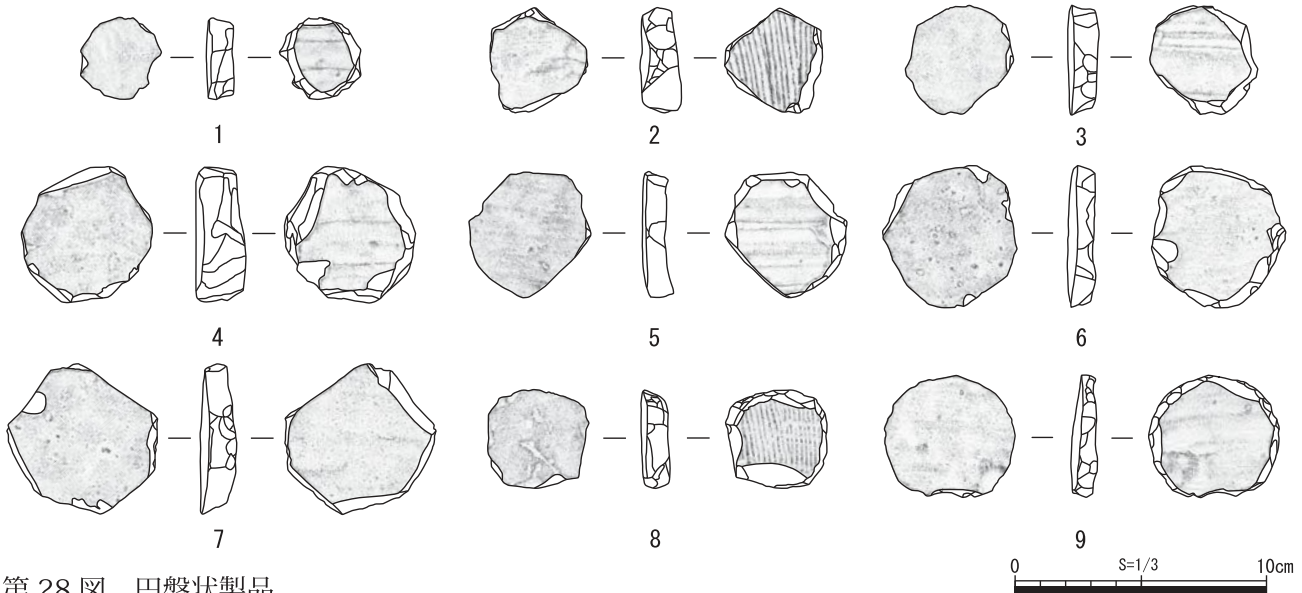
9点得られている。いずれも墓庭やボーシ周辺に散在しており、墓室内からは得られていない。ただし、墓庭の庭積み付近から得られた3点全てがⅡb層からの出土であるため、検討が必要である。沖縄産無釉陶器を転用したものが主体を占め、残りは瓦質のアカムヌーが転用される。大きさは様々で、上原静氏による分類を当てはめると、Ⅲ～Ⅵ類までに分けることができる（上原 1986）。ただし、年代は大きく変わらず、概ね近世～近代に収まるものと思われる。成形は、9を除いて雑である。

第 28 表 円盤状製品集計表

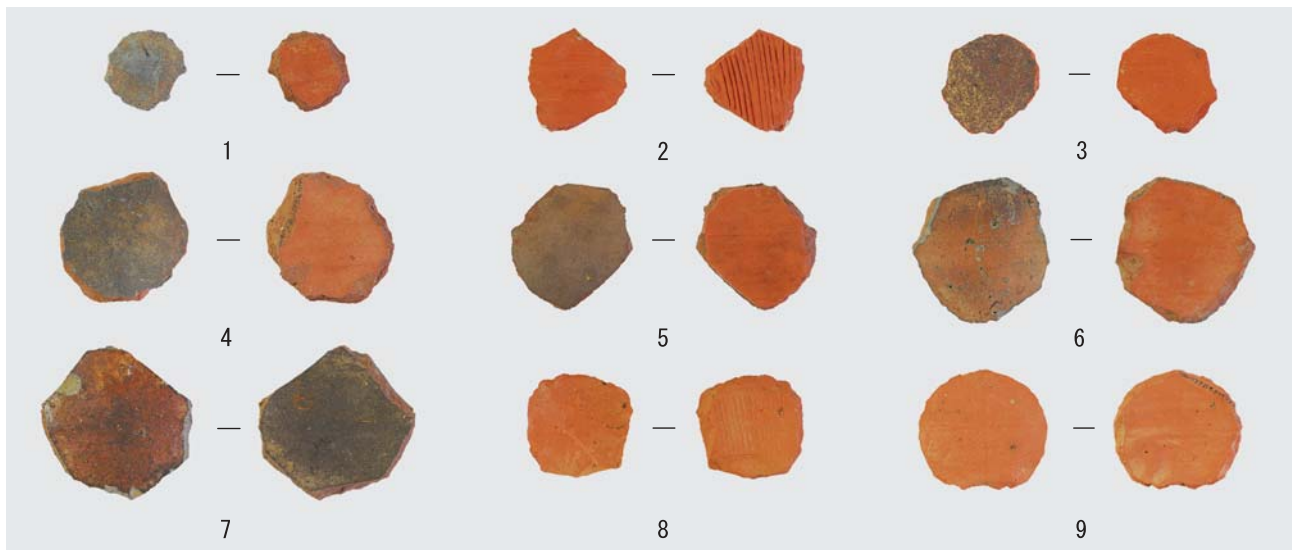
出土地		出土遺物		アカムヌー(瓦質)		合計
		沖縄産無釉陶器	その他	播鉢	その他	
墓庭	I a		2			
	I a~I b		1			3
庭積み	Ⅱb		2			
	Ⅱb~Ⅱc		1			3
ボーシ石列内	I a	1				1
ボーシ石列外	Ⅱc				1	1
墓室外	表採			1		1
合計		1	6	1	1	9

第 29 表 円盤状製品観察表

図番号	素材	法量				所見	出土場所	
		長径	短径	厚さ	重量			
第 28 図 版 23	1	沖縄産無釉陶器	3.3	3.2	1.1	15.2	袋物の破片を打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 庭積みⅡb層
	2	沖縄産無釉陶器	4.2	3.9	1.5	29.6	播鉢の破片を打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 ボーシ石列内 I a層
	3	沖縄産無釉陶器	4.4	4.3	1.2	25.4	袋物の破片を打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 庭積みⅡb層~Ⅱc層
	4	沖縄産無釉陶器	5.4	5.2	1.9	72.4	袋物の破片を打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 庭積みⅡb層
	5	沖縄産無釉陶器	5.0	4.8	1.0	31.3	袋物の破片を内面から打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 墓庭 I a層
	6	沖縄産無釉陶器	5.6	5.6	1.1	26.1	袋物の破片を内面から打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 墓庭 I a~I b層
	7	沖縄産無釉陶器	5.9	5.9	1.0	54.4	製品でない可能性もあるが、一部に成形痕が認められる。	墓室外 墓庭 I a層
	8	アカムヌー(瓦質)	4.1	3.9	1.1	19.2	播鉢の破片を内面から打ち欠いて成形。造りは雑。	墓室外 ボーシ石列外表採
	9	アカムヌー(瓦質)	5.2	4.9	0.9	37.9	袋物の破片を内面から丁寧に打割られて成形。	墓室外 ボーシ石列外Ⅱc層



第 28 図 円盤状製品



図版 23 円盤状製品

## 7) 無文銭

無文銭は、44点が得られている。この内、完形資料は32%にあたる14点である。近世墓では、銭貨が10枚以上出土した場合、その殆どが無文銭あるいは輪銭で構成されるという(宮城 2007)。当古墓でもその例に漏れず、有文銭は出土していない。出土した無文銭はいわゆる鳩目銭が大半を占める。

無文銭は、銭径によって第31表のように、4類に分類することができる(是光 1993、森田 2005)。この内、当古墓ではA類は出土していないが、宜野湾市嘉数テラガマ洞穴遺跡と同様に、銭径が0.9cm未満のもの(D類)が主体で、無文銭全体の59%を占める。そのため、銭径の平均は0.7cmであり、比較的小さい。また、D類はその61%が墓口周辺から出土している。これに対して、銭径が0.9cm以上の大型のもの(B・C類)は、墓口と庭積み付近からの出土に分かれる。特に、庭積み付近からは、量の多いD類の出土はみられない一方で、B・C類は、6点のうち2点が出土している。

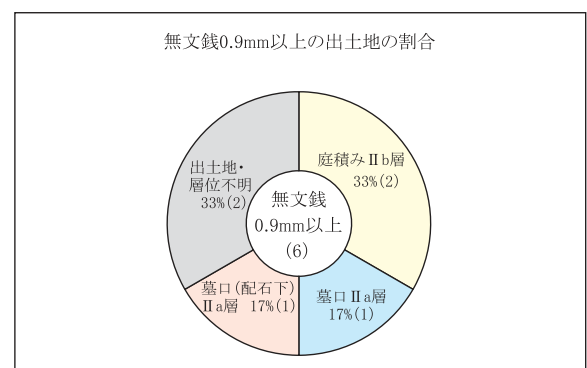
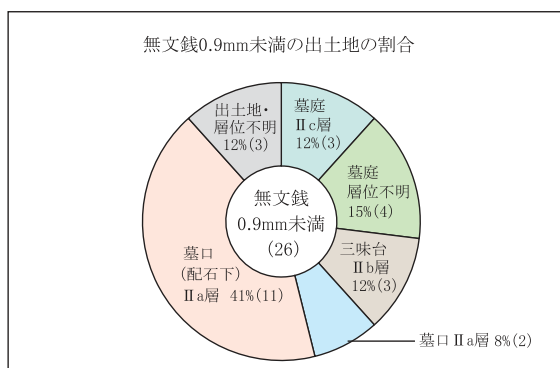
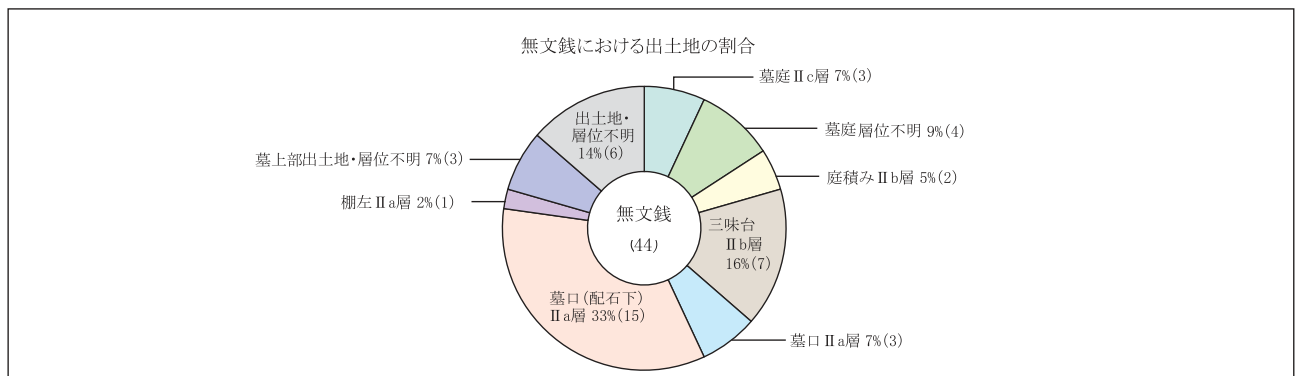
無文銭は墓庭で出土する例が多い傾向にあるが(宮城 2007)、当古墓から出土した無文銭は、墓口付近からの出土量が最も多く、全体の56%を占める。次いで墓庭からの出土量が多い。浦添市内間西原近世墓群では、古銭が出土した地点が墓敷(墓室+墓庭)のほぼ中央に位置する可能性があるため、地鎮祭に墓敷の中央・四隅を拜む儀礼との関連が考えられるという(玉木 2004)。当古墓においても、墓敷中央にあたる墓口付近を主体として、庭積み付近からも若干数出土しており、内間西原近世墓群の例に近似する。

第30表 無文銭集計表

出土地	出土遺物	1.5cm以上	0.9以上1.5cm未満	0.9cm未満		銭径不明	合計
		B類	C類	D類	—		
		完形	破片	完形	破片		
墓庭	II c			2	1		7
	層位不明			4			
庭積み	II b	1	1				2
墓口	II a		1	1	1		18
墓口(配石下)	II a		1	3	8	3	
三味台	II b			2	1	4	7
棚左	II a					1	1
出土地不明	層位不明		2	1	2	4	9
合計		1	5	13	13	12	44

第31表 無文銭の分類(森田 2005)

A	銭径が2.2cm以上2.4cm未満のもの。
B	銭径が1.5cm以上2.2cm未満のもの。
C	銭径が0.9cm以上1.5cm未満のもの。
D	銭径が0.9cm未満のもの。



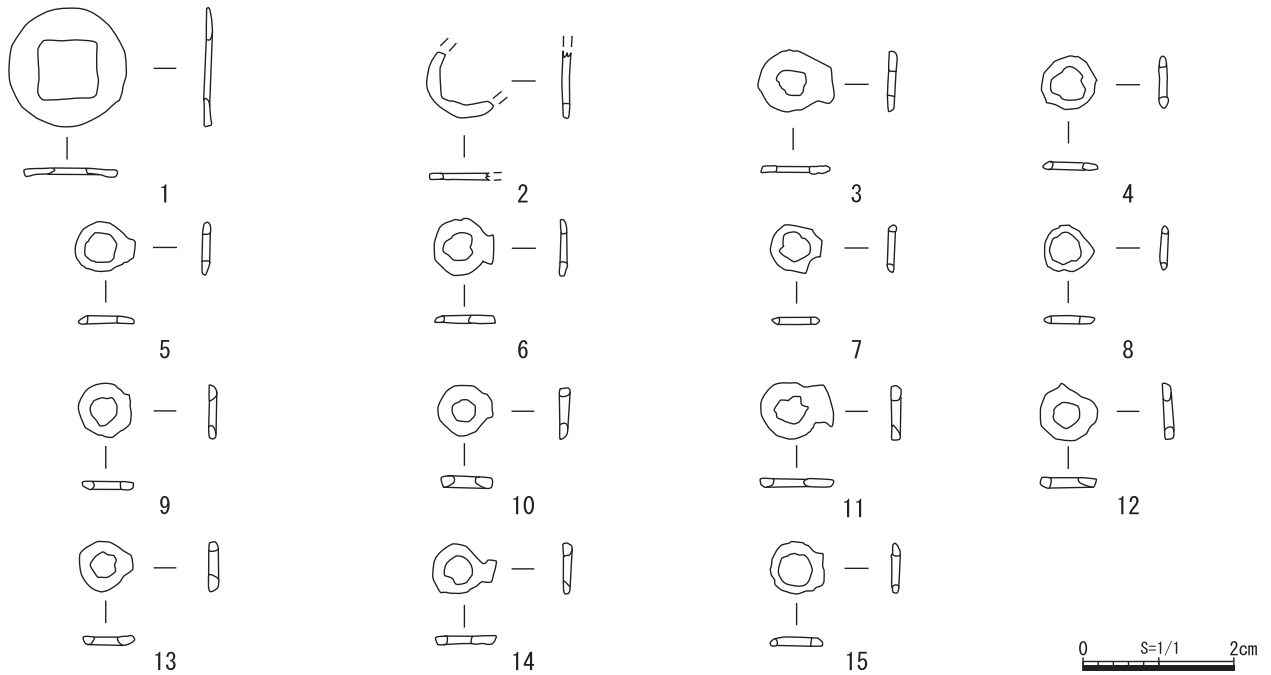
第29図 無文銭の出土割合



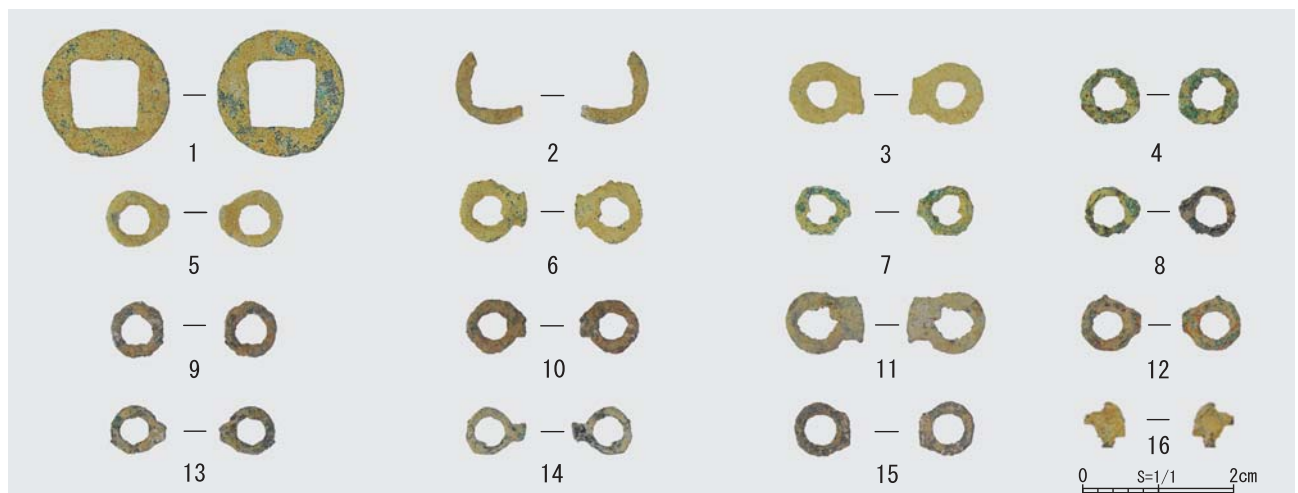
第 32 表 無文銭観察表

単位:cm/g

図番号	部位	法量				分類	所見	出土場所		
		銭径	孔径	銭厚	重量					
第 30 図 図版 24	1	完形	1.59	0.76	0.06	0.44	B	規格的に成形。郭穴は方形。バリは付かない。	墓室外	庭積みⅡb層
	2	破片	-	-	0.09	-	C	郭穴は方形。バリなし。	不明	出土地・層位不明
	3	完形	0.82	0.32	0.09	0.12	D	銭幅比較的広い。郭穴は円形状。バリあり。片面扁平。	墓室外	墓庭 層位不明
	4	完形	0.71	0.42	0.12	0.11	D	郭穴は円形状。郭穴周バリ僅かに残る(錆のため不明確)。	墓室外	墓庭 Ⅱc層
	5	完形	0.66	0.39	0.11	0.12	D	郭穴は円形状。バリあり。片面扁平(断面カマボコ状)。	墓室外	墓庭 Ⅱc層
	6	完形	0.75	0.38	0.12	0.11	D	郭穴は円形状。バリあり。片面扁平(断面カマボコ状)。	墓室外	墓庭 層位不明
	7	完形	0.61	0.38	0.11	0.08	D	郭穴は円形状。バリあり。	墓室外	墓庭 層位不明
	8	完形	0.59	0.41	0.09	0.06	D	郭穴は円形状。バリあり。	墓室外	墓庭 層位不明
	9	完形	0.69	0.35	0.09	0.09	D	郭穴は円形状。バリなし。	墓室外	三味台Ⅱb直上
	10	完形	0.65	0.29	0.11	0.12	D	郭穴は円形状。バリあり。	墓室外	三味台Ⅱb直上
	11	完形	0.75	0.44	0.12	0.16	D	郭穴は円形状。バリあり。片面扁平(断面カマボコ状)。	墓室内	墓口配石下Ⅱa層
	12	完形	0.75	0.34	0.12	0.14	D	郭穴は円形状。バリあり。	墓室内	墓口配石下Ⅱa層
	13	完形	0.72	0.31	0.12	0.11	D	郭穴は円形状。バリあり。	墓室内	墓口配石下Ⅱa層
	14	完形	0.65	0.36	0.11	0.10	D	郭穴は円形状。バリあり。	墓室内	墓口Ⅱa層
	15	完形	0.71	0.41	0.09	0.11	D	郭穴は円形状。バリあり。片面扁平(断面カマボコ状)。	不明	出土地・層位不明
	16	破片	-	-	-	-	-	バリと思われる破片。	不明	出土地・層位不明



第 30 図 無文銭



図版 24 無文銭

## 8) 貝製品

貝製品は3点得られた。3点とも、墓庭Ⅱb層からの出土である。図版25-1・2は、ヒメイトマキボラの殻底を加工したもので、いわゆるホラガイ系利器と呼称されるものである\*。殻口部をある程度まで打ち割ることから、上原静氏による分類のA式に納まるものと思われる(上原1981)。類例資料は、久米島町大原貝塚やうるま市シヌグ堂遺跡などでも出土している(当真・上原1980、島袋1985)。これらホラガイ系利器は体層部に穿孔する傾向にあるが、1にはこのような特徴は見られず殻軸も研磨されない。これに対して、2は殻軸を欠損するものの体層部に穿孔しており、既報告の資料と同様の特徴を有する。そのため、1は未製品の可能性が考えられる。

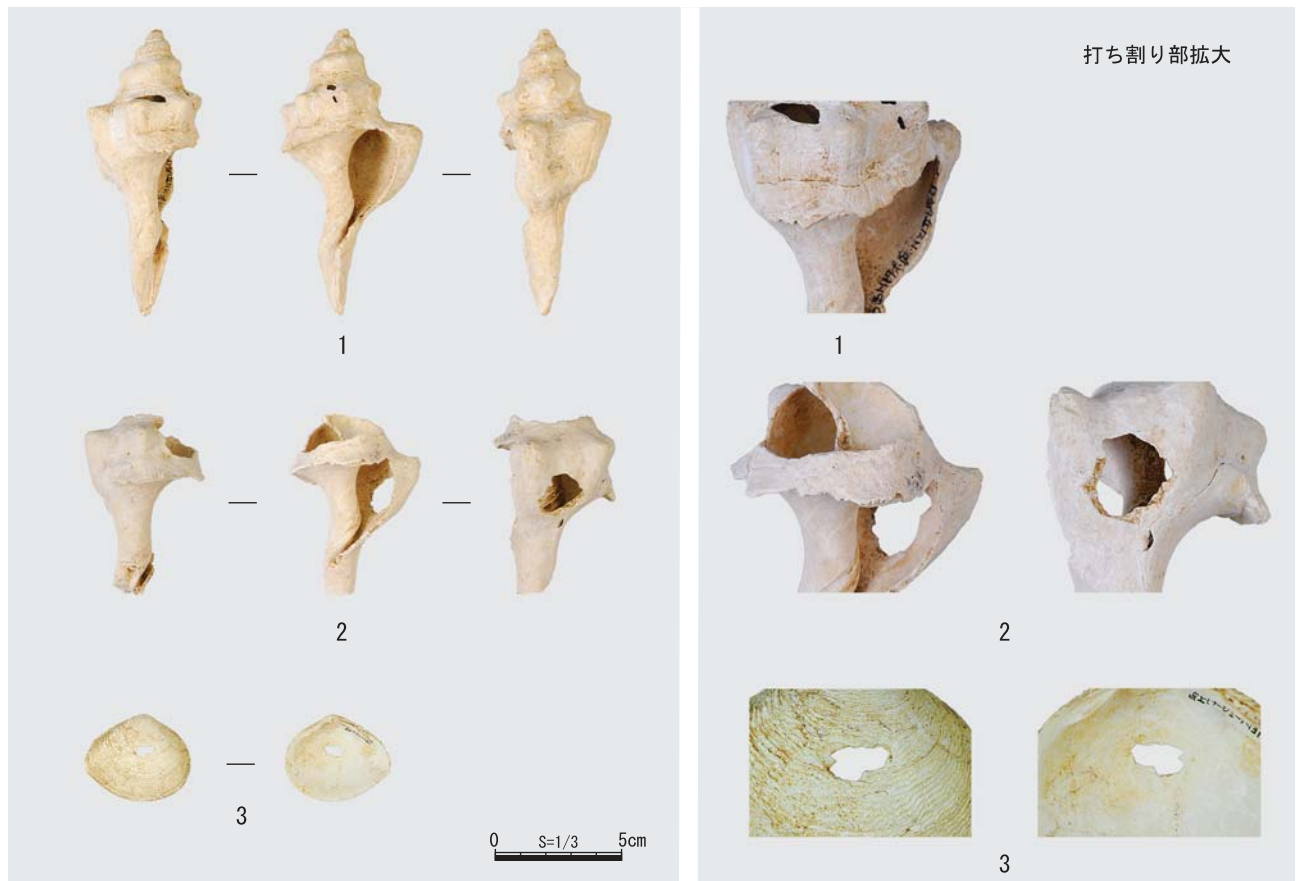
3は、二枚貝の有孔製品である。殻頂付近を2度に亘って打ち割られていることから、穿孔されたと思われる\*。

\*島袋春美氏(北谷町教育委員会)のご教示による。

第33表 貝製品観察一覧表

単位:cm/g

図番号	製品名	部位	貝種	法量				所見	出土場所	
				殻高	殻径/殻長	孔径	重量			
図版25	1	ホラガイ系利器	完形	ヒメイトマキボラ	11.5	5.6	—	67.2	殻口部を打ち割って突起部を中心に切り取り、殻軸を鋭利に強調するもの。ただし、殻軸先端は研磨されず。また、螺旋部に穿孔された形跡なし。未製品の可能性。	墓室外 庭積み Ⅱb層
	2	ホラガイ系利器	殻底部	ヒメイトマキボラ	—	5.4	1.7×1.2	43.7	1と同様に、殻口を打ち割って突起部を中心に切り取るもの。殻軸先端は欠損。体層部は穿孔される。	墓室外 墓庭 Ⅱb層
	3	二枚貝有孔製品	完形	リュウキュウシラトリ	3.3	4.0	0.7×0.3	3.5	殻頂付近に粗孔を施すもの。外面から2度に亘って穿孔される。擦痕は見られず。	墓室外 庭積み Ⅱb層



図版25 貝製品

## 9) その他の遺物

**角釘** 金属製品は、煙管や簪、無文銭のような墓に帰属するものと、戦争遺物に大きく分けられる。墓に伴う金属製品は、前述した資料の他に釘などが出土している。釘は多くが丸釘であるが、角釘片が1点得られた（第31図、図版26-1）。

**現代陶磁器** 陶磁器は前述したものの他に、現代遺物が得られている。その中で、印判染付の碗を図版に示した（図版26-2）。印判染付の出土量は少なく、全て小片である。この他の多くは仏具として用いられたものと思われる。湯飲みが最も多い器種で、現代陶磁器全体の34%にあたる。これら、現代陶磁器は全て墓室外から得られており、墓室内からは出土していない。

**ガラスビン** ガラスビンは、戦後に製造されたと思われるもので、墓に伴うものかは不明である。

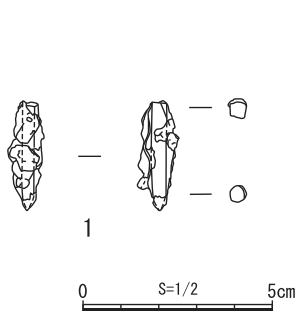
**戦争遺物** 主に銃弾（弾丸・薬莖）が得られている。弾薬の長さは30～45mm程度のものと、80～85mmほどのものに分かれる。前者は拳銃、後者は小銃あるいは機関銃のものと思われる。拳銃のものと思われる銃弾は、1点のみの出土である。弾頭の径は8mmである。8mmの銃弾を使用する国産の拳銃には、十四年式自動拳銃や九四式拳銃などがあるが、これらの使用弾薬とはサイズが異なる。

当古墓で得られた銃弾の殆どは、小銃あるいは機関銃のものである。薬莖の長さが異なる2種が得られており、短いものは1点のみの出土である（第32図-2）。第32図-2は、弾頭の径やリムの形状、当時の銃器使用状況から、九九式小銃あるいは九九式軽機関銃の弾である可能性が考えられる。両者は、あまり多く配備されなかったが、九九式軽機関銃は特に沖縄戦で活用されたという。

第34表 角釘・印判染付・ガラスビン観察表

図番号		遺物名	材質/器種	部位	法量	所見	出土場所
図版26	1	釘	金属製	先端部	断面:0.4×0.5 重量:5.03	断面方形状。角釘。木棺に使用か。大部分にサビ付着。保存状態悪い。	墓室外 墓庭1a層
	2	印判	碗	口縁部	—	直状に立ち上がる口縁部片。口唇平坦。ゴム判によって草文が印刷される。胎土粗い。砥部産か。	墓室外 墓庭1a～1c層
	3	ビン	ガラス製	完形	口径:2.5 底径:6.2 器高:16.1	遮光ガラスビン。薬瓶か。肩部に「NOT TO BE REFILLED」「NO DEPOSIT - NO RETURN」の浮き文字。外底面に会社のロゴと思われる「㊦」のマークと、製造番号と思われる「1564」の文字など。戦後と思われる。	墓室外 墓庭1a～1b層

単位:cm/g



第31図 角釘



図版26 角釘・印判染付・ガラスビン

第32図-2以外の小銃あるいは機関銃のものと思われる弾薬は、全て同じサイズである。計28点得られており、得られた銃弾の主体を占める。これらは、第32図-2の弾頭と概ね同径であるが、薬莖の長さは5mm程長い。このような銃弾は、管見では国内で製造されており、銃器は不明である。同様の資料は、南風原陸軍病院壕でも出土している（池田・後藤2000）。

宇地泊部落は、比較的平坦地にあるため、日本軍の壕は少ない。しかし、

平成17年度における分布調査によって、当遺跡範囲内に監視哨目的の壕が現在でも残ることが確認された（第3図203）。戦中において、古墓は住民の避難地や日本軍の陣地などに利用されており、戦跡としての性格を持つものも報告されている。中でも、浦添市前田・経塚近世墓群は、日本軍によって大規模で組織的に軍事利用された遺跡として注目される（安里・佐伯2003）。宇地泊部落では、区長からハンタヌシチャーの壕や奥間ノロ墓への避難が指示されたが、実際にはこれらの他に様々な壕や墓に避難したという（宜野湾市史編集委員会編1982、宜野湾市教育委員会文化課編2003）。

第35表 銃弾集計表

単位:mm/g

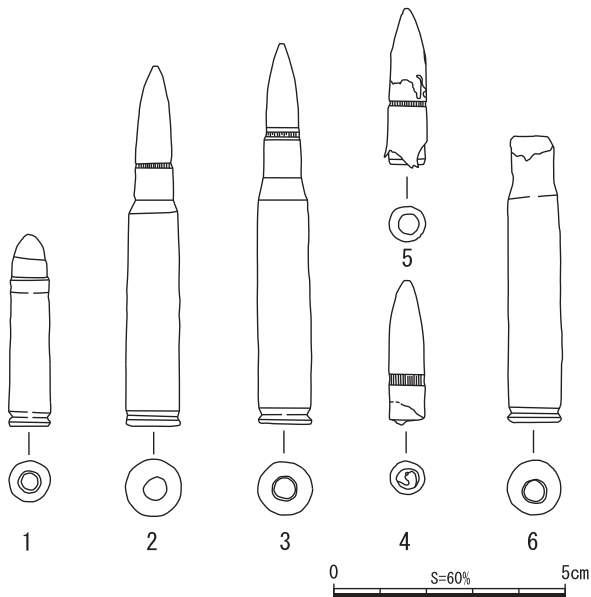
出土地	銃器	個数	部位	法量			備考		
				径	長さ	重さ			
墓庭	I a	1	薬莖	11.5	63.0	12.63	第32図・図版27-3と同サイズ		
	I a~I b	1	銃弾	7.7	22.0	80.0	第32図・図版27-2		
			薬莖	12.0	58.0				
	I c	1	弾頭	7.7	31.5	11.63	第32図・図版27-5		
ボージ石列内	II a	1	銃弾	8.0	10.5	43.0	12.43	第32図・図版27-1	
			薬莖	9.0	32.5				
	表採	8	銃弾	弾頭	7.7	21.5	84.5	25.70	第32図・図版27-3と同サイズ
				薬莖	11.5	63.0			
		1	弾頭	7.7	34.5	11.31	第32図・図版27-4		
		4	薬莖	11.5	—	12.74	第32図・図版27-6うち1点		
	I a	7	銃弾	弾頭	7.7	21.5	84.5	26.93	第32図・図版27-3
				薬莖	11.5	63.0			
		1	弾頭	7.7	—	10.13	第32図・図版27-4と同様。破片。		
		3	薬莖	11.5	—	11.99	第32図・図版27-3と同サイズの薬莖		

※銃弾は、(弾頭)+(薬莖)。複数あるもの重さは、平均値。

第36表 銃弾観察表

単位:g

図番号	銃器	部位	形状		サイズ	重さ	所見	出土場所			
			弾頭	薬莖				墓室外	墓室内		
第32図	図版27	1	拳銃	完形	フラットノーズ型?	リムレス	8.0mm×32.5?	12.4	32口径の可能性あり。ただし、ブローニング弾とは異なると思われる。	墓室外	墓庭II a層
		2	小銃か機関銃	完形	スピッツァー型	リムレス	7.7mm×58	28.7	日本陸軍が使用したと考えた場合、九九式小銃あるいは軽機関銃の銃弾と思われるもの。	墓室外	墓庭I a~I b層
		3		完形	スピッツァー型	リムレス	7.7mm×63?	26.7	国産の銃器に該当なし。サイズはM1ガーランド等の使用銃弾に近い。	墓室外	ボージ石列内I a層
		4		弾頭	スピッツァー型	—	7.7mm×63?	11.3	3と同サイズの弾頭。	墓室外	ボージ石列内表採
		5		弾頭	スピッツァー型	—	7.7mm×63?	11.3	3と同サイズの弾頭片。6とは別個体。	墓室外	墓庭I c層
		6	薬莖	—	リムレス	7.7mm×63?	12.9	3と同サイズの薬莖。5とは別個体。	墓室外	ボージ石列内表採	



第32図 銃弾



図版27 銃弾

### 10) 自然遺物

自然遺物は貝類 75 点、獣骨 31 点、石類 9 点の計 115 点が得られた。貝類遺体はこれら自然遺物全体の 65% を占め、完形も多い。また、約 80% の自然遺物が墓庭で得られており、墓室内からは得られていない。

貝類で最も多く得られたものはマガキガイ (図版 28-10) で、その出土量は貝類全体の約 13% にあたる。これらは、主にⅡ層から出土している。次いで多く得られたものはカンギク (図版 28-4) で、これも主にⅡ層からの出土である。

獣骨はブタが最も多く、獣骨全体の約 45% を占める。獣骨は破片が多く、完形で残るものは歯のみである。多くの獣骨片には切断された痕が残るため、食した後に廃棄されたものと思われる。

石類は、琉球石灰岩以外を採取した。得られた石類の多くは砂岩の類であり、石類の 56% がこれにあたる。

第 37 表 貝類集計表

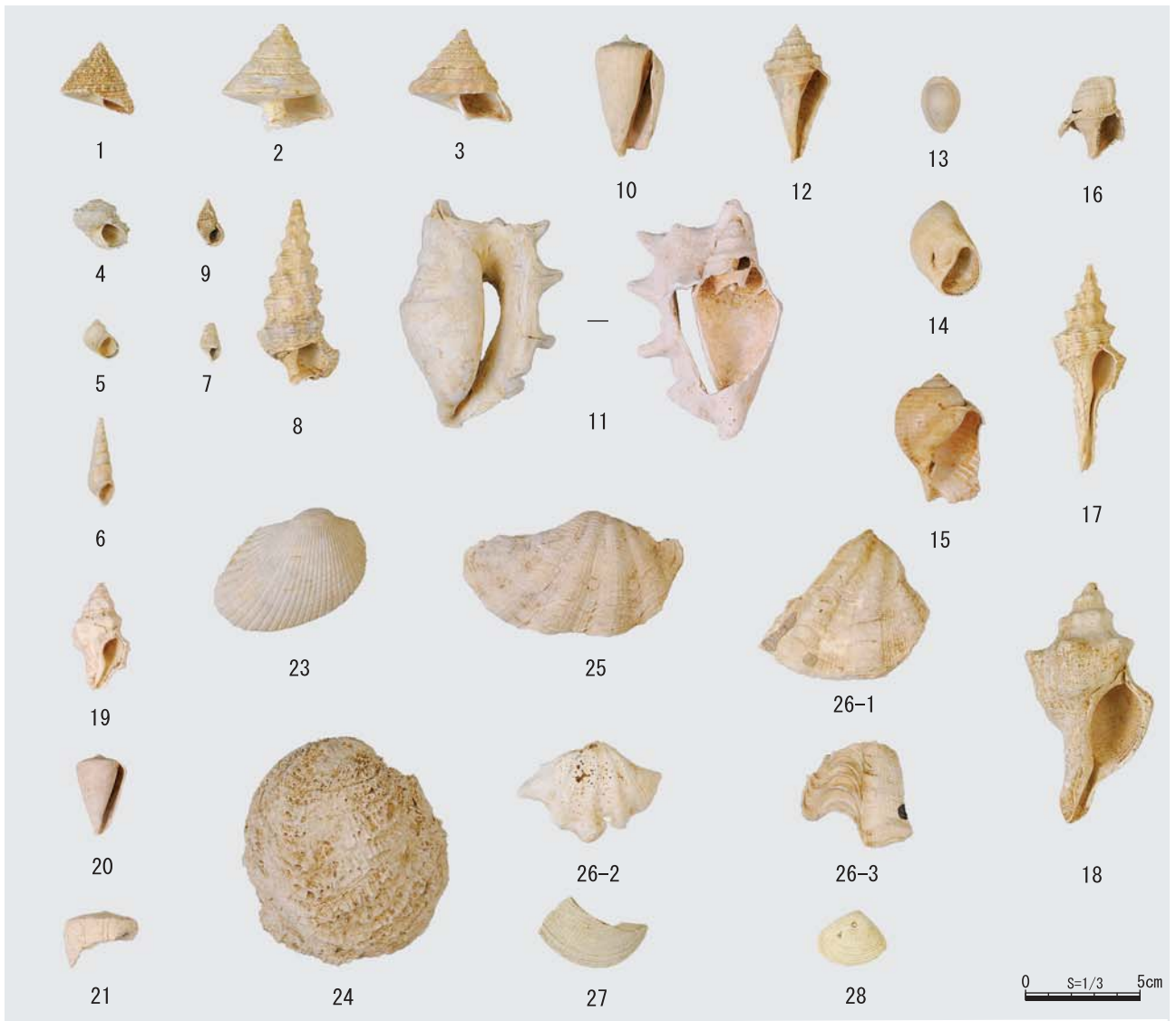
出土遺物				墓庭										庭積み		南北トレンチ		三塚台		墓口		ボージ石列内			ボージ石列外		墓室外		出土地不明	合計	最小個体数
科名	番号	貝類名	残存部	I a	I c	I a~I b	I a~I b	I a~I c	II a	II b	II c	I a	I b	II b	II d	II b	II c	II b	II a	I a~I b	II b	II c	II b	II c	表採	不明	不明	合計	最小個体数		
ニシキウズガイ科	1	ニシキウズガイ	完形											1													1	1	1		
	2	ギンタカハマ	殻頂																								1	1	1		
			破片					6				2															8	2	8		
	3	サラサバテイ	完形																								1	1	1		
			破片																								1	1	1		
	リュウテン科	4	カンギク	完形						1						1												1	2	1	
		5	コシダカササエ	完形																								1	1	1	
	トウガタカワニナ科	6	タイワンカワニナ	完形																								1	1	1	
		7	カワニナ	破片																								1	1	1	
	オニノツノガイ科	8	オニノツノガイ	完形																								1	1	1	
		9	カヤノミカニモリ	完形																								1	2	3	
	ソデボラ科	10	マガキガイ	完形							1								3									9	1	9	
				殻頂																								1	1	1	
				破片																								1	1	1	
		11	クモガイ	完形																								1	1	1	
				破片																								1	1	1	
		12	スイジガイ (幼貝)	完形																								1	1	1	
タカラガイ科		13	ハナヒラダカラ	完形																								1	1	1	
		14	ハソアキトミガイ	完形																								1	1	1	
ヤマシロガイ科		15	スクミズラ	殻頂																								1	1	1	
フジフガイ科		16	ネラガイ (幼貝)	破片																								1	1	1	
		17	チトセボラ	完形																								1	1	1	
イトマキボラ科		18	ヘメイトマキボラ	完形																								1	2	1	
			殻頂																								1	1	1		
			破片																								1	3	5		
	19	フノマタモドキ	完形																								1	1	1		
	20	サラサバテイ	完形																								1	1	1		
イモガイ科	21	クロザメモドキ	殻頂																								1	1	1		
	22	不明	破片																								1	5	1		
フネガイ科	23	リュウキュウサルボウ	完形 R																								2	2	1		
			破片 L																								1	1	1		
			破片																								3	3	3		
	キクザル科	24	シロザル	完形 R																								1	1	1	
		25	シラナミ	殻頂 L																								1	1	1	
	シャコガイ科	26-1	不明	殻頂 L																								1	1	1	
		26-2	不明	破片 R																								1	1	1	
		26-3	不明	破片																								1	2	2	
		27	ヌノメガイ	破片																								1	4	1	
	マルスダレガイ科	28	イソハマグリ	完形 L																								1	2	1	
				破片 R																								1	1	1	
29		不明	破片																								1	1	3		
合計				14	2	4	3	14	1	5	5	1	1	1	2	5	1		1	1	3	2	2	2		2	21	1	12		

第 38 表 獣骨集計表

出土遺物			墓庭										庭積み		南北トレンチ	ボージ石列内			出土地不明		合計
種類	番号	部位	I a	a~I	II a	II b	II c	II d	II b	a~II	II b	I a	a~I	II c	不明	不明	合計				
魚類	30	主上顎骨	破片														1				
	31	鳥口骨	破片														2				
	32	肩甲骨	破片				2										1				
	33	腰骨	破片					2									2				
ブタ	34	頭頂骨 (前頭骨)	破片														2				
	35	上顎骨	右 C														1				
	36	上顎骨	左 M <sup>1</sup> ・M <sup>2</sup>														1				
	37	肩甲骨	破片								8						8				
	38	腰骨	破片														2				
	39	中手骨	破片														2				
	40	上顎骨	右 P <sup>1</sup>														1				
ウマ	41	上顎骨	右 M <sup>1</sup>														1				
	42	上顎骨	右 M <sup>2</sup>														1				
	43	上顎骨	左 P <sup>1</sup>														1				
	44	上顎骨	左 M <sup>1</sup>														1				
ウシ	45	下顎骨	破片														1				
ウマ or ウシ	46	脛骨 or 大腿骨	破片														3				
不明	47	不明	破片														2				
合計				2	1	6	4	10	1	1	1				1	1	3				

第 39 表 石類集計表

出土遺物		墓庭					庭積み		墓室外		合計
番号	種類	I a~I b	I a~II c	II b	II c	I b	II a~II c	表採	不明	合計	
48	方解石 (鐘乳石片)		1							1	
49	砂岩									2	
50	石灰質砂岩			1						2	
51	片状砂岩	1								1	
52	軽石	1								1	
53	腕足貝の化石					1	1			2	
合計		2	1	1	1	1	1			9	



図版 28 自然遺物

#### 4. 自然科学分析調査の成果

##### 古墓内堆積物の分析

試料は、墓室内の敷石間を充填している土壌、敷石下の土壌、入口部の土壌である。今回は、遺体を石室内に安置した時の敷石の範囲における痕跡の有無を検討することを目的として、脂肪酸分析を含む理化学性の検討を行った。

敷石間を充填している土は、灰褐色シルトであり、試料 1 とする。敷石直下の土は、石灰岩の礫を少量含む褐色のシルト質粘土であり、試料 2 とする。また、試料 1 より入口側に位置する灰褐色シルトの敷石充填土を、試料 3 とし、入口部に位置する石灰岩を含む砂礫層を、試料 4 とした。

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編 (1986)、土壌養分測定法委員会編 (1981)、京都大学農学部農芸化学教室編 (1957)、農林水産省技術会議事務局監修 (1967)、ペドロジスト懇談会 (1984) などを参考に、腐植含量 (チューリン法)、リン酸・カルシウム含量について検討した。また、脂肪酸分析は、坂井ほか (1996) に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行った。

第 40 表 墓内堆積の土壌理化学分析結果

試料名	層位・位置	土性	土色	腐植含量(%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)	CaO(mg/g)
試料1	敷石の間隙充填堆積物	LiC	10YR4/4 褐	1.34	5.63	368.27
試料2	敷石直下堆積層	LiC	10YR4/4 褐	1.41	5.49	310.03
試料3	敷石の間隙充填堆積物(入口側)	LiC	10YR4/4 褐	1.86	5.70	258.61
試料4	入口部堆積層上部	LiC	10YR4/4 褐	1.82	4.23	292.53

注. (1) 土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

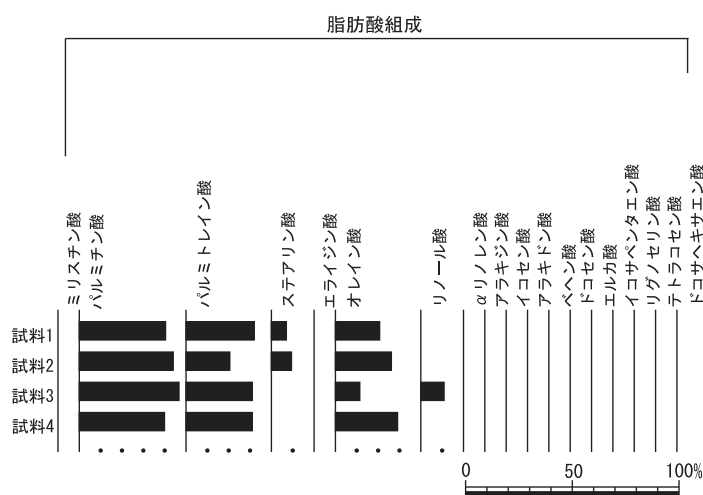
(2) 土性:土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。  
LiC・・・軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)

土壌の理化学性では、4 点の試料が、いずれも 4mg/g 以上のリン酸を含むことが注目される (第 40 表参照)。土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが

(Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991)、

これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響 (化学肥料の施用など) を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g (川崎ほか,1991) という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0mg/g を越える場合が多い。今回の試料では、骨片などは認められていないが、低い腐植含量に対していずれも天然賦存量を超えるリン酸含量値であることから、動物によるリン酸の付加が推定される。現時点では、リン酸の由来を直接明らかにすることはできないが、遺体が納められたときの痕跡の可能性も十分に考えられる。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1～50mg/g (藤貫,1979) と言われており、今回の試料は、この値を大幅に上回る。しかし、検出されたカルシウムの多くは石灰岩中のカルシウムに由来すると考えられ、特に動物による付加を示唆するものではない。

ヒトなど動物の遺体には、多くの脂肪酸が含まれているので、仮の土壌中に埋葬された場合、多くの脂肪酸が土壌中に残存することになる。また、遺体埋葬などによって脂質が遺構内に付加されると、脂質の密度の差による脂肪酸組成のばらつき、脳や臓器に多い C20 以上の脂肪酸の増加、動物性ステロールの増加などの現象が起こる。



第 33 図 墓内堆積物の脂肪酸組成

これらの点に着目することによって、その痕跡の検討を行う。

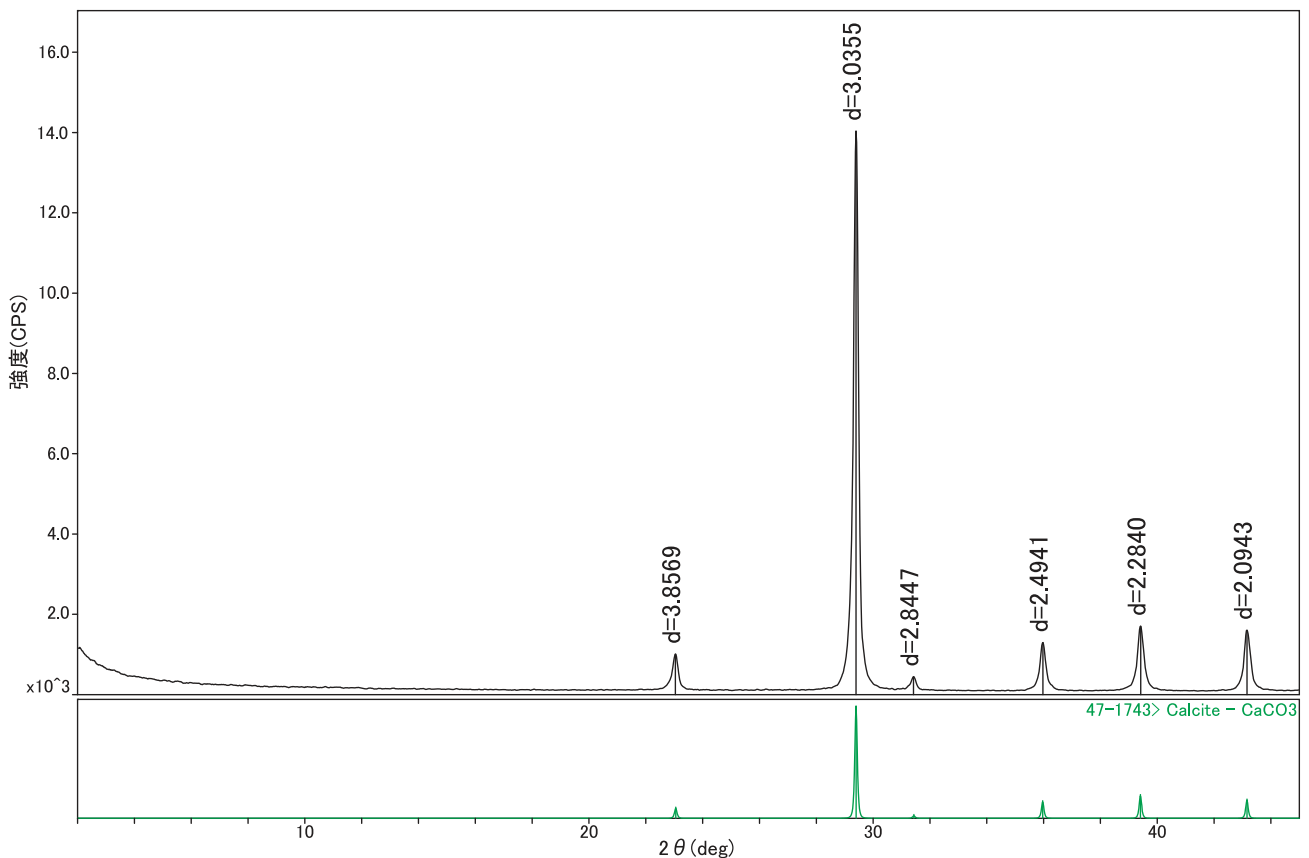
今回検出された脂肪酸は、パルミチン酸、パルミトレイン酸など分子量が小さな脂肪酸が多い。脂肪酸の分解は、炭素原子(C)が2つずつ失われることによって進み、不飽和脂肪酸については、その際二重結合が1つずつ少なくなっていく(丸山,1999など)。このような経過をたどることにより、土壌中ではパルミチン酸など化学的に安定な脂肪酸が相対的に増加する(坂井・小林,1995など)。また、内臓や脳に多いC20以上の脂肪酸は、検出されない。以上のことから、今回の組成は、経年変化により化学的に安定な脂肪酸のみが残存していると言える。

今回の結果から、リン酸含有値以外での理化学成分において、その痕跡を見出す事は出来なかった。これは、土壌の理化学的成分が、時間の経過と共に生じた変化の可能性も考えられ、現時点で遺体の安置に伴う影響を決定づけることは出来ない。今後のデータ蓄積と共に総合的な検討が必要と考えられる。

### 墓内出土漆喰の分析

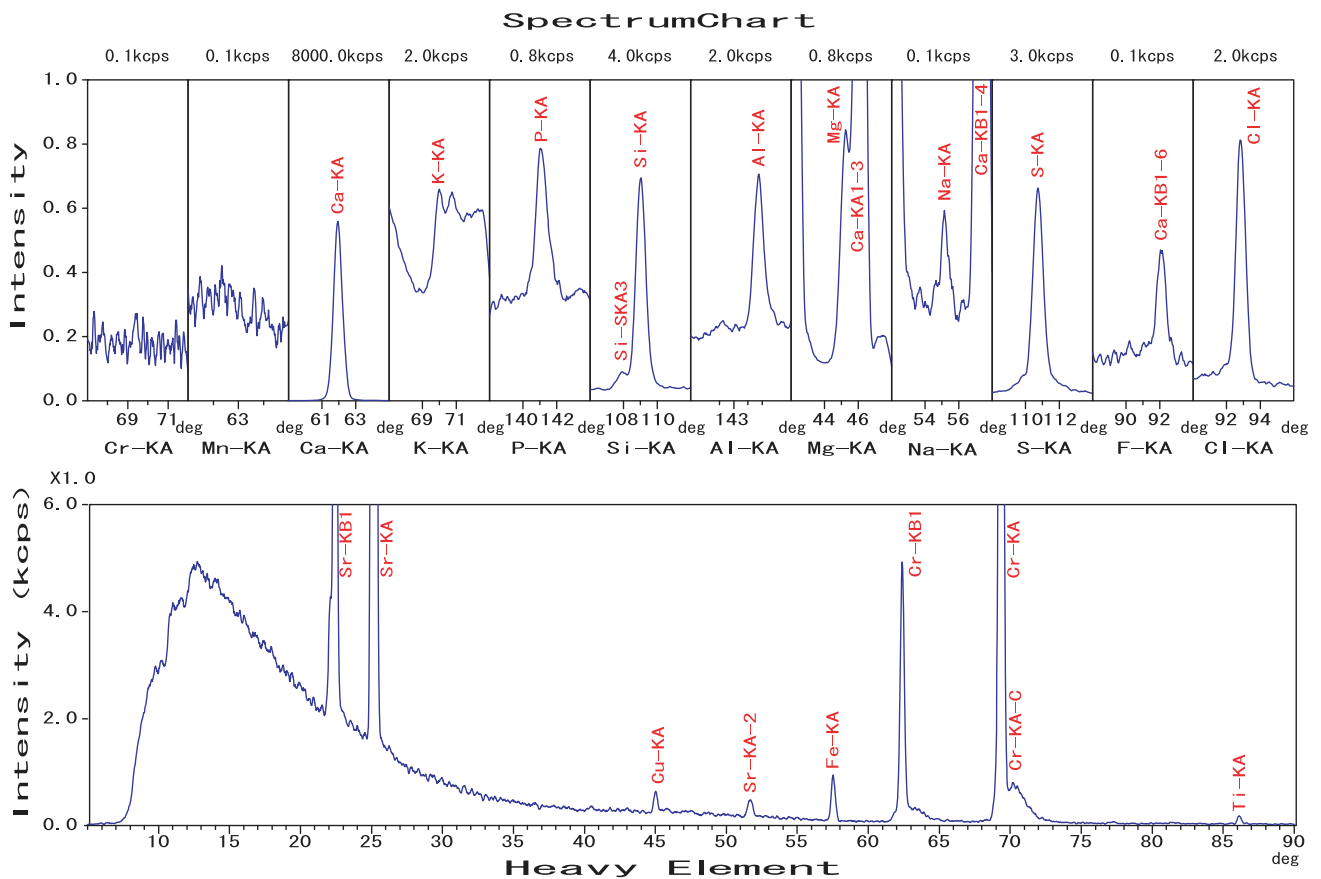
試料は、堆積物の試料を採取した墓跡の入口部の石材に付着していた白色物質(漆喰)1点である。今回は使用されている漆喰の情報を得ることを目的として、薄片作製観察・電子顕微鏡観察・植物珪酸体分析の物理的観察を行い、併せて、X線回折・蛍光X線・理化学分析の化学成分分析を行った。

試料は、化学成分分析の結果、方解石すなわち炭酸カルシウムを主体とする物質であることが確認され、植物繊維の混在も認められた。これらのことから、分析の対象とした白色物質は、消石灰を原料とし、スサと呼ばれる繊維を混ぜた建築資材である漆喰である可能性が高い。薄片観察からは、その原料として珊瑚などの生物に由来する石灰が使用されている可能性がある。また、スサに使用されている繊維は、植物珪酸体分析によるとイネ科植物に由来する痕跡がなく、それ以外の植物であることが推定される。



第 34 図 漆喰の X線回折図





第 35 図 漆喰の蛍光 X 線スペクトル

### 石材の赤色化部分の観察

試料は、墓の壁を構成する石材の中で、赤色化が認められた部分から採取した 3 点を分析に供し、薄片観察による石灰岩の赤色化の検討を行った。薄片観察は、試料を 0.03 mm の厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料番号 1 は、水酸化鉄は微量程度含まれており、有孔虫化石の室 (チャンバー) を埋めるもの、石灰藻などその他の化石片を著しく汚染するもの、および、基質に点在するものが多く、一部、クラックの周辺部に分布するものも認められる。水酸化鉄は、淡褐色～褐色であるが、試料表面部の肉眼的に淡赤色に見える部分においては、やや赤色の色調が強くなっている。この赤色の強い部分は水酸化鉄が脱水して赤鉄鉱に変化している部分である可能性が考えられる。水酸化鉄 (針鉄鉱) が赤鉄鉱へ変化する温度は、270-325℃程度とされており、試料表面部における赤色化した部分は、焼成による影響を表している可能性がある。

試料番号 2 も試料番号 1 と同様に、試料表面部における水酸化鉄の赤味が強くなる状況が見られ、焼成による影響を表している可能性がある。

試料番号 3 は、水酸化鉄は微量～きわめて微量程度含まれており、主に基質の化石片の粒間に散在する。一部、有孔虫化石の室 (チャンバー) 内に分布するものや、その他の化石片を汚染するものなども認められる。水酸化鉄は、淡褐色～褐色であり、試料表面部と内部における顕著な色調の違いは認められない。鏡下からの焼成の判定はできないが、肉眼的に赤色化が認められることから、試料番号 1 および試料番号 2 の試料と同様に、焼成の影響の可能性はある。

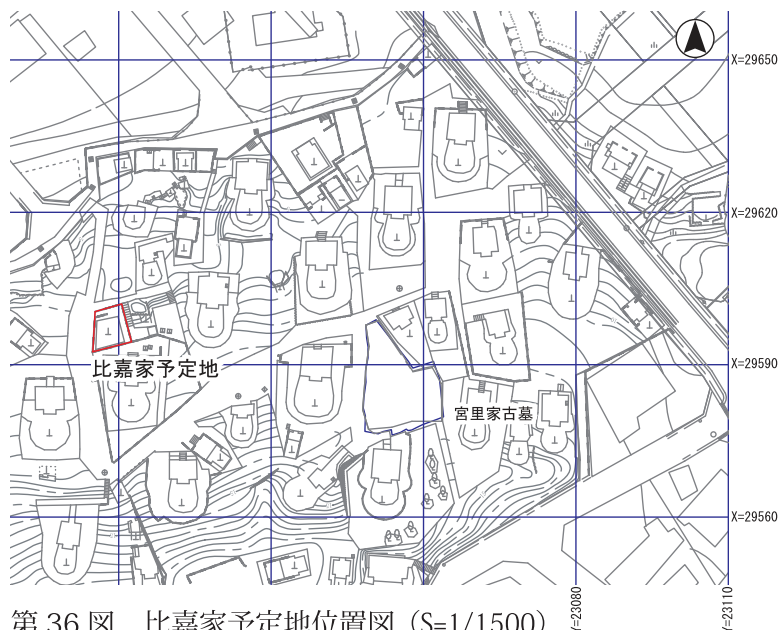
### 第3節 比嘉家予定地不時発見古墓発掘調査の成果

#### 1. 調査の概要

比嘉家予定地不時発見古墓の調査に至る経緯や個人墓地造成に伴う地権者や県文化課との保護調整等の詳細については、第I章第1節を参照されたい。

調査対象となった比嘉家予定地不時発見古墓は、宮里家古墓の北西側に所在する慰霊碑「宇魂の塔」の南西側に位置しており、比嘉憲松氏による個人墓地造成工事の際に不時発見された古墓である。

以下に、当該古墓調査概要について記す。



第36図 比嘉家予定地位置図 (S=1/1500)

#### 2. 遺構

調査着手時には、既に重機により古墓天井部分が損壊されて大きく口を開けており、古墓正面の石積みや墓室内床面についても大きく損壊している状態であった。墓正面に配されていた石積みは、その端部において北側と南側で一部残存しており、その特徴から相方積みによる手法にて墓正面が構築されていたことが確認できた。特に南側については、墓正面から庭積みにかけて検出されており、北側・南側いずれの石積み遺構についても、その検出状況から現在の地表面をなす造成層中に延長して残存していることが予想された。

墓室内については、基盤となる石灰岩を掘り込んで構築されており、東側奥と北側には厨子を安置する際の棚としての機能が想定される段状の平坦面が確認されている。また、石灰岩の掘り込みされた状態からは、墓室内の天井部分へと移行する立ち上がり天井部分をなすであろう掘り込みが確認されていることから、予想された断面ラインを第36図において図示している。

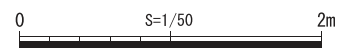
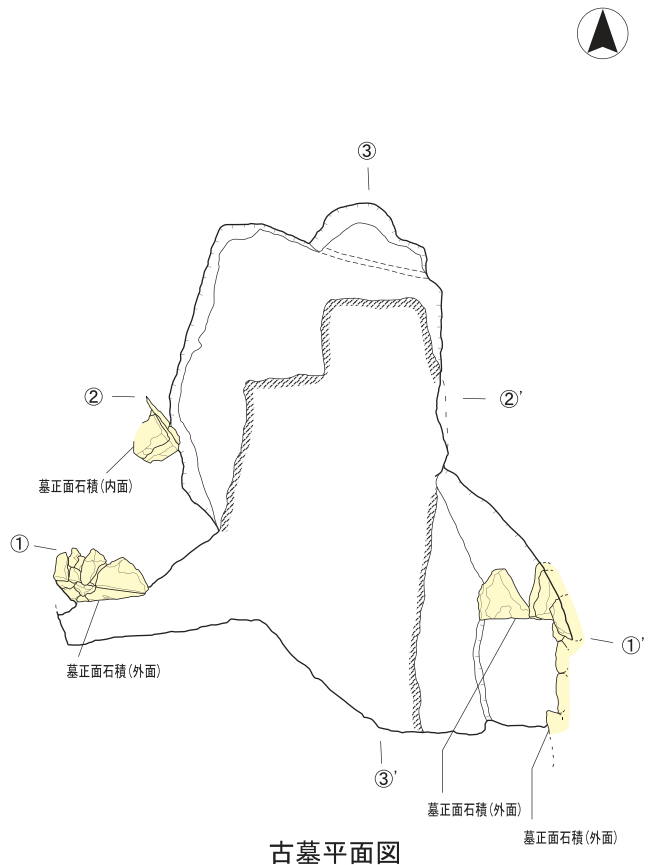
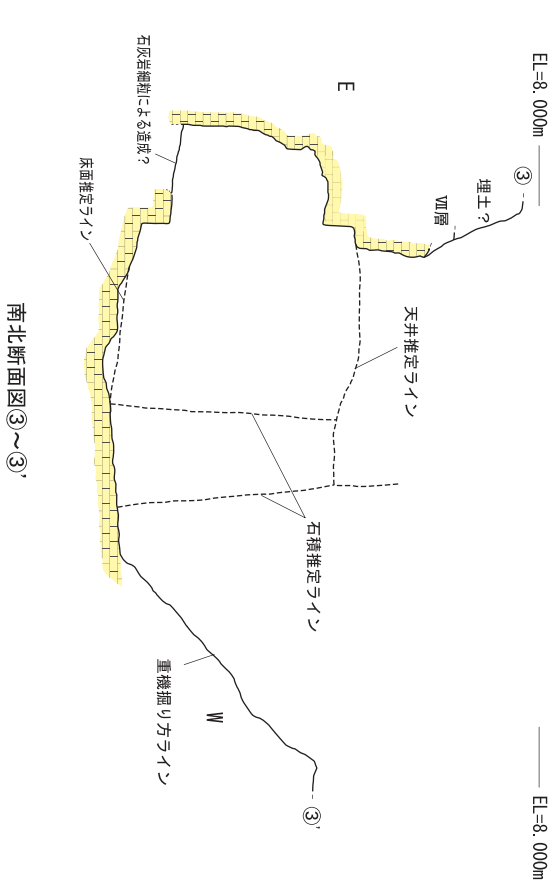
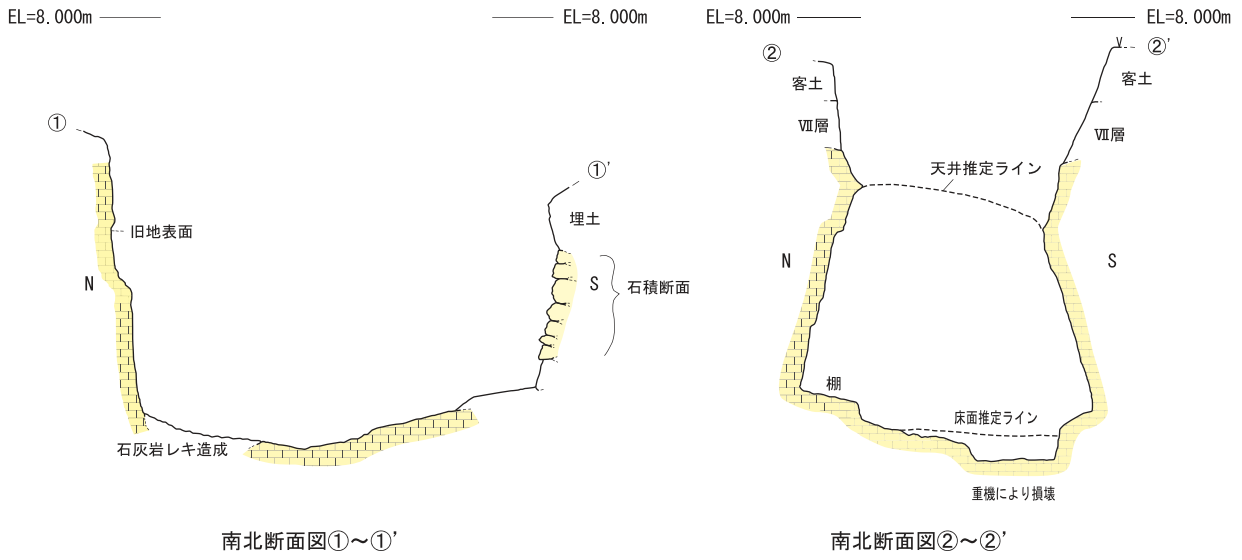


遺構確認作業



完掘作業

図版 29 調査経過



第 37 図 比嘉家予定地不時発見墓平面図・断面図

### 3. 遺物

比嘉家予定地不時発見古墓では、17 点の人工遺物と 5 点の自然遺物が得られた（第 41 表）。人工遺物は概ね沖縄産の陶器で、その中でも蔵骨器が大半を占める。いずれも小片のため、器形の復元はできない。

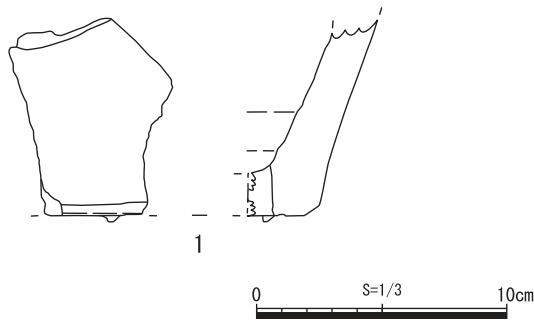
1 は、底面が穿孔された、ボージャーの底部片である。内面は回転ナデ、外面はヘラ状工具によって調整される。反時計回りのロクロによる成形である。外面には、回転調整後に斜位のハケが施される。

2・3 は、ボージャーの胴部片で、圏線が廻るものである。両者とも、内外面を回転ナデによって仕上げるが、ロクロの回転方向は不明瞭である。3 は、回転調整後に斜位の調整痕が認められる。4 は、ボージャーの底部で立ち上がる部分の破片である。底径は 20.6 cm 程度になると思われる。

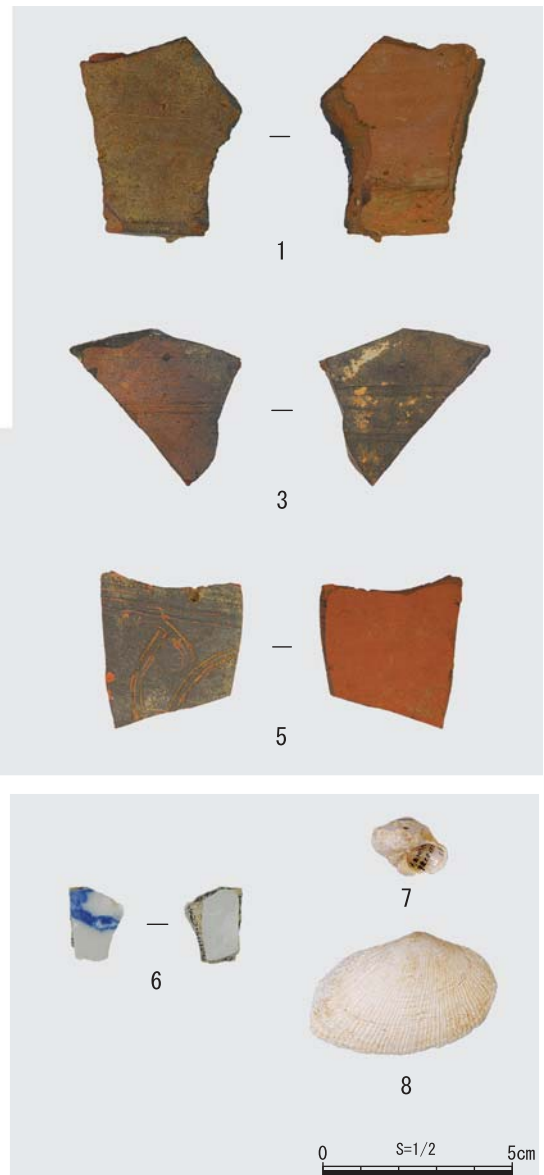
5 は、マンガン掛けの蔵骨器の胴部片である。蓮花の線彫文の上部には、圏線が数条廻る。6 は、印判染付の碗である。小片のため不明確であるが、底部上位ないし腰部付近の資料と思われる。ゴム版による印刷であるが、図柄は不明である。

第 41 表 出土遺物集計表

出土遺物			出土数
人工遺物	蔵骨器	ボージャー	胴部 8
			底部 2
	沖縄産施釉陶器	マンガン掛け	胴部 2
		袋物	胴部 1
	沖縄産無釉陶器	壺か甕	胴部 1
		器種不明	胴部 1
陶質のアカムヌー	器種不明	胴部 1	
印判染付け	碗	胴部 1	
自然遺物	巻貝	カンギク	完形 1
	二枚貝	リュウキュウマスオ	完形R 1
	獣骨	ウシ下顎骨	RP <sub>3</sub> 1
		不明	破片 2
合計			22



第 38 図 比嘉家予定地不時発見古墓出土ボージャー底部



図版 30 比嘉家予定地不時発見古墓出土遺物

## 第Ⅳ章 結 語

前章までに、平成 16～17 年度・平成 19 年度にかけて実施した宇地泊西原丘陵古墓群における詳細分布調査と個人墓地造成に伴う緊急発掘調査の成果について述べてきた。ここでは、これまでの調査成果について整理して、課題や問題についてまとめることで本報告の結語としたい。

平成 17 年度と平成 19 年度においては詳細分布調査と補足調査を実施しており、その調査成果より宇地泊西原丘陵古墓群にて確認された墓の総数は 189 基となっている。調査に際しては、本古墓群における詳細な墓の位置を把握するために実施した地形測量図を基にして、便宜上、本古墓群が立地する丘陵を 7 地区に区分しており、以下に、各地区において把握された組成と傾向について整理する。

墓の立地と方向については、内陸を向く墓が 1 地区・6 地区・7 地区に比較的多い傾向が見られる。特に 1 地区は地形的な特徴から概ね西側を向いており、比屋良川との関連性が考慮される。その他の傾向としては、比屋良川と平行する西側丘陵には亀甲墓が集中し、東側には家形墓が集中する傾向が見られた。また、7 地区は、現在丘陵が削平されており、整地造成後に新規の墓が主体的に造営されているようである。墓型式別に立地と方向の傾向を見た場合、地形本来の特徴を利用する洞穴・岩陰墓（Ⅰ類）は、概ね内陸を向いており、掘込墓・破風墓・平葺墓・亀甲墓（Ⅱ類）については海岸を向く傾向が強いようである。これに対して家形墓・仮墓（Ⅲ類）は向きが一定していないことが把握された。

墓型式の割合等については、新規墓の造営に伴い古墓の改築や消失の憂き目に晒されている状況にあることから、データベース作成時における情報を基に述べることとする。本古墓群で最も多い墓型式となっているのは、本土復帰以降より主流となっている家形墓（Ⅲ a 類）であり、仮墓（Ⅲ b 類）を含めたⅢ類の総数は、本古墓群の過半数を占めている。その一方、Ⅱ類は全体の 4 割を占めており、Ⅲ類と辛うじて拮抗する状況であった。また、1 地区では崖面を利用した墓の造営がなされているためⅠ・Ⅱ類墓が主体となっている。特に、Ⅰ類墓は地形的な特徴とリンクするため、1 地区を特徴付ける墓型式であると言える。1 地区のその他の傾向としては、Ⅱ類墓は a 類のみが確認されており、Ⅱ a 類の 86% が 1 地区に集中している。2・3 地区は、墓型式の組成に特徴的な傾向は見られないが、緩斜面であることからⅡ類墓が比較的多く、4 地区も同様の傾向である。5 地区は平地や整地された地所が多いことに加えて、仮墓が多いためⅢ類墓が主体をなす。6 地区は丘陵南側の急斜面であるが平地式のⅢ a 類が主体となる傾向が見られた。7 地区は丘陵頂を削平した整地部分であることからⅢ a 類が主体をなす傾向が把握された。

宮里家古墓の緊急発掘調査については、周知の遺跡である宇地泊西原丘陵古墓群において、各種調査が必要と判断される古式亀甲墓が所在する地所において、個人墓地造成による造成工事がなされているのを確認したことに端を発しており、これまでに述べてきたとおり緊急調査に着手する時点で、既に造成工事により古墓前面部分が損壊され、眉や一部袖石等が崩落している状況であった。幸いにも、損壊前の本古墓の状態を記録した写真資料が存在したことや損壊直後にレーザー測量等を実施していたことで、これらの情報を基に残存する古墓上部・墓庭部の表層部分・庭積み・古墓正面・墓室内等については記録化することができた。

本古墓は、型的には亀甲墓（Ⅱ d 類）に分類され、損壊前の写真資料から判断すると、亀甲墓の特徴的な形態である眉については、眉頂部の曲がり具合が弱い・比高が低い・眉両端の反りが弱いという傾向が認められる。また、墓口正面は鏡石・門冠い・隅石の存在する定型化された石積み手法ではなく、相方積みの仕様により構築されていた。また、屋根の平面的形状がいわゆるボージと称される亀甲墓の特徴的な形態を成しており、3 層からなる石灰岩礫等の造成によりボージ頂部を構築し、ボージ周縁に石列を U 字状に配石している。墓庭については、緩斜面地形を平坦面とするために大規模な造成を施しており、三味台と一連の造成が施されている。庭積みは各袖石から西側へと広がり、北側庭積みは袖石に連なる部分で丁寧な切石

による相方積みが見られるが、墓庭西側へ行くにつれて雑になっている。南側庭積みは、露頭する石灰岩の間隙を埋めるような丁寧な相方積みであった。墓口は石畳様の敷石で平坦面が形成され墓室内へと続く。シルヒランには棺桶安置用の台座が加工されており、下位面には石畳敷石による平坦面が形成されている。墓室内には出窓状に柵が構築され、正面右の柵は集骨機能も有す。天井は石灰岩板石を3枚配石して平坦に構築されており、全体的に非常に丁寧に造りとなっている。このような古式要素と定型化された要素が重複しているという本古墓の形態的要素は非常に特徴的であると言え、宜野湾市最古の墓とされる大山上江家の古式亀甲墓（1699年仕立て）に後続するタイプの古墓として評価できるものと思われる。

出土遺物の傾向としては、蔵骨器や副葬品等の葬送儀礼関連の遺物が顕著で、特に無文銭が三味台や墓庭直上に集中して出土しており興味深い。その他、円盤状製品が9点得られているが、そのうちの3点は墓庭造成層のⅡb層から得られている。直接的に古墓との関連性が指摘できない資料についても、他の古墓報告例との比較から、その詳細について知り得るものと考えられることから、今後の検討事項としたい。

宮里家古墓調査では自然科学分析調査についても積極的に実施している。まず、墓室内の敷石下造成土の試料を基に脂肪酸分析を実施したが、分析結果からは遺体の安置に伴う情報は得られなかった。墓室内壁面に塗布された漆喰に関する分析では、母材の由来が判断されており興味深い。また、損壊前の写真資料からも見て取れるように古墓正面部分は赤色化が著しい状況であったが、特に赤色化の激しい石材の剥片観察の結果からは、焼成による変色が指摘されており、二次的被熱による影響が指摘されている。

最後に、監視哨的な陣地壕についても触れておきたい。聞き取り調査により把握された当該陣地壕は、丘陵斜面地形を巧み利用して丘陵南側から西側の海岸を望むように掘り込まれており、この監視哨的な陣地壕により第4図-29（平草墓）の墓庭は大きく陥没している。これにより壕の一部であると理解できる双方の開口部が、ほぼ直線的に繋がることが推測できる。本市における戦争遺跡は、10例前後が確認されているに過ぎないが、このような負の遺産が未だ風化せず静かに存在するという現実についても今後は積極的に評価していきたい。

宇地泊西原丘陵古墓群は、市内の古墓群においても特に現状変更が著しく、その保護活用に向けた巡回や文化財情報図の適宜改版とその周知が急務である。自治会や市開発部局、民間開発者に対する周知徹底や情報公開等の重要性を改めて認識させられた。併せて、緊急調査に対する効率的・効果的調査手法についても、今後の課題として痛感させられた。早急に新たな調査手法の確立を図っていききたいと考える。



監視哨的な陣地壕 東側開口部



同 陥没状況（第4図-29墓庭）



同 西側開口部



宇地泊西原丘陵古墓群（遺跡北方より）

## 参考文献

### 第II章 遺跡の位置と環境

- 宜野湾市史編集委員会編 1994『宜野湾市史』第一巻 通史編 宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市史編集委員会編 1982『宜野湾市史』第三巻 資料編二 市民の戦争体験記録 宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第五巻 資料編四 民俗 宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市教育委員会文化課編 2000『宜野湾市史』第九巻 資料編八 自然 宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市教育委員会編 2002『宜野湾市文化財情報図』〔平成十三年度版〕(宜野湾市文化財保護資料第52集) 宜野湾市教育委員会
- 呉屋義勝 1991「第1章 第1節 1. “じゃな”遺跡群」『じゃな I - 真志喜区画整理地区の宅地造成に係る発掘調査報告 - 』  
〔本文編〕(宜野湾市文化財調査報告書第14集) 宜野湾市教育委員会
- 呉屋義勝 1994「第1章 第1節 3. 歴史的環境」『真志喜森川原遺跡 - 個人住宅建設に係る緊急発掘調査報告書 - 』  
(宜野湾市文化財調査報告書第18集) 宜野湾市教育委員会
- 呉屋義勝 1996「第1章 第1節 3. 歴史的環境」『奥間ノロ墓 図録編解説 - 一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書 - 』  
(宜野湾市文化財調査報告書第24集) 宜野湾市教育委員会
- 地主園亮・川元哲哉ほか 2002『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査』(II) - 中部編 - (沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第12集)  
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 宮城真治 1988『沖縄地名考』名護市教育委員会

### 第III章 第1節 遺物の内容

- 呉屋義勝ほか編 1989『土に埋もれた宜野湾』(宜野湾市文化財調査報告書第10集) 宜野湾市教育委員会
- 名護博物館編 1994『祝い・祀り・墓 - 名護市の人生儀礼と墓 - 』(企画展⑫) 名護博物館
- 福島駿介 2007「第11章 建築学から見た銘苴古墓群」『銘苴古墓群 - 重要遺跡確認調査報告 - 』(那覇市文化財調査報告書第72集)  
那覇市教育委員会

### 第III章 第2節3. 遺物

- 安里 進・佐伯信之 2003「沖縄県浦添市の近世墓調査」『考古学ジャーナル』No.498(株)ニュー・サイエンス社
- 安和吉則 2007「前田・経塚近世墓群」『市内遺跡発掘調査報告書(1) - 平成13～18年度調査報告 - 』  
(浦添市文化財調査研究報告書) 浦添市教育委員会
- 池田榮史・後藤雅彦 2000「第4章 第4節 1997(平成9)年度の調査」『南風原陸軍病院壕群 I - 沖縄県南風原町所在南風原陸軍病院壕群の考古学的調査報告書 I - 』(南風原町文化財調査報告書第3集) 南風原町教育委員会
- 伊藤厚史 2002「兵器類 - 小銃・弾薬を中心に」『しらべる戦争遺跡の事典』十菱駿武・菊池 実編 (株)柏書房
- 上江洲均 1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 - 歴史・民族篇 - 』(国分直一博士古稀記念論集) (株)日本教育図書
- 上原 静 1981「いわゆる南島出土の貝製利器について(特にスイジガイ製利器とホラガイ系貝製利器について)」『南島考古』第7号  
沖縄考古学会
- 上原 静 1986「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 読谷村教育委員会
- 金城亀信 1993「第V章 第13節 陶質土器」『湧田古窯跡(1) - 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 - 』(沖縄県文化財調査報告書第111集) 沖縄県教育委員会
- 金武正紀 2007「第6章 考古学から見た銘苴古墓群」『銘苴古墓群 - 重要遺跡確認調査報告 - 』(那覇市文化財調査報告書第72集) 那覇市教育委員会
- 宜野湾市史編集委員会編 1982『宜野湾市史』第三巻 資料編二 市民の戦争体験記録 宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市教育委員会文化課編 2003『ぎのわん市の戦跡』〔第2版〕 宜野湾市教育委員会文化課
- 島福善弘・松田博文 1988「田井等遺跡」『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書 - フガヤ遺跡、田井等遺跡、羽地間切番所跡遺跡、仲尾次上グスク遺跡 - 』(名護市文化財調査報告8) 寺田末子編 名護市教育委員会
- 島袋春美 1985「第IV章 第4節 貝製品」『シヌグ堂遺跡 - 第1・2・3次発掘調査報告 - 』(沖縄県文化財調査報告書第67集) 沖縄県教育委員会
- 曾根信一 1983「アカムヌー」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄大百科事典刊行事務局編 沖縄タイムス社
- 玉木順彦 2004「第4章 第3節 3 内間西原近世墓群に関する民俗学的所見」『内間遺跡 内間カンジャーヤーガマ遺跡 内間西原近世墓群Ⅲ - 浦市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査 - 』 浦添市教育委員会
- 知名定順・金城利枝 1988「A地区 クジチ墓」『宜野座村乃文化財(6) - クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書 - 』 宜野座村教育委員会
- 当真嗣一・上原 静 1980「大原 - 久米島大原貝塚発掘調査報告 - 』(沖縄県文化財調査報告書第32集) 沖縄県教育委員会
- 那覇市立壺屋焼物博物館編 1998「アカムヌー」『壺屋焼物博物館 常設展ガイドブック』(株)尚生堂
- 兵頭二十八 1995『日本の陸軍歩兵兵器』(株)銀河出版
- 松川 章・宮里信勇・玉城京子・大城逸朗 1994「第IV章 第2節(6) 墓道表採資料」『内間西原古墓群 - 都市計画道路工事に伴う緊急発掘調査 - 』(浦添市文化財調査報告書第22集) 浦添市教育委員会
- 宮城弘樹 2007「第IV章 第3節 出土銭貨の研究」『沖縄貝塚時代の終焉とグスク出現に関する研究 - 研究成果報告書 - 』  
(平成18年度 科学研究費補助金(奨励研究) 研究課題番号18904017)
- 森田直哉 2005「第2章 第3節 遺物」『嘉数テラガマ洞穴遺跡 - 都市計画街路3-4-66号線建設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 - 』  
(宜野湾市文化財調査報告書第35集) 宜野湾市教育委員会
- 是光吉基 1993「国内出土のいわゆる無文銭について」『考古論集』潮見浩先生退官記念論集  
(潮見浩先生退官記念論集) 潮見浩先生退官記念事業会

### 第三章 第2節4. 自然科学分析調査の成果

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36p.
- 荒尾知人・岡野正豪・金森哲夫,1995,GC-MSによる土壌中のリン脂質脂肪酸組成の分析.日本土壌肥料学会関東支部群馬大会講演要旨集,9p.
- Black,C.A.&Evans,D.D.,1965,METHOD OF SOIL ANALYSIS Part2.AMERICAN SOCIETY OF AGRONOMY,1572p.
- Bowen,H.J.M.,1983,環境無機化学-元素の循環と生化学-.浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980,土壌の化学.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳,学会出版センター,309p.
- 地質調査所,1977,地球科学的試料の化学分析法2.工業技術院地質調査所,619p.
- 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法.博友社,354p.
- 土壌養分測定法委員会編,1981,土壌養分分析法.養賢堂,440p.
- 藤貫 正,1979,カルシウム.地質調査所化学分析法,52,57-61p.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久,1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27p.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64p.
- 京都大学農学部農芸化学教室編,1957,農芸化学実験書 第1巻.産業図書,411p.
- 丸山 工作,1999,生化学入門.裳華房,188p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- パリーノ・サーヴェイ株式会社,1991,自然科学分析.東京都新宿区戸山遺跡一厚生省戸山研究舎(仮称)建設に伴う緊急発掘調査報告書一本文編,戸山遺跡調査会,133-168p.
- ペドロジスト懇談会,1984,野外土性の判定.ペドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック,博友社,39-40p.
- 坂井 良輔・小林 正史,1995,脂肪酸分析の方法と問題点.考古学ジャーナル,ニューサイエンス社 386,9-16p.
- 坂井 良輔・小林 正史・藤田 邦雄,1996,灯明皿の脂質分析.富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)第二分冊,財団法人 富山県文化振興財団,24-37p.
- 筒木 潔・近藤連三,1997,泥炭地植物のフェノール性化合物,脂肪酸,ステロール組成.日本土壌肥料学雑誌,68,37-44p.
- 筒木 潔・近藤連三,1998,泥炭地の乾燥化と植生変化に伴う泥炭の脂質組成の変化.日本土壌肥料学雑誌,69,12-20p.



## 報告書抄録

ふりがな	うちどまりいりばるきゅうりょうこぼぐん							
書籍	宇地泊西原丘陵古墓群							
副書名	詳細分布調査・個人墓地造成に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	城間 肇、伊藤 圭、上田圭一、斎藤嵩人、橋本真紀夫							
発行機関	沖縄県 宜野湾市教育委員会							
所在地	郵便番号 901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちどまりいりばるきゅうりょうこぼぐん 宇地泊西原丘陵古墓群	ぎのわんし 宜野湾市 うちどまり 宇地泊 こあざいりばる 小字西原	4720		127° 43′ 44″	26° 16′ 14″	2005.3 ～ 2008.5	192㎡	詳細分布調査  個人墓地造成に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宇地泊西原丘陵古墓群	その他の墓	近世～現代	亀甲墓 ボージ・眉・袖石 三味台・墓庭・庭積み シルヒラシ・柵等  掘込墓 墓正面石積・庭積み		蔵骨器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 アカムヌー 中国産陶磁器 煙管・簪 円盤状製品 金属製品 貝製品		詳細分布調査の結果、 189基の墓が確認され ている。  太平洋戦争時の監視哨 的な陣地壕が確認され ている。  宮里家古墓については 古式亀甲墓であると 想定される。	
要約	<p>本報告書は、周知の遺跡である宇地泊西原丘陵古墓群における詳細分布調査と個人墓地造成に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものである。詳細分布調査の結果、洞穴墓・岩陰墓・掘込墓・破風墓・平葺墓・亀甲墓・家形墓等が189基確認されたほか、監視哨的な陣地壕が確認されている。また、個人墓地造成に伴い緊急発掘調査を実施した宮里家古墓については、眉・ボージ・墓正面等の外部構造や天井・柵・シルヒラシ等の内部構造に見られる特徴的な形態から、当該古墓が古式の亀甲墓であると想定されており、宇地泊地域を含めた宜野湾市内の造墓習俗等を考える上で非常に重要な資料であると言える。</p>							

宜野湾市文化財調査報告書 第42集

## 宇地泊西原丘陵古墓群

詳細分布調査・個人墓地造成に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

発行年 2008(平成20年)3月31日

編集  
発行 沖縄県宜野湾市教育委員会

住所 〒901-2203  
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号  
TEL 098-893-4431

印刷 〔株〕東洋企画印刷 宜野湾営業所  
〒901-2211  
沖縄県宜野湾市宜野湾1-4-6  
TEL 098-892-3644